
雉飼 狂子と魔道書【んこみのろくね】

瑠璃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雉飼 狂子と魔道書【んこみのろくね】

【Nコード】

N5212A

【作者名】

瑠璃

【あらすじ】

某都道府県Sのベッドタウン仏滅町。名前は不吉で縁起が悪いのだが至って普通であり、特に大きな事件もなく穏やかで平和な日々を人々は享受していた。さて、そんな仏滅町の平和という名の表の顔とは裏腹に、人々の目には触れぬ陰の部分で今まさに悪の萌芽が芽生えようとしていた。

プロローグ

―プロローグ―

僕の名前は雉飼 狂一。

某都道府県S市のベッドタウン仏滅町に住むありていに言えば、どこにでもいるようなごくごく普通の高校2年生。

強いて他人と違うかなって思えるところは学者であり、考古学者でもある父親である雉飼 狂蔵が、

『この惑星、地球はかつて太陽系外からやって来た異形の邪神によって支配されたいのだ!』

こんなワケの分からない学説を学会で発表したことで、“別の意味”で有名なところだろうか？

さて、そんな僕に対し、『しばらく旅に出るぞ!』と言い残し旅立つが、定期的に連絡をくれた父、狂蔵の消息が、ある日を境にプツツリと途絶えるのだった。

第一話「さらば僕の平和な日々よ」その1

第一話「さらば僕の平和な日々よ」 その1

「ん、んん……ああ、今日はなんて清々しい朝なんだろう。これは神様が与えてくれた至福の時なんだろうな。ありがとう、ありがとう、神様」

今日も清々しい清涼感あふれる朝をやってくる。

そんな朝を向かられたことに感謝感激の一言を神様に祈りながら、僕はベッドから身を起こす。

「ん、それにしてもなんだろ、妙な気配を感じるんだけど……つと、うわああああ!!」

だけど、至福に包まれる和やかな時間もあったと言う間に終焉を迎える。

次に瞬間、ベッドの布団の中からなにかが飛び出してくる。

「ど、どわあああつ! きよ、狂子さん!」

布団の中から飛び出してきたのは、男物のブカブカのワイシャツという艶かしい格好をした髪の高い美女……もとい僕らの天敵と言っても過言ではない叔母の狂子さんであった。

「うわっ! 離れてよ、狂子さん!」

布団の中から飛び出してきたまではない……つとそんなわけにいかないだろ! ……つとばかりに狂子さんは、自前の大きな熟し実った果実のような胸を僕の顔に押しつける形で覆いかぶさってくる。「ん……おはよう……。あらあ……またあんたの部屋と自分の部屋を間違えたみたいだわ」

えへへ、と舌を出し、左目をウィンクさせながら、まるで何事もなかったかのような大あくびをする狂子さん。

（わ、わざとだな！　どんな嘘をついても僕にはわかるんだぞ！）
僕はキツと双眸に敵意を彩らせてながら、自前の大きな胸を押しつけた形で覆いかぶさっている狂子さんを押し退けると、勢いよくツドから飛び起きる。

「あらあら、いきなりなにをするのよお」

（う、うおっ！）

僕に押し退けられ、仰向けにベッドに倒れこむ狂子さん。その姿を改めて観ると、如何にも妖しく、そして蠱惑的な姿である。そんなわけで僕は思わず興奮し、ドバツと大量の鼻血が噴出しそうにような気分となるが、『僕は正常だ、正常だ』と胸中でつぶやきながら、必死に興奮する自分を抑え込むのだった。

僕こと雉飼　狂一にはごくごく普通の高校2年生。自分ではそう思ってるつもりなんだけど、家族には問題がありすぎ……特に叔母である狂子さんが――

狂子さんは、今どこにいるのか？　その行方がさっぱり分からない父親である雉飼　狂蔵の年の離れた腹違いの妹ということ僕としては叔母に当たる存在である。17歳の僕とは9歳年が離れているってことで現在26歳。容姿端麗で才色兼備、スリーサイズも95、60、88とモデル並のスタイルを誇る。外見だけなら、どんな男も振り返り、思わず見惚れてしまうような美女であるが、その実体はなにをやるにも問題行為を引き起こす非常識で迷惑極まりない人物で、性格も性悪。そのせいか身近な存在の僕にとっては鬼畜外道な存在だ！

ちなみに、狂子さんは科学者である。ありていに説明すると、世界征服を企むような悪の天才科学者ってところかな。

ま、まあ、とりあえず、自称、平和主義者なので世界征服に向けた物騒な行動を起こさないだけマシかなあ……。

でも、いつ考え方を変えるか分からない怖さも孕んだ人物であるため、彼女に対する注意を僕は怠らないように一応、がんばっている。

るつもりである。

それはともかく。

（さっさとこの場を退散しよう！）

僕はベッドの上に仰向けに寝転がっている狂子さんの目の前から踵を返し、私室を急ぎ足で後にする。

「……ったく、釣れないねえ、狂一クンは」

ふう、と狂子さんは溜息をつきながら、真紅のルージュが艶かしい口許にニヤニヤと嫌味ったらしい笑みを浮かべると、その刹那、大きなアクビをするとともにあっと言う間に深い睡眠状態に入る。

それはそれで凄い能力かもしれない。つか、僕には到底不可能な芸当だけど――

某都道府県S市のベッドタウン仏滅町――1990年代前半期、バブル経済真っ只中にS市の新都市計画に基づき急激に発展を遂げた、そんな町である。

しかし、その歴史は古く5、6世紀頃の住居跡や当時の豪族のものと思われる前方後円墳があるくらいだ。その他にも明治時代に建てられた洋館など、国の重要文化財などがけっこうあったりする。

この町――仏滅町には男子校である冥陽学園、対を成すとばかりに女子高である月皇学園というアメリカ合衆国のマサチューセッツ州にある某有名大学とは姉妹校に当たらしい、そんな由緒正しきふたつの学園が存在したんだけど、冥陽学園の理事長つてのが3年ほど前に原因不明の怪死を遂げ、それが発端となり経営難に陥り、一昨年、前々から合併の話が持ち上がったという月皇学園と急遽合併を遂げる。

――で、誕生したのが、現在僕が通う私立校の冥皇学園だ。

はあ、それはいいとして今日も僕は、まるで狂子さんから逃げるように自宅の玄関の扉を蹴破る勢いで外へと飛び出す。

（さっさと学校へ行こう。また狂子さんに酷い目遭わされる前に…

∴)

さて、この時はまだ僕は知らずにいた。

いつの間にやら実行されていた狂子さんの科学実験の被験者とな
ってしまったことに――

第一話「さらば僕の平和な日々よ」その2

僕の父、雉飼 狂蔵は現在、その行方がまったく分からない状態……つまり、行方不明ってわけだ。

そんな父、狂蔵だけど、職業は学者兼考古学者でもある。

名声もけっこうあるようで某有名大学へ自分の唱える学説の講義を行いにも出張することもしばしばあったようだ。

『この星、地球に我々人類が誕生する以前、異星からやってきた邪悪で異形の生物が神々として君臨する暗黒の時代があった。彼らを私は“旧支配者”と呼ぼう。そして、彼らは今、海底、地底など、一言で説明するとすれば“人跡未踏の地”において深き眠りについていると言っておこう。私は彼らについてこの先も調べようと思う。なにか分かり次第、皆の再び講義しようと約束する』

さて、こんな奇妙な学説を唱え、別の意味で父の名は一躍有名となった。

それからだろうか？ 父、狂蔵は積極的に世界各国の古代遺跡を回る旅に出たのは。

んで、当然とばかりに世界各国でお得意の奇妙な学説を唱えまくり、そりゃもう人々を大いに沸かせるのだった。

——で、決定的だったのが、

『神々の真の姿は異星からやってた邪悪で異形の生物である可能性が高い』

『サタン、ルシファーなどと呼ばれる聖書等で悪魔と呼ばれるモノ達、彼らこそ太古の昔、異星よりやって来た邪悪で異形の神々の俄然と立ち向かった勇者達である。だが、知っての通り彼らは敗れ去った。そして、邪神を信仰するモノ達によって“悪魔”のレッテル

を貼られることとなったのだ！」

などという、こんな学説を唱えたことだ。

そのせいか、今や“悪魔崇拜者”、“異端邪説の説法者”などなど、不名誉な名前で世界中の宗教家などから目の仇にされている。

以前、それが起因し、中東の某国へ行った時など、危うくテロリスト集団に拉致監禁され殺されるそうになるなど、父、狂蔵は何度となく死と隣り合わせたハードな体験をしている。

だけど、風の噂じゃ父を捕らえようとする者は必ずと言っていいほど返り討ちに遭い呆気なく拉致監禁、暗殺計画等は未然に防がれているとか――

そんな理由もあってか父は、“現代の魔術師”なんて呼ばれている場合もある。

それはともかく。

「まったく、いつもいつももおお！ 父さんは行方不明、兄貴は兄貴で身勝手でもいい加減だし、狂子さんは僕のことをオモチャだと思ってやがるし！ あああ、不愉快だ、不愉快だ！」

僕……雉飼 狂一は呪いの言葉を吐き捨てるかのような文句を言いながら、一路、学び舎である冥皇学園へと駆け足で向かうのだった。

冥皇学園――一度入学すれば小、中、高、大学とエスカレーター方式で進んでいくことできる冥陽学園、月皇学園というふたつの学園が合併して誕生した新設校……でも、校舎自体は元月皇学園の校舎を再利用しているだけあってか、誰も新設校だなんて思うことはないだろう。

まあ、それはいいとして僕の目の前には、学び舎である冥皇学園へと桃色と続く白のコントラストが美麗に優雅に萌える桜並木の様子が映り込むと同時に、まるでそんな桜並木の美しさを暖かな春風

か称えるかのようにフツと吹いていた。

「ん〜今年はなにかイイことがありますように！」

僕は胸のところでグツと両手を握りると、雲ひとつない虚空で燦々と輝く太陽を両目を細めながら見上げる。

そんな時、なにか――そう、これは違和感だな。特に胸のあたりに……。

「うふふふ〜♪ ハロ〜狂一クン。身体の調子はどうかなあ〜♪」

なんだ、この胸のあたりに感じる違和感は……っと、自分自身の身体に対しての違和感、不快感から着ている冥皇学園指定の制服の第一ボタンを外そうと思った時だった。

ブロロロロロロロッ！！

人目も気にせずとかばかりに、そりやもう嫌味に思えるくらい喧しい爆音を轟かせる一台の赤い派手なポルシェが僕の行く手を阻むかのように停車する。

「う、狂子さん！」

その赤い派手なポルシェの運転手に対し、キツと不愉快を彩らせた視線を向けた次の瞬間、僕の口許に自然とした形で苦笑が浮かぶのだった。

なにせ、その赤い派手なポルシェを運転していたのが、桃色のニットのセーターと黒いタイトスカートという衣装の上から白衣を羽織ったそんな格好の叔母の狂子さんだったからである。

「そうそう言い忘れたから言っておく。狂一クンには、また……恒例とばかりに私の偉大な科学実験の被験者となってもらったわ。んで、その実験がどんな感じで狂一クンの肉体に影響を与えたのか、それをチェックしに……おっと、仮に副作用があっても高熱が出て苦しむとか、それはないと思うから安心してね♪」

「だ、だあああああっ！ その前になんなんだよ、偉大な実験って

のは！」

「ヒ・ミ・ツ♪ んじゃ、またあとでね〜シーユーアゲイン♪」

「ま、待て、待てってば！ ……ったく、人をなんだと思ってるんだよ！」

狂子さんは恒例とばかりに、この僕の身体を使った化学実験を行ったと言うと、ニヤニヤと真紅のルージュが妙に艶かしい口許の冷笑を浮かべる。で、僕をまるで実験生物が実験の過程でどうなっていくのか？ それを心の底から楽しんでる好奇の眼差しでしばらくの間、ジッと見つめると、狂子さんは再び喧しい爆音を轟かせながら赤い派手なポリシェを颯爽と乗りこなしながら、僕の目の前から颯爽と走り去るのだった。

「どんな実験を僕の身体に……」

「よお、狂一。また狂子さんと一悶着か？」

目の前から颯爽と走り去る狂子さんが運転する赤い派手なポリシェに睨みを利かせる僕に対し、背後から話しかけてくる者が現れる。――で、背後を振り返るとジャラジャラとしたシルバーアクセサリーをいくつも身につけた茶髪で背の高い少年の姿がある。親友であり、悪友でもある山村 恵介だ。

「なあ、今日はどうも不思議に思うことがあるんだが……」

「ン！？ 不思議の思うこと？」

「ああ、どうもなあ今日のお前を見ているとき。なんていうか、こう身体付きが妙に……」

「僕の身体！？」

恵介は鼻の頭を右手の人差し指で掻きながら、なんとなく僕にはなにか言いづらいことでもあるのかな？ と思える態度を見せる。

「うゝ……そ、その胸だ、胸！ なにか詰め物でもしてるのかなって」

友人同士隠し事はできない、思い切って言っちゃえとばかりに恵介はキッと僕の胸を指差しながら、そう言い放った。

「む、胸！？ ……あ、なんだ、なんだ！ このぷよぷよした感触

……。ま、まさか！」

恵介が何故、僕の胸を指差すのか？ 次の瞬間、僕は言い知れぬ不安を覚える。なにせ、柔らかな餅のようなぷよぷよとした物体が僕の胸に……。

「う、うわあっ！」

僕はそんな声を張り上げながら、目の前にいる恵介のことを置き去りにする勢いで冥皇学園の校舎へと駆け込むのだった。

「おいおい」

恵介は呆れ顔でそんな俺を見送ると、自分も冥皇学園の校舎の中へと歩を進めるのだった。

第一話「さらば僕の平和な日々よ」その3

それは寝起きの僕が、多分……いや、わざと僕のベッドの布団に潜り込んだに違いない叔母である狂子さんとあーでもない、こーでもない、と揉める数時間前の話に遡る――

場所は、今宵の夜空の主役は自分である、と主張しているかのよう
に煌々と瞬く妖気のようなモノをまとっているかのように思える
妖しき満月、そしてチカチカと仄かな輝きを放つ星々以外、その他
の光源らしきモノは一切見受けられない深淵の闇夜と静寂が支配す
る仏滅町の繁華街である須佐野橋商店街アーケードの裏通りにある
空き地――

「おい、な、なんだ、お前は！」

「ひ、ひいいい！ こ、こ、こいつ人間じゃねえ！」

「た、助けてくれえ！」

鉄錆びに似た嫌な匂い――血の匂いが充満する、その空間は今ま
さに惨たらしい殺戮現場と化していた。

自らの血で作りに出した池の中心で佇む男、自分の身になにが起こ
ったのか？ それすら分からぬままに絶命した血まみれの男――そ
こが地獄だ！

そして殺害した男の身体の一部を切断し、ケラケラと明瞭な殺気
が込められた不気味な笑い声を高らかに上げながら、そんな切断し
た男の遺体の一部に気が狂った猛獣のような勢いで齧りつく怪異の
姿がそこにはあった。

須佐野橋商店街アーケードの裏通り――そこは活気のないBAR、
古ぼけた古本屋、今にも潰れそうな骨董品屋など、表通りの華やか
さとは比べ物にならないくらい沈んだ雰囲気支配する昏く淀んだ
空気が充満しているかに思える場所である。

――が、毎夜毎夜と町の悪ぶった若者達の集団がドンチャン騒ぎ

を引き起こしていることもあってか、それなりには喧しい場所かもしれない。

それはともかくである。

今宵も悪ぶった若者達の吹き溜まりと化している須佐野橋商店街アーケードの裏通りにある空き地では、思わず目を背けたくなるような凄惨な場面が展開していた。

「ぎゃあああああああああああああああああああああああああああああああ
あああああああつ！」

音程のズレた不気味な旋律となつて響くわたる奇怪な声、喉の奥から張り上げる言葉にならない奇妙な呻き声——そう断末魔の絶叫を張り上げると同時に、派手なスカジャンと目立ちたがり屋の象徴とばかりに大量のシルバーアクセサリーを身につけた男の全身からドバツと噴水のように大量の血が噴水のように噴出すと、あつと言う間に真紅の水溜りが出来上がるが、その頃にはすでに男は絶命していたのだが、怪異は執拗なまでに絶命した男の血まみれの痛々しい身体を痛めつけ、ついにはその恐怖に引きつった貌のまま絶命した男の生首が宙を舞つた。

「ぎゃ、ぎゃあああ！」

「助けて！ 助けてくれええええ！」

「うわぎやあああ！ やめろお！」

さて、仲間の惨たらしい死に方に恐怖を通り越し、恐慌に陥り気が狂ったかのように悲鳴を上げる悪ぶった若者達の目の前に狂気と怨念が実体化した幽鬼のように立ちはだかる怪異のその姿だが、妖しく美しい女性のような外見でもある。が、両腕の二の腕から下、両足の膝から下は鉤状の鋭い爪が生えた凶悪そのものだ。おまけに、狂気が彩った笑みを浮かんでいる口許から蛇のような長い舌をチラつかせている。

「ひいひいひいひいひいっ！ た、助けて神様ああああ！」

この世に神様なんかいない！ 自分のやってることはなにもかもが正しい！ 他人の説教などクソ食らえだ！ 鬱憤晴らしは暴力で解決！ 今が面白ければイイ！ 多分……いやいや、ほぼ間違いない、こんな思考で動いていそうな悪ぶった若者達であっても、この時ばかりは必死な形相で神頼みをする。

「まったく、都合のいい神頼みだな、小僧共。普段は目に留まった者を散々痛めつけて楽しんでるようなクズのくせしやがって」

さて、そんな悪ぶった若者達に救いの手を差し伸べる者……というか、彼らに対し、グチグチと因縁に近い台詞を吐き捨てる者が現れる。

カトリックの神父、プロテスタントの牧師——宗派はともかく、キリスト教絡みの聖職者を連想させる漆黒の衣装を身につけた筋骨たくましい大柄なサングラスをかけた黒人男性で、年齢は30代半ばから40代前半くらいだろうか。

「シャアアアッ！」

当然とばかりに怪異は、どこからともなく沸いて出たようなそのキリスト教絡みの聖職者を連想させる格好をした男にも襲い掛かろうと身構える。

「ふう、やれやれ、この国に来てそう時間が経ってないというのに、もう怪異と遭遇するとはな。とりあえず俺の名前はマルコ神父だ、クソガキ共。さっさと逃げるよ、邪魔くせえ！」

——と、溜息をつき、サングラスの越しに鋭い眼光を悪ぶった若者達に向けながら、キッと大声でマルコ神父と名乗る聖職者は、さっさと逃げろと言い放つ。

「う、うわああああああっ！」

悪ぶった若者達は悲鳴をあげながら、散り散りにここ須佐野橋商店街の裏通りにある空き地から逃走する。

「逃げ足だけは速えんだよな……。それはどうでもいいか」

自分と今にも襲い掛かってきそうな怪異の目の前から逃げ去る悪ぶった若者達をふん、と鼻で笑いながら見送るマルコ神父。

「馬鹿メ！ セツカクノ得物ヲ逃ガストデモ思ッテイルノカナ！」

怪異は不気味な声色でせっかくの得物——逃げ去る悪ぶった若者達をこのままにしてはおかない、と言い放つと、マルコ神父を無視し、散り散りに逃げ出した悪ぶった若者達を追跡しようとするのだったが——

「おいおい、無視はいけねえぞ、怪異のお嬢ちゃんよ。つか、生かしておくと後々面倒くさいからな。さっさと始末させてもらうぞ」

「ギャハハハッ笑ワセテクレル！ コノ私ヲ始末スルダト言ウノ……グギャゴア！」

なにを馬鹿な話を。なにをやっても無駄、無駄、無駄……って感じでマルコ神父を嘲笑う怪異の隙を突く形でマルコ神父の剛健な左手が、そんな怪異の顔を捉えるのだった。そして、カッと青白い閃光が迸ったと思ったその刹那、バンッという破裂音とともに怪異の頭が粉々に砕け散る。

よく見ると、マルコ神父は甲の部分に青白く光り輝く五芒星の印が刻まれた手袋を穿いている。

それはともかく。

「油断大敵だぜ、怪異のお嬢ちゃん」

バラバラに吹き飛んだ怪異の頭から噴出した粘着物等を左手の汚物を自前の黄色いハンカチで拭き取りながらマルコ神父は、今や物言わぬ肉塊と化し、自分の足許に沈み込む怪異の屍を冷ややかに見下ろす。

「やれやれ、この街はどうなってるんだ、まったく！」

そうつぶやきチカチカと瞬く星々や今宵の満月が煌々と輝く夜空を見上げるマルコ神父の姿が、フッと闇夜の中に消失する。まるで周囲の空間と一体化するかのよう——

第一話「さらば僕の平和な日々よ」その4（前書き）

私、瑠璃の奇妙な小説を読んでくださっている皆様へ。

その5あたりから、その3で登場した怪異の元締めの存在である物語の舞台となる仏滅町の陰で蠢く悪の組織が、その姿をまだまだ断片的なのですが、その姿を現し始めます。

では、これからもヘタクソな私の小説ですが、何卒よろしく願います。

第一話「さらば僕の平和な日々よ」その4

第一話「さらば僕の平和な日々よ」その4

雲ひとつない蒼く澄んだ清々しい空で燦々と輝く太陽、そして心地の良い春風とともに冥皇学園校舎へと続く桜並木の桜の花びらが舞い散るそんな情景は、今の僕にとっては皮肉そのものである。

だって、だって、だって！ 僕の身体は――

目の前にあるモノ、それが人であろうがなんであろうが、今の僕にとっては障害物に他ならない。

（ほ、保健室へ！ あそこへ行けば！）

目指すは保健室！ 保健室へ行かなければいけない！

目尻に涙を溜め込みながら、僕はバタバタと大きな足音を立てながら廊下をひた走る。

そして、『保健室』と書かれたプレートがドアの上に貼られている一室の中へと僕は駆け込んだ。

「せ、せ、せ、先生！ は、は、春香先生、僕、僕、僕、女の子になっちゃったよ！」

ゼイゼイ、と息を荒げながらの僕の第一声が、ここ冥皇学園一階にある保健室の中に響きわたる。

「あらあら、どうしたのお？」

「う、うわああああんっ！」

――で、僕はそこに居合わせた保険医の三村 春香先生に泣きつくのだった。

目の前の真実、そこから目を背けてはいけない……っと、思いつ

つもこれだけへ否定したい。

僕の身体は、性別が入れ替わっていた！　そう僕が女の子の姿になっていったってことをだ！

これはきつと、狂子さんの仕業に違いない！　く、くそおお！　僕の心の奥底で“復讐してやる”、という負の感情が生まれる。だけど、そう思う一方で、それができない臆病者である自分のことは、殊更に嘆かわしい。

とりあえず今は、狂子さんに対する復讐とか、それはいいとしてだ。

「あらあら、どうしたのお？　先生、なにがなんだか分からないわあ。まあ、とりあえずお話だけでも聞かせてちょうだい」

なにがなんだか分からない状況ってことで春香先生はきょとんとするが、そんな僕を優しく抱擁してくれるのだった。

「じ、実は……」

僕は涙目で事の詳細を春香先生に語るのだった。

この人、三村　春香先生は常に眠気と闘っていきそうなタレた目尻が印象的なここ冥皇学園に在学中の男子生徒の間じゃ人気NO.1だと思われる容姿端麗で心優しい美人教諭。当然、僕もそんな春香先生が大好きである。タダ、恋愛の対象は男も女も関係ないというそんな嗜好の持ち主ってところが変わり者かな？

さて。

「うふふ、本当に女の子になっちゃったみたいねえ狂一クン」

どこか興奮した様子で春香先生は、僕が着ている制服を無理矢理ひん剥きジロジロと女体化した身体の隅々まで見回す。

「うわー……恥ずかしいなあ」

カーッと僕の顔は一気に紅潮する。

「ウホッ！　なんて美味し……ゲフン、ゲフン、なんでもないわあ、うふふ」

（ひいいっ！　せ、先生、今、ウホッ言いながら口許をナメずり回したぞ！）

僕はその一瞬を見逃さなかった。春香先生の柔和なその表情に秘める“今の僕”に対しての並々ならぬ好奇心を必死に隠す様子が。んで、ウホッと笑いながら赤いルーージュが妙に艶かしく思えてくる口許をペロリとナメずり回す仕草に僕は戦慄を覚える。

「と、と、とにかく包帯でもなんでもいいから、この胸を押さえつける物を貸してください!」

「包帯で良ければいくらでも貸すわよ。あ、包帯を胸に巻くのを手伝ってあげるわぁ♪」

「い、いえ、遠慮します」

「あらあら、それは残念だわ」

この女性の象徴とばかりに大きく実った胸を押さえつけ、そんな目立たないようにするためには、包帯等を巻きつける他はない、そう思った僕は春香先生の包帯を貸してくれるように頼む。で、春香先生は快く包帯の束を僕に手渡してくれる一方で包帯を胸に巻きつけるのを手伝いたいと言い出すのだけれど、僕は首を激しく横に振りながら断るのだった。

「よし、こんな感じかぁ……」

——と、僕は春香先生から受け取った包帯の束をそりやもう息苦しくなるくらいギュウギュウに胸の巻きつける。こうでもしないと級友達にバレちゃうしな。今の僕がどんな状態かってこが——

「じゃ、じゃあ、僕は教室に行きますね。ではでは」

春香先生の手によって無理矢理にひん剥かれ制服を僕は即行で……そうだな、10秒もかかないわづかな時間を使って再び身につけると、猪突猛進と言わんばかりの勢いよく保健室の外へと出て行くのだった。

「ふう、詰まらないわぁ……。もうちょつと先生と戯れてもいいじゃない!」

僕が保健室から立ち去ると同時に、春香先生はどこか寂しげ声色でそうつぶやく。

——が、その双眸には狙った獲物は絶対に逃がさない、と宣言し

ている決意のようなものが宿っているかのようであった。

僕が在学する冥皇学園校舎2階の隅っこには『2年G組』というプレートが入り口のところに貼ってある教室がある。そこそ僕が日々、勉強に励む教室だ。

「うーん、見慣れてるはずなのにどうも意識しちゃうなあ……」

そんな2年G組の教室の入り口のすぐ横の壁には、大体2メートルあるかないかというくらいの鏡がある。うちのクラスの学級委員であり、学園理事長の孫娘でもある須藤 明日香が持ち込んだ物ある。まあ、それがいいとして身だしなみのチェックを……つとばかりに鏡を使用する生徒もけっこういたりするので別段、邪魔な代物ってわけではない。

それはさておき。僕の目の前にある鏡の中には、ボーイッシュな感じがするショートヘアの黒髪が特徴的になって思える小柄な少女の姿が映っている。そう、今の僕だよ、僕……。

「か、可愛いじゃないか！ うあ、なにを考えているんだ、僕は！」
あああ、なんてことだ！ いつも見慣れた自分の姿でありながら、こんな娘を彼女にできたらなあ……なんて思ってしまうほど美しく映える自身の容貌に思わず僕は顔を赤らめてしまう自分がなんだか馬鹿馬鹿しくなってくる。

「はああ……とりあえず教室に入っておこう」

自分自身に嫌気を感じる僕は、そりやもう陰鬱で暗いテンションとなり、深い溜息をつきながら、鏡の前から踵を返す。

この先のことを考えると本当に、本当に不安で頭が痛くなる。

そんな気分だ。あああ、なんてことだ！

（神様、これが僕に与えられた試練なんでしょうか！？ 願わくばお答えください！）

僕は胸中で何度も、何度も、同じ台詞を口走るのだった。

第一話「さらば僕の平和な日々よ」その5

第一話「さらば僕の平和な日々よ」その5

某都道府県S市のベッドタウン仏滅町に存在した両校ともに小中高大と一度在学すればエスカレーター式で進級することができるそんなシステムを採用されていた名門校であり、それと同時にライバル校でもあった冥陽学園と月皇学園の合併によって誕生したのが、僕……雉飼 狂一の通う新設校で全生徒数1万人を超えるマンモス校と化した冥皇学園だ。

前にも語ったとは思うけど、冥皇学園の校舎は元月皇学園の校舎だったものを再利用したものである。そんなわけで新設校とはちょっと言えないんじゃないかなって思う節があるわけだ。

まあ、それはいいとして、僕が通う冥皇学園は東西南北に区画された4つの校舎で成り立っている。

北校舎が大学、南が小学校、西が中学校、東が高校という感じで配置されている。

北に玄武、南に朱雀、西に白虎、東に青龍という四神相応、風水の力を使って学校の安泰を願っているかのようである。

また4つの校舎の中心——通称、大中庭には、聖ドミナス教会という教会もあったりもする。

「ううううっ！　なんだか運が悪いなあ……。どうして僕ばかりが」

1時間目の授業が終わり、とりあえずホッと一息つく級友達を尻目に、僕は両手で頭を抱えながら呻く。

「よお、今日のお前、なんかヘンだぞ！」

「う、うう……」

「ははは、なんだよ、お前え」

「あうう……。今、悩み中なんだ、放っておいてくれよお！」

「おお、お前も悩むことがあるんだなあ。意外だぜ！」

「ひ、ひどいなあ恵介え！」

まったく、人事だと思って！　ちよつと皮肉屋なところもある親友である山村　恵介のそんな言葉の僕はムツとするが、再び両手で頭を抱え込みながら呻くのだった。

2年G組の教室内――次の授業までの合間を利用して携帯電話を弄くってる者、窓辺で涼んでいる者、1時間目の途中から机に顔を押しつけた形で居眠りしている者などなど、ぐるりと教室内を見回せば、いつもと同じ光景が僕の目に映り込む。

（ホッ……。とりあえず、僕の身体の異変に気がついてる者はいないな。ふう、包帯を息苦しくなるくらい胸にギュウギュウに巻きつけておいてよかったよ、ホント）

僕はとりあえずホツとする。僕の性別が入れ替わったことに気がつく勘のイイ級友がいたらどうしようかな、と本気で思っていたしね。

「なあ、さっきのは俺の気のせいだったのかな？　つか、今日のお前を見ていると……。ちと、俺はなに考えているんだあ！」

怪訝そうに恵介は僕の顔をジッと見つめる。だけど、しばらくすると急に顔を赤らめて目を逸らすのだった。

「え、あ、うんうん、気のせい、気のせい！」

恵介は勘がいいのだろうか？　薄々僕の変化の気がついてきているようだ。

まあ、とりあえず気のせいだって誤魔化したけど、それをいつまで隠し通せるかな……。

「ねえ、狂一！　今いいかなあ」

――と、いつどこで恵介に性別が入れ替わったことがバレるんじゃないかと、本気の本気でドギマギしているそんな僕に声をかけて

くる者の姿がある。

「あ、瑞希」

恵介の件もあってか僕の口許には自然とした形で苦笑が浮かんでいる。で、そんな苦笑が浮かんだ顔のまま僕で不意に声をかけてきた者の方を振り返る。

そんな僕の振り返った先には、如何にも落ち着きがなく、常にそわそわと騒々しいそんな性格が見て取れる小柄で髪の毛の長い少女の姿がある。容貌は可愛い系かな？ ついでに、動物に例えると、動く物ならなんでも飛び掛っていきそうな無邪気で無謀な子猫って感じがする。ちなみに、名前は宮森 瑞希。

さて。

「狂一はちったあオカルトな話題に精通している、と聞く。そこで質問、質問、質問！」

「オ、オカルト……」

「天宮 弓子の魔道書って知ってるよね、当然？」

「え、ああ……。一応、聞いたことがあるけどさ」

「おおー♪ 流石はあ」

「おいおい、その話題なら俺だって知ってるぞ！」

「えええ、マジでー！」

「なんだよ、俺が知ってちゃいけないっつーのか？」

「うん、その通り！」

「ぬあああつ！ てめえー！」

——となんだかんだと相槌を打っているうちに、恵介と瑞希の口喧嘩が始まる。

それはいいとして、“天宮 弓子の魔道書”という代物について僕が知っている限りのことを語ろう。

天宮 弓子の魔道書とは、この町——僕が住む某都道府県S市のベッドタウン仏滅町に伝わる都市伝説のひとつだ。

んで、おおまかなストーリーはこんな感じだ。

時は1920年代のアメリカ合衆国のマサチューセッツ州にある某名門大学。

そこは200年以上の歴史と文化を謳歌する名門校であると同時に、世界中から集められた異端邪説、そして外道の知識の集大成、と言っても過言ではない禁断の書物が保管されていることで有名な大学でもある。

さて、そんな某名門大学に秘蔵されてある十字軍遠征等で湧き立っていた11、12世紀頃のヨーロッパへもたらされた外道の書物の一冊であり、写本版が出回る度にローマ法王等の権力者によって何度となく発禁、焚書となったせいもあり、現存しているものはわずかに数冊しかない“ある書物”の16、7世紀頃の写本版を元に、留学生としてやって来ていた“ある日本人”が母国語……要するに日本語に写本し、それを帰国の際に秘密裏に持ち帰ったという冒頭から始まる。

さて、件の禁断の書物を写本し、帰国の際に持ち帰った“ある人物”というには、天宮 弓子という名の当時、21歳の日本人留学生。

——とまあ、この人物によって日本にもたらされた異端邪説、外道の知識が記された魔道書の集大成たる禁断の書物の写本が、この町——仏滅町のどこかに眠っていると言われているわけだ。で、その由縁だと思われるのが、今現在でも天宮 弓子の子孫に当たる人物が、この町に住んでいるってところだろうか？

さてさて、そんな外道の知識の集大成である書物の写本——通称、“天宮 弓子の魔道書”を手にした者は邪神の力を手にすることができる、なんて言われているのだけど、僕にとっては馬鹿馬鹿しい話でしかない。

その前に夢と現実がゴチャゴチャになったような話を信じている人がいるというだけで不思議に思う。

うーん、僕には夢ってものがないのなあ……。

それはともかく。

「そうそう、昨晚だったかな……。この冥皇学園とは目と鼻の先にある天道坂図書館に強盗団が押し入ったらしいわ。しかも館内警備員を皆殺しにしたらしい」

「え、えええ！」

「あらら……。つと、もしかして狂一は知らないのか？」

「う、うん……」

「遅れてるなあ。今朝のニュースで大々的に放送してたじゃない！んゝとりあえず知らないなら教えておくわ。マスコミの情報だと身の毛の弥立つようなトンでもない残虐非道な現場だったらしい」

「え、あ、そ、そうなんだ」

「ああ、あれは酷いぜ、人間のやることじゃない！ どうしてあそこまで残忍で惨たらしい殺害方法を思いつくんだって感じの情報だったぜ！」

「まったく怖い世の中になったものよね……。つと、もしかすると強盗団の目的は“天宮 弓子の魔道書”だったんじゃない？ そうあたしは予想してるってわけ。んで、それがあると思って天道坂図書館を襲撃したのよ、きつと！」

瑞希と恵介が昨日起きたという凄惨な殺人事件について語る。

瑞希にいたっては、天宮 弓子の魔道書が絡んだ殺人事件だって言い出すほど、例の事件に対して興味津々な様子。

「2時間目の授業が始まるなあ、そろそろ……」

とまあ、なんだかんだと語り合っているうちに2時間目の授業の開始を告げるベルが鳴り響くのだった。

第一話「さらば僕の平和な日々よ」その6（前書き）

今回から新キャラが登場します^^

第一話「さらば僕の平和な日々よ」その6

第一話「さらば僕の平和な日々よ」その6

動物の中でもっとも残虐非道な行為に及ぶことができる存在、それは我々人間だろう。

とりあえず表向きは理性という名の鞘の中に、自身の本性である欲望という名の刃を仕舞ってはいるが、そんな理性という名の刃からなにかの拍子に欲望という名の刃が開放された時、人は獣と化す……っと、そんなところかな？

さて、人間はどこまで残虐非道で惨たらしい行為をやれるのか？それが実践されたようなそりやもう目を背けたくなるような猟奇殺人が昨晚、この町——仏滅町で起きるのだった。

後々に見たニュース報道の情報によると、昨晚、僕ら仏滅町に住む者にとつての憩いの場所のひとつである天道坂図書館内に闇夜の紛れて強盗団が侵入したという。

んで、僕が言うのもなんだけど、天道坂図書館は3階建ての大型施設でもある。まあ、そんな理由もあるのかは定かだけど、専属の警備会社が存在し、そこから派遣された館内警備員らによって24時間体勢で館内の安全が守られている……はずなんだけど、昨晚は違った。

押し入った強盗団……。そいつらは人間の心を……。いや、理性の歯止めが利かない獣のような輩だったようだ。

天道坂図書館内を散々荒らしまわっただけではなく、そこまでやらなくてもいいだろって思えてくるような執拗で極めて残忍な方法で警備員全員を皆殺しにするのだった。

あと、マスコミの話だと、件の強盗団は飼慣らし虎や豹といっ

た猫科の大型肉食獣を引き連れていたらしい。で、そんな猫科の大型肉食獣にでも襲われ、そして絶命した様子が覗える警備員の遺体もあったという。

なにはともあれ、こんな事件があったことを今朝まで知らなかった僕はちよつとだけショックを受けると同時に戦慄も覚えるのだった。

太陽が西の地平線の彼方へ沈み始める虚空がオレンジ色に染まり、そして萌える黄昏時——僕は恵介、そして瑞希と一緒に冥皇学園東校舎4階にある図書室にいた。

目の鼻の先にある天道坂図書館ほどじゃないけど、黒魔術の行使法、ソロモン72柱の魔術の召喚法等々のオカルト絡みの本がたくさん保管されていたりする。

まあ、なんていうか僕は叔母の狂子さんのせいで人並み以上にオカルト絡みの話題に精通しているわけだけど、それが災いし、この冥皇学園に在籍する者なら誰もが1度は噂を耳にする奇妙奇天烈な人物に目をつけられてしまったのだ！

その奇妙奇天烈な人物っていうのは——

「さあてえー今日はあ、我らあオカルト研究部にい所属すうう皆さんのお実験結果を発表する日ですのお♪」

——と、如何にもトロくさい喋り方で、そんなことを言い放つ眼鏡にツインテール、ついでに着こなす制服の上からでもはつきりと自前のスタイルの良さが分かる……っと、その3つの要素が上手い具合に映える才色兼備な少女の姿がある。

彼女の名は須藤 明日香。魔術師を自称する奇特な人物として、冥皇学園に在学する者なら、その名前を知らない者はいない、と言ってもいいような人物だ。ついでに、学園理事長の孫である。

——とまあ、奇妙奇天烈な彼女に目をつけられた僕は不幸なのか、それとも幸せなのか？ とにかく悪い方向に物事が進んで行くの少

なからず間違いではなそうだ。ちなみに、オカルト研究部の部員は部長である明日香と瑞希、そして勝手に入部させられた僕と恵介を含めた4人のみの弱小部活である。

さて。

「うぬう……。瑞希はともかく。俺はオカルト研究部なんぞに所属した覚えがないぞ！」

「ぼ、僕だってそうさ」

恵介がそうぼやく。それに僕も続く。

「うふふ、なにを言ってるのよ、狂一クン。貴方は顧問である私の甥、そんなわけでオカルト研究会になくてもはならい存在じゃん♪」

「うげっ！　なんだよ、その勝手な理由は！　そもそも僕は狂子さんが、この学校の教員のひとりだなんて絶対に認めないからね！」

などと勝手な理由を押しつける顧問の先生——いや、最大最凶の敵と言ってもいい叔母の狂子さんに対し、僕はキツと恨み辛みを込めた視線を向けるのだった。

（まったく、なんでこの人が——僕には認められないよ、絶対にいいい！）

はつきり言おう！　この冥皇学園最大の汚点がある。それは狂子さんを教員として雇っていることだ！

さて、僕には容赦がない鬼畜外道の狂子さんでも、他の生徒達からは人気があるようだ。ある生徒など、“お姉様”と呼んで慕っているくらいである。

ふう、人は分らないものだなあ……。

「うひひ、あたしに逆らうとどうなるか——分かるわよね、狂一クン♪」

「ひひひいっ！」

ボソッと狂子さんが僕の耳元でそう囁く。その次の瞬間、僕の顔は血の気が引き青白くなるのだが、それは今はさておき。

「ええとお、部長の私からあひとつ面白い提案があるのですがあ、皆さんよろしいですかあ？」

窓から射し込む黄昏時のオレンジ色の染まる陽光を浴びながら、ニコニコと微笑み明日香。

（う、うああああっ！ また奇妙なことを言うぞ、きつと！）

僕は胸中で呻く。明日香がなにかを提案すると、必ずと言っていいほど“悪いこと”が起きるのだ！

「て、提案ってなんなんだあ？」

きつと、厄介ごとだろうな……つと、明日香の提案を危惧するよ
うな物腰で恵介が恐る恐る訊く。

「ん……ええ〜とお、明日はあ日曜日ってことでえ、“無明山古
墳”へ野外活動にでもお洒落込みましようですよの♪」

右手の人差し指をピンツと追っ立て、左目をウインクさせながら、
口許にニコニコとした微笑みが浮かべる明日香は、明日が日曜日と
いう理由も兼ねた野外活動でも……つと、悪い予想を覆すような答
えを返す。

（ホッ……。なにか面倒くさくて厄介なことでも行うんじゃないと思
ってたけど、それは僕の邪推だったみたい）

僕はホッと胸を撫で下ろす。

「わーい、野外活動、野外活動♪」

まあ、楽しければ、それでよし！ ……という考え方の楽観主義
者である瑞希だけは純粹に喜んでいようだ。

「きつと、なにかあるに違いないぜ！ お互い気をつけておこうや」

「う、うん、とりあえず、ね」

（明日香のことだ。野外活動って言いながら、なにか面倒事を起こ
す可能性だって否めない。とりあえず気をつけておこう）

恵介がぼそぼそと小声で僕に対し、お互い注意を怠らないように
しようと言う。そう、まだ安心はできない……。僕は気を緩めず仮
になにかあった時でも冷静でいられるようにと胸中で誓う。

そうしているうちに日も暮れ、僕らは下校——明日の野外活動に
備えるのだった。

第一話「さらば僕の平和な日々よ」その7（前書き）

私の奇妙な物語をお読みの皆様、やっとその7が完成しました。><

第一話「さらば僕の平和な日々よ」その7

第一話「さらば僕の平和な日々よ」その7

僕……雉飼 狂一が住む某都道府県S市のベッドタウン仏滅町の名物の例を挙げるとすれば、大体5、6世紀頃、このへん一帯を支配していたとされる九頭氏という古代豪族のものと思われる無明山古墳と呼ばれる古墳を取り巻く安座主公園だろうか？

ちなみに、公園名は鎌倉時代に日本の仏教系2大宗派のひとつ天台宗から派生した某宗派の争いに敗北し、この地へと逃れてきた清山和尚という人物が、

『この地でなら安心して座主になれるだろうか？』

こんな言葉をぼやいたことに由来するとか。

そうそう、清山和尚はこの地において天冥宗という宗派を築き上げるのだが、今現在じゃその信徒は仏滅町にしかないようだ。

まあ、それはさておき。

時間は午後11時半を少し回った頃——僕の家の外は、特に自動車の行き来が激しい大きな道路や午前1、2時までやってるような深夜営業のゲーセンやビデオ屋なんかないという理由もあってか不気味なくらいシーンと静まり返っている。

まあ、穏やかでなにもない閑静な住宅街と言ってもいいような場所だし、そこらへんは仕方がないとは思うけど、外からの物音がほとんど聞こえてこない、という背景はどことなく気味が悪いものかなあ……。

とまあ、そんな時間帯、僕は私室の机の上に置いてあるスタンド

付きの手鏡と向かい合いながら、そこに映った自分の姿をジッと凝視しているのだった。

僕の私室は殺風景だ。

狂子さんが使い古したお下がりのノートパソコンや教科書なんか置いてある机、枕元にいくつも漫画本や小説などの本が積んであり、今にも倒れてきそうな危険性を孕んでいるベッド、それに14インチのテレビが一台……っと、こんな感じである。

一応、今流行りのゲーム機なんかも持っているんだけど、ジャンルに問わずゲーム狂である狂子さんに取り上げられてしまった、という理由もあってか、今じゃ彼女の所有物になってしまっているの
で無闇、僕が弄ると……。

「ああああああっ！」

ノートパソコンや教科書なんかと一緒に机の上に置いてあるスタンド付きの鏡と向かい合っている僕は、両手で頭をガリガリと掻きながら悲鳴に近い声を張り上げる。

「……ったく、狂子さん、あんたを恨むよ！」

両手で頭を抱えながら僕は、目の前に置いてあるスタンド付きの鏡に映り込む自分の姿を狂子さんに見立てるように恨み言をつぶやく。

（この身体……。元に戻るんだろうか？　僕はこのまま一生、女として生きなければいけないんだろうか？　ああああああああっ！　くそおお！）

僕の身体は完全に女体化してしまった。今朝は胸だけであっただけ、今じゃ……。

「あ、あのう……」

一生、ここまmanaのか、と募る不安に僕の頭の中はごちゃごちゃだ。陰鬱な気分で嘆く僕にそっと小声で誰かが話かけてくる。

で、その声の主はというと、白いフリルについた髪留めとエプロ

ン、それに紺色のワンピースというメイドの格好をした20歳くらいの若い女……いいや、一応、人間型をしているが、その実体は狂子さんが造り出したメイド型サイボーグのアカリだ。

余談話だけど、僕の叔母であり最凶最悪の敵のような存在である狂子さんは、近所のゴミ捨て場に投げてあった冷蔵庫や電子レンジなどの大型廃棄物、それぬ廃車となった車を見付けると、必ずと言っていいほど電子機器を壊して使えそうな部品を漁ってくる。んで、そういったモノを再利用しつつ、誰もが驚くような精密機器を造り出すような科学者でもある。その集大成が自立型のロボット——サイボーグのアカリだ。ただ、如何にも特撮ヒーローものの番組に出てきそうな狂気の人科学者と同じような性格なのが場違いっていうかなんていうか……。

さて、そんな主人である狂子さんとは裏腹に、メイド型サイボーグであるアカリの思考パターンをありてに説明すると従順的で気弱。自分でいうのもなんだけど、この気弱な性格は誰譲りなんだ……って感じの僕が怒鳴っただけで泣き出すくらいだ。

それはそれで今はさておき。

「ああ、アカリか。なんか用事？」

「ご、ご主人様が狂一様をよんでいらっしゃるのですう。早く来てくださいます」

アカリのご主人様というのは狂子さんのことだ。そんな狂子さんが僕を呼んでいるらしい。

「ふう、なんだよ、一体……」

はつきり言って面倒くさい。だけど、無視すればそれ相応のイヤなことが待っているんだろうなあ……っと、僕は危惧する。まあ、仕方ないので僕は、溜息をつきながら机の椅子から重い腰を上げるのだった。

「兄さんが明日、アメリカから帰って来るそうよ、狂一クン」

アカリと一緒に茶の間へ赴くと、そんな僕を右手に歯ブラシ、左手に青いプラスチックのコップを持った赤と白のストライプのナイトキャップとパジャマという格好の狂子さんが、どことなく嫌味な感じのする笑い顔で迎える。んで、右手に持っている歯ブラシを口にくわえると、その状態で“兄さんが明日、帰って来る”……要するに狂子さんの兄である僕の父親である狂蔵が明日、アメリカから帰って来ると言うのだった。

「と、父さんが!？」

どうやら父さんはアメリカにいたようだ。家族にも行く先を告げずフツとその行方をくらませておいて一体、アメリカでなにをやっていたんだか……。

「なんでもミスカ……なんとかって大学にいたらしいわよ、兄さん。そこで“魔道書”みたいな本の研究をしていたらしいわ」

「へ、へえ、魔道書ねえ……」

魔道書——簡単に言えば、古代より伝わる外道の知識を今の伝える書物だ。んで、そんな魔道書は発行された時代時代の時の権力者によって、読む者の精神と行動に悪影響をおよぼすとかなんらかんら……。ま、とにかくその内容が危険視され発禁、焚書になったものが多く、現存しているものは限りなく少ない。

かの有名な魔道書【ネクロノミコン】でさえ、現存しているわずか数冊程度とのこと。で、その多くが17世紀頃のラテン語に写本されたものばかり、と聞く。

「ああ、そうそう狂一クン。明日、オカルト研究部のみんなで野外活動とばかりに行く予定の無明山古墳について面白い昔話があることを知ってるかなあ〜♪」

歯ブラシを口にくわえたままの状態でニヤニヤと狂子さんは微笑みながら、明日、オカルト研究部のみんな——僕、恵介、瑞希、それに明日香にたった4人しかいないけど、まあ、とりあえず野外活動って感じで行く予定の無明山古墳についての昔話を知ってるかな、と訊いてくる。

「え、無明山古墳に関しての昔話!? あそこは5、6世紀頃、このへん一帯を治めていた九頭氏っていう豪族の古墳だってこと以外、僕は知らないけど……」

僕の知識はこんなものだ。

「その調子だと、お前、なにも知らなそうだ。よしよし、愚弟よ……いやいや、今は愚妹かな? とにかくアホなお前さんに、この俺が教えてやるぜ!」

——と、そんな僕を馬鹿にするような声が聞こえてくる。

その刹那、僕の首の後ろから両手を回した形で何者かが抱きついてくる。

「えっ!? うわ、なに、なにをするんだあ兄貴!」

「よお、久し振り!」

首の後ろから両手を回した形で抱きついてきた者というのは、鼻筋がすっきりしたなかなかの男前な背の高い若い男だ。で、この男の名前は狂介……4つ年上の兄であった。

んで、今時流行らないリーゼントがトレードマーク、それに黒を基調とした革ジャンと皮パン……っと、こんな格好をしている。ついでに、どこへ行くにも愛用のエレキギターを持ち歩いている。

それはともかく。

「無明山古墳の主っていうか、5、6世紀頃、このへんを支配していたのが九頭氏っていう尼夜琉羅って邪神を崇拜する連中だったわけだ。んで、そんな連中が存在していることを当然、大和朝廷は赦すはずがなかった……っと、ばかりに大和朝廷が差し向けた3万人の軍隊によって九頭氏は一族郎党皆殺しにされ、歴史からその名を消されることとなった……っという昔話さ」

「そ、そうなんだあ……」

この仏滅町の観光名所だと、何気なく思っていた無明山古墳にそんな闇の歴史があったなんて……。正直、僕は驚いた。

「おお、そういうや、最近、無明山古墳がある安座主公園の周辺でこんなとこしょっちゅう怪しい輩が目撃されてるようだな」

「え、なに!？」

——と狂介兄さんが不意に口走ったその言葉に僕はギョツとするのだった。

「うふふ、怪しい輩の出没はともかく。また昨日のような猟奇殺人事件が起きなきゃいいわねえ。穏やかでなにもない平和な町……。それが仏滅町の本来の姿だし」

「そ、そうだよ、うんうん……」

そうだよ、その通りだよ。穏やかでなにもない平和な町、それが一番だよ! 狂子さんのそんな一言に僕はちよつとだけ安心するが、
「ああ、寝る前のちよつとした検査があるのよねえ、狂一クン」

「う、うわあああっ!」

やっぱり気を抜くんじゃなかった! ……つと、僕は無理矢理、なにかを企んでいそうな怪しい物腰の狂子さんに手を引かれ、彼女の私室へと連れ込まれるのだった。

「おいおい、なにをやるんだあ?」

「男性の立ち入りは禁止です! 例え、狂介様であっても!」

「うお、そりゃないぜ!」

狂介兄さんが僕と狂子さんのあとを追おうとするのだが、その行く手を阻むようにアカリが両手を広げながら立ちはだかるのだった。

「やれやれ……」

さて、穏やかでなにもない平和な町、それが仏滅町の本来の姿である、と言いたいところだけど、昨日、天道坂図書館という憩いの場で起きた猟奇殺人事件を皮切りに、“なにかが”この仏滅町で変わり始めようとしていた。

そして、猟奇殺人は再び起きるのだった。

第一話「さらば僕の平和な日々よ」その8（前書き）

ネタがパツと思い浮かばなく苦戦しました＜＜

第一話「さらば僕の平和な日々よ」その8

第一話「さらば僕に平和な日々よ」その8

「うおらあああああっ！ 燃えるぜ、ビィィイトオ！ イヤホオオオオ！」

某都道府県S市のベッドタウン仏滅町に住むごくごく普通の高校2年生……っと、自分ではそうでありたいと常々思っている僕、雉飼 狂一の4つ年上の兄である狂介は、東の地平線の彼方から太陽がひよつこりと顔を出し始めた早朝という新聞配達等の一部の人々以外、大体がまだまだ寝静まっている時間帯であつてもお構いなしに、耳障りでやかましいエレキギターを掻き鳴らすという非常識な悪いクセの持ち主だ。

「ぬあああああっ！ う、うるさい、うるさい！ 今日は日曜日じゃないかあああ！」

当然、そんな耳障りでやかましい狂介兄さんが掻き鳴らすエレキギターの落雷を連想させるような轟音が家中に響きわたる。

僕はどんな騒音にも耐えられるような無神経な人間じゃない！

そんなわけで当然、心地の良い眠りを妨げられた僕は不機嫌極まりない感情をぶつけるような怒鳴り声を張り上げながら目を覚ますのだった。

「だあああああっ！ うるさい、うるさい、うるさい！」

怒り狂った猛牛のような勢いで僕は、他人の迷惑なんかお構いなしって感じでエレキギターを掻き鳴らしている狂介兄さんがいる茶の間へと殴り込みをかけるように駆け込むのだった。

「よお、おはよう！ お前も一緒にやるか？」

僕の存在に気づくと狂介兄さんは、一旦、そのクソ喧しい演奏を

止めスピアのエレキギターを僕に手渡す。

「あ、ああああ……っ！　僕はそんなつもりでここへ来たんじゃない！」

「はっはっはっ、まあ、そう怒るなよ！」

「そうそう、くだらないことで怒らないの。こんな物音、暴走族のバカタレ共のバイクが奏でる爆音に比べればなんともないわぁ♪」

「うえ……狂子さんはなんともないのかよ！」

ふと茶の間の窓際に置いてあるテレビと向かい合った形で置かれているソファの方へと視線を向けると、そこにゴロリと横たわりながら、まるで小鳥の囀り程度の物音しか聞こえてこない静寂な空間でくつろいでいるかのようにコーヒークップをすすっている狂子さんの姿がある。

（ふう、あの轟音が気にならない無神経で図太い狂子さんが本当に羨ましいよ）

僕はそんな狂子さんが羨ましいなあ、と胸中でつぶやく。

「ああ……っと、そろそろ朝のニュースの時間だわぁ。狂介くん、一時中断、中断！」

「ん、あ、ああ、了解だぜ、姉さん！」

「うえ……狂子さんの言うことだけは素直に聞くのかよ！」

狂介兄さんもいい加減だよなあ……。僕がなにを言おうと無視するクセに狂子さんの言うことには素直に従っちゃってさ……。ふう、腑に落ちないよ、ホント！

「んじゃ、テレビにスイッチを入れてちょうだい、アカリ」

「はいですう、ご主人様」

ソファアーにごろ寝したままの状態で狂子さんは、ふぁ……と大きなアクビをしながら、手招きで台所にいるアカリを呼びテレビのスイッチを入れるようにと命令をする。んで、アカリがテレビのスイッチをONにすると、そんなテレビ画面には地元テレビ局が放映しているニュース番組が丁度よく放送されていた。んで、“ニュース速報”という大々的な赤い文字の見出し画面が僕の双眸に飛び込ん

でくる。

「なにか、おぞましい事件でもあったのかな……」

そうつぶやき僕は、ゴクリと生唾を飲み込みながら、テレビ画面を食い入るように見つめるのだった。

『ええと、今朝未明、私達の街……S市のベッドタウン仏滅町の名物公園である安座主公園内にある無明山古墳を調査中のフリーの考古学者島原教授率いる調査チームが、テロリスト……はたまた得体の知れない謎の組織！？ と、と、とにかく、凄惨な猟奇殺人事件が！ 調査チームのメンバー全員が、なんと惨殺されるという前代未聞の殺人事件が起きました！』

アナウンサーは新人なのか？ ところどころ言葉を途切らせつつも、今朝未明に起きた凄惨な殺人事件について熱く語るのだが、あまりにも惨たらしい事件であつたせいか、そんなアナウンサーの表情はどこか昏く沈んだ感じである。まあ、当然だろうな……。

「やれやれ、この町も物騒になったもんだ。緑あふれる平和な街を作りましょう——こんなスローガンは見事に崩れ去っちゃったな、おい」

「う、うん……。はあ、なんだかあ」

眉をひそめ、溜息をつく狂介兄さん。僕も釣られるように溜息をつく。

「くくくく、遂に動き出したようね。さあて、これから色々忙しくなるわあ」

——と、ソファーに横たわった状態で現在放映中の地元テレビ局のニュース番組に見入っている狂子さんは、ニヤニヤと微笑みを浮かべながら、なにやら意味深な言葉を口する。それはまるでなにかに……そうだな、得体の知れないモノとの遭遇を心待ちにする冒険家の心境に似た好奇心が彩っているかのように思える言葉だ。ついでに、見た者をゾッとさせるような狂気の入り混じったような感情

も同時に彩っているそんな言葉だ。

（なんだか今日の狂子さんはいつも以上に怖いような……）

「さてと、必要最低限のマテリアルは用意しないとね……」

ペロリと口許をナメながら、狂子さんは僕をジッと見つめる。

「な、なに!？」

「うふふ、なんでもなあわぁ〜♪」

僕はそんな狂子さんの様子をうかがっているだけで気圧され、思わず見動きの一切が取れなくなってしまふのだった。

まさに蛇に睨まれた蛙ってところだろう。

（はあ、なにかイヤなことが起こる前触れっぽうなあ……）

僕は胸中でそうつぶやく。まあ、とりあえず僕の杞憂ならいいんだけど……。

雲ひとつない蒼穹で燦々と輝く太陽、それは神秘的であり神々しい。

だが、ある場所にいる者達は暗く沈んでいる。見てはいけない、起きてはいけない、2度と繰り返してはいけない、そんな言葉のオンパレードな現場は昏く静まり返っている。

「ふう、こりゃヒデユなあ……」

とりあえずキリリとした背広姿なんだが、赤と金の縞模様のネクタイが微妙な角度で曲がっており、なおかつ自堕落な生活を送ってそんなことが見て取れる無精髭が目立った顎を摩りながら、大きな溜息をつく男の姿がある。

「う、うう……うえ……」

そんな無精髭の男の側で必死な形相で嘔吐を我慢する若い女の姿がある。

「おいおい、そろそろ慣れてもいいんじゃないか、深山？」

「そ、そ、そんなぁ……。こんな惨い有様を見て平然でなんかいられないですう、榊警部！」

女は青白い顔でそう言うと、両手で口許を押さえながら、うずくまってゴホゴホと咳き込む。

前者の無精髭の男の名は榊 祥太郎。僕らが住む仏滅町の治安維持の一切をS市庁より任されている仏滅警察署に勤務する人物で階級は警部なんだが、如何にもその性格が自堕落で面倒くさがりやで、ことが見て取れるひん曲がったネクタイ、そして無精髭がある意味で目立つ人物ということで通称、自堕落刑事なんて呼ばれていることもあるが、仏滅警察署に勤務する警察官達からは大いに慕われている。ちなみに、年齢は46歳でバツイチ。

後者の名は深山 由香里。本年度より、仏滅警察署に配属となった24歳の新人警官。チャームポイントは黒縁の眼鏡とポニーテール。才色兼備な美人だが、どこかおどけた感じのする人物だ。

さて、そんなふたりの警察官がいる場所、そこは――

「そ、それにしても無明山古墳の中に入れるなんて未だに信じられません！ う、うえ……」

「ふう、どうでもいいが遺跡内で吐くんじゃねえぞ。犯人の手がかりとなる代物が残されてるかもしれないからな」

そうふたりがいる場所というのは、わが町、仏滅町の名物公園である安座主公園内にある無明山古墳の内部――被葬者が永遠の眠りにつく石棺が置いてある場所だ。んで、今朝未明、凄惨な猟奇殺人が起きた現場でもある。ちなみに、今現在は被害者――何者かに惨殺された考古学者の島原教授率いる発掘調査チームの遺体は外へと運び込まれ残っているものは、彼ら被害者が流したであろうおびただしい血痕の跡だけである。ちなみに、石棺は牛4頭は入れるような巨大なモノでなにやら文字のようなものも彫ってある。

さて。

「はあはあ……。それにしても血の臭いがこんなにキツイものだななんて思いもしませんでした！」

深山という女刑事は眉をひそめ、両手で口許を押さえながら、ぐりと自分の周囲を見回す。

天井、左右の壁、そして床――石棺が置いてある空間の四方には、島原教授ら被害者の流したおびただしい量の血が飛び散った形跡を残っており、鉄サビの臭いをさらに強烈にしたような独特の臭い――血の臭いが充満している。

「まあ、慣れだ、慣れ！　俺だってヒヨツ子時代はそうだったんだ。お前の気持ちは痛いほど分かるぞ、うんうん」

榊警部は飄々とした物腰でうんうん、と頷きながら、深山の肩を何度も叩く。

「あう、そんなに叩かないでください！　ここで吐いちゃいますよ！」

「おいおい、冗談でもやめろって！　……ったく、しばらく外へ行つてくつろいでこい！」

「え、ホントですか！　じゃあ、お言葉に甘えて！」

榊警部のそんな言葉を聞いた途端、深山はバタバタと喧しい足音を奏でながら、今いる石棺がある部屋から外へと飛び出していく。

「やれやれ……」

榊警部は苦笑を浮かべながら深山を見送ると、プイッとその視線を石棺の方へと向ける。

「『この石棺に眠る者を決して目覚めさせてはいけない』……。ふむ、石棺に刻まれた言葉の続きとなる文字が故意に消されているな」

石棺には『この石棺に眠る者を決して目覚めさせてはいけない』という言葉が刻み込まれている。まるでなにかの警告文のようであるが、その続きの文章が何者かの手によって故意に消された形跡があり、読むことができない。

「それはともかく。石棺の四方に置かれた蛸の姿を象った埴輪とは珍しいな」

石棺の四方には、まるで石棺を守護を目的に置かれたように思える蛸のような姿が特徴的な不気味な埴輪の姿が見受けられる。

「覇須多！？」

そのひとつを手取る榊警部は、そんな手に取った蛸の埴輪には、

1千年以上もの間、この場所にあったせいもあるのか色あせてはいるが、『覇須多』という文字に赤い塗料で刻み込まれている。

その刹那――

ゴトンッ！

「えッ!?」

「キシヤアアアッ！」

石棺の蓋が鈍い音を奏でながら半分ほど開き、そこから青白い大きな腕のようなモノが飛び出す。んで、それが榊警部の身体に巻きつき、彼を石棺の中へと引きずり込む。

「うわあああああああああああああああああッ！」

榊警部の絶叫……断末魔の叫び声がこだまする。そして、彼が手に持っていた『覇須多』という文字が色あせた赤い塗料で刻み込まれている蛸の姿を象った埴輪が、彼が石棺の中に引きずり込まれると際に手放したせいもあってか勢い欲宙を舞いながら、地面に落下するのだがまったく壊れることはなかった。

「ギャ、ギャオオッ！」

さて、蛸の埴輪が地面の落っこちると同時に石棺の中から不気味な呻き声が聞こえ始める。

「ギャギャギャ……グガグア！ ギャギィギガアアアッ！」

再び不気味な呻き声が響きわたると同時に、半開きだった石棺の蓋は再び鈍い音を奏でながら元通りの閉じた状態に戻るのだった。

「あれ、榊警部、どこです？」

そこへ丁度よく、深山 由香里が戻ってくる。だが、当然、榊警部の姿はない。寧ろ、彼女はあの光景を見なくてよかったのかしれない。

「んもお！ こんな場所に私を置き去りにするなんて酷いです！」
プウッと頬を膨らませながら、深山は駆け足で石棺が安置されているこの遺跡の一室から外へと出て行くのだった。

さて、そんな奇妙な出来事が起きてしまったことをまったく知らない僕……雉飼 狂一はオカルト研究部のみんなと一緒に安座主公園へとやって来ていた。

第一話「さらば僕の平和な日々よ」その9（前書き）

えっと、第一話はその9で終了します^^
次回から第2話開始です^^

第一話「さらば僕の平和な日々よ」その9

第一話「さらば僕の平和な日々よ」その9

「おいおい、安座主公園内の一部に警察が張り込んでるらしいぜ！」
「ああ、多分、今朝のアレじゃねえか？」

「おっ!？」　もしかして、公園内にある無明山古墳を発掘通調査中だったフリーの考古学者、島原教授率いる発掘調査チームの連中が石棺が安置されている玄室内で一人残らず惨殺されたって事件か？」

「うんうん、それだ、それ！」

「うはー……なにがあつたか知らんけど、物騒な世の中になったもんだなあ」

「俺達も気をつけないとな！」

そんな話で盛り上がっている小太りで背の低い男と、痩せて青白い顔をした眼鏡の男という容姿なんがか相反するようなふたりの男の姿が、安座主公園の入り口に面した場所にある自販機の前に見受けられる。んで、ふたりともまったく同じ服装……うん、この衣服を明らかに作業服って感じた。まあ、そんなこんなで多分、ここ安座主公園の園内清掃員だと思われる。

安座主公園——春には満開に咲き乱れる桜並木が萌え、夏には大規模なフリーマーケットで大いに賑わい、秋には毎年恒例の行事である紅葉天冥祭なんて祭りが催され、冬には最強我慢男選手権なんてここ最近の恒例行事が催されているなど、四季折々、なにかしらのイベントが開催させる名物公園としても有名な公園である。

そんな安座主公園内には普段なら、ここ仏滅町の住人達の憩いの場であり、日課となっている愛犬の散歩やジョキングに興じる者、それなりに大きなグラウンドもあるので少年サッカーチームや少年

野球チームの試合などが行われている様子もちよくちよくと見受けられる。その他、晴れた日など、ベンチで昼寝をしている浮浪者の姿等もちらほらと見かけるところだけど、今日に限って安座主公園内は静まり返っていた……いや、警察が“ある場所”に張り込んでおり、その影響で立ち寄る者が極端に少ない、と言ったほうが正しいのかもしれない。

「そういや、何年前にもこの公園内でちょっとした事件があったな。その時は確か、月皇学園……現在の冥皇学園の生徒が行方不明になったっつー事件だったよな？」

「おうおうつつうか、まだ見つかってないみたいだな、件の女子高生。まあ、恐らくは……」

「その娘は多分、私の同級生かもしれませんわね」

さて、何年前か前、ここ安座主公園内で行方不明になったという月皇学園……現冥皇学園の生徒がいたよな、という話を始める清掃員二人組に対し、“それは自分の同級生かも”と言いながら話しかける者の姿がある。

艶のあるブロンドの小奇麗なセミロングの髪、象牙のように白い肌、眠気と常に闘っているような感じがするタレた目尻が特徴的な一方で雲ひとつない晴れわたる蒼穹のように碧い双眸が映える……つと、こんな容姿にキリスト教絡みの聖職者が連想させる衣装を着こなしている白人系外国人女性が清掃員二人組みの目の前に現れる。ついでに、白人系外国人特有の長身痩躯でありながら、そのグラマラスなスタイルのが容姿端麗なその姿をさらに美しく見せつけている。

あと、年齢は20代半ばくらいだろうか？

それはともかく。

「ええと、私の名前はシスター・サマエルと言います。とりあえず、貴方方が言われる行方不明の女子高生とは、私もかつて青春時代を過ごした月皇学園こと現冥皇学園に在籍していた学生時代の同級生

です。さてさて、私も彼女の生死が気になっています、ずっと、ずっと……」

シスター・サマエルと名乗る白人女性は、自分のプロフィールなんかを清掃員二人組みに対し、長々と語り始める。

それは約20分を要することに……。

「ふう、まだ喋り足りないけど、これにて……って、どこへ行っちゃたのかしらあ」

と、長々と喋り終えてからやっと気がつくとはかりに、サマエルの目の前には、すでに清掃員二人組みの消失していた。恐らく、彼女の長々しい話についていけず途中で逃げ出すようにどこかへ行っただろうなあ、きつと。

「ふう、人の話は最後まで聞くのが常識です！」

プウツと頬を膨らませながら、不機嫌そうにサマエルはつぶやく。さて、平行して――

「ふう……。やっと到着っ」と

オカルト研究部のみんなと待ち合わせをする安座主公園入り口へと僕はたどり着くのだった。

とりあえず僕は、大きく肥大化した胸……とはいえ、狂子さんには大きすぎじゃ完全に負けてはいるが。まあ、なんだかんだと女体化の象徴である胸をこれでもかっけくらい包帯でギュウギュウに巻きつけた形で押さえ込み目立たなくしたつもりであるが――

「うむむ、昨日もそうだったけどさ。どうもお前の身体つきにどことなく不自然な点が見て取れるんだが……」

「あはは、気のせいだよ、気のせい！」

親友、山村 恵介だけは俺の身体の変化に薄々気がつき始めている様子だ。

さっきからジロジロと僕の方を見つめては眼を逸らし、またジロジロと見つめては眼を逸らすって行動を繰り返している。

やっぱり、バレてるのかな……。

僕は一縷の不安を抱くが、それは今のところどうでもいいかな。

「ねえねえ、なにが、なにか！」

その一方で恵介と同じく、親友のような間柄である宮森 瑞希はまったく気がついていない様子だ。

「あらあらあ、うふふ……。なるほどお〜♪」

と、ニヤニヤと僕を見つめて微笑む須藤 明日香は気がついていないのか、それとも気がついていないのやら……。彼女に関してはなんだかよく分からない。

「まだ誰も気がついてないみたいねえ。うふふ、仮に気がいたらみんなどんな目でアンタのことを見るのか見物だわあ♪」

「ヒッ!？」

狂子さんが耳元で嫌味ったらしく囁く。僕は次の瞬間、悪い予感に恐れをなしビクツと身震いをする。

それはともかく。

僕らオカルト研究部のみんなは安座主公園の入り口で集合する。

えっと、とりあえず無明山古墳の見学を兼ねた野外学習を行うためである。

「あらあらあ、この調子だと見学は無理っぽいわね」

——と、顧問の先生ってわけじゃないけど僕らと一緒に安座主公園へとやって来た三村 春香先生が、慌しく公園内を行き来している警察官達に注目する。ちなみに、彼女と狂子さんは学生時代からの友人であり、同じく元月皇学園の出身者……。要するに僕らの先輩に当たるわけだ。

「今朝、この公園で殺人事件があったみたいですわね。まったく、一昨日の晩にもあんな事件があったのに……。穏やかでなにもない閑静なこの町で悪いことばかり続くなんで……」

一昨日の晩は天道坂図書館で、そして今朝はここ安座主公園内にある無明山古墳内の石棺が安置されている玄室で……。まったく、この仏滅町で今、なにが起きようとしているだ!？ 僕は不安で仕

方がなかった。

「まあ、なんだ……。これは偶然だよ、偶然！　それでいいじゃんか」

「今朝の事件は天宮　弓子の魔道書に関係した殺人事件じゃない……っと、あたしは見たわ！　まあ、とりあえず無明山古墳の近くまで行ってみよう♪」

「ん、ああ……」

この町、仏滅町で頻発する惨たらしい殺人事件——それは単なる偶然が重なっただけ、と樂觀的に考えていそうな恵介と瑞希は、現在警察が封鎖しており、一般人は近寄れない状態にある無明山古墳の近くへと行ってみようと提案、そして半ば強引な形で陰鬱な気分にいる僕の手を引きながら、そこへ向かうのだった。

「あらあら、私をお置き去りですかぁ」

そんな僕らの後をばたばたと靴音を立てながら、明日香が追う。

「ふう、あの狂介くん達を見ると8年前の“あの日”を思い出すわね、狂子」

「8年前！？　あ、あああ……“あの娘が居なくなった日”のことね」

8年前のあの日……。春香先生と狂子さんはお互いの顔を神妙な様子で見ながら、今となっては思い出したいくない忌まわしい思い出、それについて語ろうとした時だった。

「よぉ～偶然だなぁお二人さん♪」

——と、偶然か知らないけど、ここ安座主公園入り口へやって来た赤いママチャリに乗る紺色の背広姿をした若い男が親しげに春香先生と狂子さんに話しかけてくる。

「せ、誠司じゃない。な、なんていうか……。久し振りね」

その背広姿の男と目が合った途端、春香先生の口許には苦笑いが浮かぶ。一体、どうしたんだろ？

「うふふ、城戸くんとは3年前に喧嘩別れしたんだよねえ、春香♪」
ニヤニヤと狂子さんが嫌味ったらしく笑みを浮かべながら、春香

先生、そして城戸という若い男を順に見つめる。

「う、うるさいわね！」

「む、狂子お、それを言うなって……」

狂子さんの嫌味に対し、ムツとする春香先生と城戸という男。

さて、この城戸 誠司という男は多分、春香先生の元彼氏ってところだろう。まあ、それはともかく。容姿を一言で説明するとキザな色男。それに背がけっこう高い。年齢は26歳。

「そ、そういえば、今、探偵をやってるんだっけ？」

元彼との遭遇というアクシデントに見舞われ、気まずい雰囲気が漂い始める。そんなこんなでしばらく沈黙が支配するのだが、そんな雰囲気を自ら打開……っと、ばかりに春香先生がそう口火を切る。
「ああ、クソ儲かりもしないがね。とりあえず、なんでも調べるぜ、この町……仏滅町のは陰の部分が多いしな」

仏滅町には陰の部分が多い、そう言い放つ城戸はニヤリと微笑み。

「ええ、まあ、確かにね」

狂子さんは城戸が口にした“陰の部分”って言葉に納得するかのようになんどもうんうんと頷く。

「うみゅ!？」

その一方で春香先生は、なにを言ってるんだ? ……って感じで首を横に傾げる。

「あらら、先輩達じゃないですか〜♪」

「あらあら、偶然ですねえ」

さて、そんなところへ黒いスーツとタイトスカートをビシッと着こなす一方で、どこかおどけた感じがする眼鏡をかけたポニーテールの若い女、それに常に眠気と闘っているようなタレた目がある意味で特徴的である金髪碧眼の美人シスター——そうあの深山 由香里とサマエルが偶然、狂子さん達3人の目の前を通りかかる。深山 由香里は自身も警察官ってことで忙しく公園内を行き来する警察官達とともに、一方でサマエルは安座主公園内を散歩し、その帰りに……っと、こんな感じである。

「この面々がこうして揃うのは、8年前のあの日……あの夏祭りの夜以来ですね」

「うんうん、春香先輩が彼氏の城戸さんを私達に紹介してくれた、あの日ですね」

「ああ、そんなことがあったわね。でも、あの時、こいつの浮気性に気がついていれば……」

「お、おいおい、浮気性ってなんだよお！ ……まったく、そりゃないぜ！」

「それより、偶然が重なるわね。今は昼間だけど、私には“8年前のあの日”と同じことが起きそうで気がかりだわ」

サマエル、由香里、春香先生、城戸は8年前の思い出に浸るような会話を始めるが、不意に狂子さんが口にした“8年前と同じようなこと起きそう”という言葉にハツとしたような顔でお互いの顔を順に見合わせる。

「8年前のあの日……私達は大切な友人を失った。この公園に巢食う邪神の手によって——」

狂子さんがキッと鋭い声で言う。次の瞬間、春香先生らは意気消沈したように静まり返る。

「ま、待てよ……。8年前のあの日と同じってこたあ！？」

「無明山古墳の玄室に安置されている石棺の四方に置いてある蛸のような奇妙な埴輪を誰かが……」

「え、そんなのあったかな？　つか私はあの日……玄室まで入っていないからなんとも」

「それはともかく、危険な匂いがしますわね」

「アレが一度でも目を覚ますと、“あいつら”も動くでしょうね！」
狂子さん達は再び、お互いの顔を見合わせると、キッと意を決したように安座主公園内へと駆け込んでいく。

（ふう、だけど、私はすでの“あいつら”の抑止力となるモノを安座主公園内へと送り込んでいるのよねえ♪　まあ、そいつがどう動くか見物ってところかしら）

——と、狂子さんは胸中でつぶやくと、ニヤリ赤いルージュが艶かしい口許の含み笑いを浮かべるのだった。

第一話 終

第2話「邪神胎動」その1（前書き）

第2話開始です^^

ここいらで敵の主要キャラとなる人物も徐々に登場させる予定です。

第2話「邪神胎動」その1

第2話「邪神胎動」その1

某都道府県S市の新都市計画に基づき1990年代前半期——バブル経済真っ只中に開発着工が始まり、そして急激な成長を遂げたのが、S市のベッドタウン仏滅町である。

そんな某都道府県S市のベッドタウン仏滅町の歴史は古く奈良時代以前にはまでさかのぼることができるほどである。

さて、それだけの歴史の古さと重みのある仏滅町には、当然とばかりに数多くの昔からの言い伝えが語り継がれている。

そのひとつが、こんな感じである。

『まつろわぬ神々の墓所である無明山古墳の玄室へ決して足を踏み入れてはいけない』

——という言い伝えである。

なにはともあれ、触らぬ神に祟りなし……っと、こんな感じの言い伝えが長い間、守られてきたのだけど、8年ほど前——安座主公園の拡張にもないそんな安座主公園内の一部となった無明山古墳の内部——石棺が安置されている玄室が一般公開されることになって、“禁”は破られることとなった。

それからだろうか？ この仏滅町で奇妙な生物が目撃されたり、また行方不明者が続発したりし……。

“これは無明山古墳の被葬者が眠る石棺が安置されている玄室が一般公開になったことによる祟りではないか？”

——という噂が流れ始め、今日にいたっている。

杞憂ならいいんだけど、本当に……。

それはともかく。

「あ、あれ……」

「ん、どうした？」

「いや、その、ほら……。空を見上げたらさあ。なんかこう……奇妙な気配を感じてさ」

「奇妙な気配!？」

某都道府県S市のベッドタウンである仏滅町の名物公園である安座主公園——普段ならたくさんの人々の行き来が見られる賑やかな公園なんだけど、今日にいたっては僕……雉飼 狂一ら冥皇学園高等部オカルト研究部の面々以外、行き交う人々の姿が見られなかった。さらに、空を見上げると禍々しい黒雲が燦々と瞬く太陽を覆い隠そうと徐々に徐々にと迫ってきている様子がうかがえた。

「ふう、雨が降りそうだな! 傘なんか持ってこなかったぜえ!」

「あうう……。恵介クンと同じく、傘なんか持ってこなかったわ!」

僕と同じく冥皇学園高等部の同じ2年G組に在籍する生徒であり、親友でもある山村 恵介と宮森 瑞希が虚空にもやもやと立ち込め始める禍々しいさすら感じる黒雲を見上げながら、溜息をもらす。

「備えあれば憂いなしってえ昔時からあ言いますよねえ♪」

ニコニコと微笑みながら、恵介と瑞希を順に見つめる須藤 明日香は背負っている赤いリュックの中から猫の絵が描いてある袋に仕舞ってある折り畳み傘を取り出すのだった。

「おいおい、皮肉かよ!」

恵介が唇を尖らせる。

「あらあらあ」

おそらくはなにも考えてはいないだろう……つと、そんな感じがする明日香はニコニコと微笑んでいる。

それはともかく。

「なにはともあれ。異質な気配が……」
そう僕がつぶやいた次の瞬間だった。

ギョオオオオオオオッ！

不気味な物音が響きわたる。それと同時に、太陽が禍々しい黒雲によって覆い隠され完全に見えなくなる。

「うわ……。こりゃ雨が今にも降ってきそうだなあ」

恵介がのん気にそう言う。

「ね、ね、ねえ！ あ、あれはなに！？」

のん気な恵介とが打って変わって、なにか……。そうだなあ、決して“見てはいけないモノ”を見てしまった——という感じで瑞希はガクガクとなにかに怯えた様子を見せる。

「ど、どうしたんだよ、瑞希！？」

「いいから！ あれを、アレを見て！」

僕の後ろに身を潜める瑞希。んで、そんな瑞希は震えた指先でなにかを指差す。

「ん！？ う、うあああつ！ なんだ、あれはああ！」

なにかに怯える瑞希が指差す方向へと視線を向ける僕は次の瞬間、思わず大声で叫んでしまう。

さて、そんな僕の視線には、緑色の不気味な肌、タコのようなイカのような……と、とにかく、あの手の生物を連想させる触手が背中から生えた気味の悪い怪異な生物へと変貌を遂げる、この安座主公園の清掃員と思われる人物の姿が映り込んだ。

「うおッ！？ なんだ、ありゃあああ！」

僕同様、恵介も驚愕の声を張り上げる。

さて、異形の生物へと変貌を遂げた清掃員——いや、最早、怪異と呼んだ方がいいだろう。で、そんな怪異は僕や恵介の絶叫を聞きつけ、これまた不気味な唸り声を張り上げながら近寄ってくる。だが、その動きはスローモーションと言ってもいいくらいノロノロと

した鈍いものである。

「あらあゝ……なにかしらあ、あのおへんな生物はあ」

一方で明日香は相変わらずニコニコと微笑んでいる。ホントオオに気楽だなあっと――

「お、おい、あの化け物がこっちに来るぜ！　お、おい、この化け物！　近寄るんじゃないやねええええ！」

ちよつとばっかし勇気を振り絞るかのように恵介は、キツと鋭い声色で怪異に対し、怒鳴りつける。

「ねえねえ、あ、あんなノロノロとした奴だよ。ここはさっさと逃げようよ！」

そう瑞希が提案。まあ、確かに逃げた方が得策かもしれない。そんな雰囲気ではあるが――

「ほ、ほら、早く！」

この場から一刻も早く逃げ出したい気分の瑞希は、ぐいっと普段なら決して発揮することがないような力をここで解放する、とばかりの力任せな感じで僕が左手を引っ張る。

「そ、そうだね、さっさと逃げ出そう！」

「うんうん、さっさに逃げよう！」

僕と瑞希、そして恵介となんだか状況がよく分かっていない明日香の4人は、ノロノロとした鈍い動きで迫ってくる怪異の目の前から一目散に逃走する。

「マ、マテェ！？　オレハ……化け物じゃ……ウウウ、ウギヤオオオオ！」

自分の目の前から逃げ出す僕らに対し、怪異がなにかを言ったようだが、そんな話が終える前に怪異はまるで苦しみ悶えるかのような絶叫を張り上げると、地面に倒れ込む。それと同時に、怪異の身体が徐々に徐々にと融解していき、あつと言う間にドロツとした緑色の液体と白骨を残して死滅する。

「ふむ、失敗だな、この葉……」

さて、死滅した怪異の様子を木陰からジッと観察している白いタ

キシードに内側が真紅で外側が黒というマントを羽織った顔の鼻から上を銀のマスクで覆った長身痩躯の男の姿が見受けられた。

この男は一体、何者なんだ！？

第2話「邪神胎動」その2（前書き）

変身ヒーローでも出してみようかな〜と考えてます^^

第2話「邪神胎動」その2

第2話「邪神胎動」その2

「や、やばいなあ……。みんなとはぐれちゃったよ！」

怪異から逃げ出す僕ら——だけど、いつの間にか散り散りになってしまっていた。

んで、とりあえず僕は安座主公園の中心にある噴水池のところへやって来る。

普段なら近くにあるベンチでイチヤイチャしているカップルなんかの姿をよく見るんだけど、やっぱり今日はなにかがおかしい……。

「ここにも人がいない……」

僕は自分の周囲を見回してみる。

安座主公園内でも人気スポットである、ここ噴水池の周りには昼夜に問わず若い男女……。要するにカップルの姿が見受けられるところだけど、今日に限って猫の子1匹いない状態だ。

「さ、さっきの化け物が原因なんだろうか!？」

僕はゴクリと生唾を飲み込みながら、再び自分の周囲を見回す。

「やっぱり誰も居ないか……」

やはり誰の姿も見られない。

「はあ、なんなんだよ、一体!」

異質で異形、今のも先ほど出遭った化け物が再び出現しそうな気配する感じさせる不気味で禍々しい黒雲が立ち込める空——僕は言い知れぬ不安に駆られると同時に、なんでこんな場所に! ……という感じでご立腹だ。

その刹那——

「ヌウ、マダ生キ残ッテイル人間ガイタトハナッ!」

音程がズレまくった奇妙な声……。いや、人間が発する声ではない。

むしろ人間とは異なった生物の声がどこからか聞こえてくる。

「ヒイッ!?　なんだ、この声は!」

そんな声に思わずビクビクと恐れをなす僕が、不意に禍々しい黒雲が立ち込める虚空を見上げると、そこには背中には一対の蝙蝠のような羽が生えた緑色の肌をした奇妙な生き物の姿が――

「ヒイイッ!　また出たあああ!」

僕は悲鳴を上げる。

「我ラガ邪神様ノ生贄ニシテヤル!」

悲鳴を上げる僕をまるで挑発するように不気味な生物――怪異は、背中に見受けられる蝙蝠のような羽を羽ばたかせながら、目の前に降りてくる。それと同時に、ツーンと鼻を刺す悪臭が漂い始める。

「ケケケッ俺様ガ怖イノカ?」

怪異は魚類や両生類のようにぬめった感じがする手で僕に触れようとす。僕は恐怖を通り越し、恐慌に陥り、身動きひとつ取れない金縛り状態だ。

「実ニ美味ソウナ娘ダ。ドレ、我が髪に捧ゲル前ニ試食ト洒落込ムトシヨウ!」

怪異は恐慌に陥り、金縛り状態となった僕に対し、さらに追い討ちをかけるように、ジュルリと口許を何度も嘗め回しながら、そう言い放つと、怪異の鼻が曲がりそうなくらい強烈な悪臭を放つ口をガバツと開く。

（ば、化け物は僕を食べるって言うのか!?　……絶体絶命の危機に僕は直面しているのだろうか!?　うあああ、こんな奴に食べられたくなんかない!　神様、助けて!）

とにかく、誰か助けて……!?　僕は胸中で神頼み。

ドーンッ!

「えッ!?」

僕の願いが通じたかは定かだけど、怪異が弧を描いて大きく吹っ

飛ぶ。

「O K O K ♪ まだ生きていたようね、狂一クン」

「あ、狂子さん！」

僕の目の前の颯爽と正義のヒロイン……いいや、ある意味で絶対悪の存在と言っても過言じゃない狂子さんが現れる。んで、そんな狂子さんは事典を連想させる分厚い一冊の本を持ち合わせている。

（気のせいかな？ 狂子さんが持つてる“あの本”が光り輝いているような……）

狂子さんが持ち合わせた事典を連想させる一冊の分厚い本が淡い光を放っている……という錯覚を僕は覚える。

「さて、狂一クン、貴方の出番よ」

「えッ!？」

僕の出番!？ 狂子さんが何を言ってるのか、さっぱりだ？

けど、彼女の顔には、これから起きるであろう“なにか”を見ただけで予感させるようなものがこれでもかかってくらいが彩っている。

「この本……この仏滅町に伝わる都市伝説、“天宮 弓子の魔道書”こと、彼の有名魔道書【ネクロノミコン】の日本語による写本——【んこみのろくね】に秘められし力によって目覚めなさい、“邪神を断つ剣”よ」

そう言い放ちながら狂子さんは、その手に持つ事典を連想させる一冊の分厚い本——この仏滅町に伝わる都市伝説のひとつ“天宮 弓子の魔道書”こと、【ネクロノミコン】とかいう魔道書の写本であり、日本語版でもある【んこみのろくね】を頭上に掲げると、その刹那——

バリバリバリバリバリバリバリバリバリバリバリバリバリバリバリバリバリッ!

「うわあああああああああああああああああああああああああああああああッ!」

頭のとっぺんから足の指先まで全身くまなく、まるで激しい電流が駆け巡るかのような激痛が駆け巡る。

「うふふ、成功のようね！」

狂子さんはそんな苦しむ僕の様子を見て狂喜している。おいおい……。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおあッ！」

僕は再び絶叫を上げる。そんな絶叫とともに僕の身体は徐々に変貌を遂げていく。

銀色に変化し、背中まで伸びる髪、燃え盛る炎を連想させる真紅の瞳、そして二対四枚の純白の翼が背中から生えると、その次の瞬間、銀色に変化した髪の毛と同じ銀色のアーマーが僕の身体を覆う。

この姿が“邪神を断つ剣”とやらなんだろうか？

第2話「邪神胎動」その3（前書き）

修正しました〜^^；

サマエルさんもちよっただけ登場です（あ

第2話「邪神胎動」その3

第2話「邪神胎動」その3

「これぞ、天宮 弓子の魔道書こと、【んこみのろくね】と我が愚弟……いやいや、愚妹を媒介に対旧怪異生物戦専用機人〈銀天使〉は誕生するのよ！ うふふ……あ、あははははははははははッ！」
狂子さんの哄笑が異質な空気が支配し始めた安座主公園内に高らかに響きわたる。

「む、むうう……」

それはともかく！ ぼ、僕の身体は一体、どうなってしまったんだ！

「ウギギ……。我々ニ抗ウ存在ノ出現ダトイウノカ！ ダガ、無駄ナコトダ！ コレカラ死ヌノダカラナ！」

ギョルリと口許をなめずり回しながら、怪異は狂気が彩った声で言い放つと、〈銀天使〉に変身した僕に向かって飛び掛ってくる。

「うわああッ！ おっ……み、見えるぞ、化け物の動きが！」

〈銀天使〉へ変身したことで身体能力が想像以上に向上した様子。僕は軽やかな足捌きで飛び掛ってくる怪異の攻撃を受け流す。

「ホウ、ヤルデジャナイカ、人間ヨ！ ダガ、俺様ハ貴様以上ニ強いゾ！」

怪異は鉤状の鋭い爪が生えた両手を交互に振り下ろしながら襲い掛かる。

「くっ！」

僕は怪異の攻撃を軽快なフットワークで回避。

「ああ、〈銀天使〉でいられる時間は180秒——つまり3分しかないから即行で片付けないいけないわよぉ♪」

「えええ〜！？ たった3分しか変身できないのお！ まるで某巨

大ヒーローとかインスタントラーメンみたいもんじゃないかあ！」
怪異の攻撃を回避しながら、とりあえず攻撃の機会をうかがっている僕に向かって、ニヤニヤと嫌味ったらしく微笑みながら狂子さんが、〈銀天使〉に変身してられる時間はたった3分間だけであると告げる・

それを聞いて、当然、僕は焦った。

「はああ……。たった3分しかないならぐずぐずしてられないなあ……」

タイムリミットまでたったの3分。こんないい加減な時間しか変身してられないのか——そう思うと自然と溜息が出てくる。それはともかく僕は、襲い掛かってくる怪異の攻撃を回避しつつ、身構えジャブの容量で何度か連続で拳を怪異に向かって振るう。

「ウグガアアアアッ！ 貴様アアア！」

怪異の顔面にジャブが連続でクリーンヒットする。予想以上のダメージを与えたのか？ グラリと怪異はよろける。だが、それでも怪異はお構いなしに襲い掛かってくる。

「空手なんかやったことないけど。正拳突きなら——」

僕は利き腕である右腕に力を込める。そして、正拳突きの容量で右拳を真正面に——怪異の異形で不気味な顔面めがけて叩き込む。

ゴシヤアアアッ！

正拳突きの容量で真正面に突き込んだ右拳が、怪異の顔面にクリーンヒット！

それと同時にゴギヤッ！ という奇妙な音が響く——で、よく見ると僕が打ち放った右拳が、怪異の顔面に半分ほど突き刺さっているではないか！

「グギヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！」

怪異は不気味な絶叫——断末魔の叫び声を張り上げると、緑色の

液体と奇妙な骨を残して怪異は死滅する。

「なんだかんだと3分って経つのが早いわねえ」

「え、もう？」

左手の腕時計を見ながら、狂子さんはニヤニヤと笑う。

その次の瞬間、僕の身体を覆う銀色のアーマーが眩い光輝く粒子となって飛び散り、空気の中に消えていく。そう〈銀天使〉の状態が解除され、元の姿に戻ったってわけだ。

「あらあら、凄い現場を見ちゃったのかな……」

〈銀天使〉へと変身し、怪異との死闘を演じる僕の姿を目撃し、その現場を半ば呆然としながら見つめていたサマエルが、僕が〈銀天使〉の状態から通常の姿へと戻ると同時に、ハッと我に返ったようにドタバタと喧しい足音を奏でながら駆け寄ってくる。

「ふむ、これで1匹撃破ってところかしら」

「えええッ！？ 他にもあんなのがいるのおお！」

僕が斃した怪異の他にも何匹かの怪異がいるようなことを言う狂子さん。僕はそれを聞いて、啞然とする。

「ほらほら、噂をしたらなんとやら……」

悪い噂はしない方がいいと思う。本気でそう思う瞬間が訪れる。

「うわあああッ！？ また出たあああ！」

「あらあら、また湧いて出ましたわね！」

虚空を見上げると、不気味な影が数体見受けられる。間違いない怪異だ！

「〈銀天使〉に再び変身できるまでには、約10分ほどチャージが必要だわ。それまで逃げるとしましょうか！」

「う、うん！」

〈銀天使〉に再び変身できるまでには、狂子さんの話では約10分ほど時間がかかるようだ。そんなわけで僕と狂子さんは、これでもかかって思えるくらい全力疾走で上空から僕らを狙っている怪異から逃走する。

「とりあえず、この【んこみのろくね】があるわ。奴らをギリギリ

避けることはできる！」

「で、でも！」

「ゴチャゴチャ言わない！ 正義のヒロインでしょ、あんたは！」

「か、勝手なこと言わないでよ、狂子さん！」

狂子さんは、多分、【んこみのろくね】に記されていたと思われる守護を目的とした術式——魔法障壁とやらを展開させたんだろうか？ 幾重にも張り巡らされた光の輝く魔法陣のようなモノが、まるで僕らを守護するかのように四方八方に出現する。

「これで防御はよしと！ じゃあ、改めて逃げるわよ！」

「う、うん！」

「逃げましょう、逃げましょう！」

僕と狂子さん、そしてサマエルは再び全力疾走で、上空から狙いを定めている怪異たちの前から逃げ出すのだった。

第2話「邪神胎動」その4

第2話「邪神胎動」その4

「あらあらあ、皆さんとおはぐれてしまいましたあゝ」

須藤 明日香はマイペースだった。とにかく、マイペースであった。

自分が僕や恵介、それに瑞希とはぐれてしまいましたったひとりで、このある意味、異界化してしまっている安座主公園内をとぼとぼとアテも無く彷徨っていることを別段、大変だなあゝ……なんて思っていない様子だ。

そんな明日香の目の前に異形のモノが幽鬼のような虚ろな姿を見せ立ちはだかる。

「キシャアアアアアアッ！」

異形のモノ――怪異は不気味な唸り声を張り上げる。

「あらあらあ、気味の悪い生き物ですねえ」

だが、明日香にはまったく脅しになってはいなかった。寧ろ、リモコン操作可能な精巧に出来た化け物の人形だな、としか思われていない様子。

「ガオオオオオオオオオオオッ！ ウガアアアアアアアアアアアアッ！」

怪異は耳元まで裂けた鉤状の鋭い牙が見受けられる大きな口があらんぐりと開け、ついでに伸縮自在なんだろうか？ 両手の延び縮み可能な爪を展開させ、ジリジリと明日香に歩み寄ろうと企む。

「あらあ、なでなでして欲しいのおかしらあゝ♪」

明日香は相変わらずマイペースだ。しかも、本物の化け物だっことにまだ気がついていないんだだろうか？ だったら、絶体絶命のピンチってところじゃないか！

「んゝ……。気持ち悪いですう。私はあ、可愛らしいものならあ、どんなモノでもおうはな気分になれますけどお、貴方は気持ち悪すぎですう。だからあ、避けさせてもらいますう」

にこにこ微笑み“趣味”じゃないと右手の人差し指を横に振りながら、後ろに数歩後退する明日香は、背負っているリュックサックから手早く事典のような分厚い本を取り出す。

「魔道書って知ってますう？ 私はあ3年3ヶ月かけてえオリジナルの魔道書を作ったですう！ 名付けて【明日香ちゃんの美的な魔道書】ですわあ♪」

【明日香ちゃんの美的な魔道書】——よく分からないけど、明日香はリュックサックの中から取り出した事典のような分厚い本にそんな名前をつけている様子。

それはともかく、明日香は【明日香ちゃんの美的な魔道書】とやらをぱらぱらとめくり始めると、次の瞬間、光り輝く球体が飛び出し、それが小さな人間型の生物——フリルのいっぱいいた黒いワンピース、靴下、手袋、そして真っ赤な派手な靴を履いたゴズロリな格好をした幼女の姿をした妖精へと変化する。

「わぁゝい、成功ですのお！ おぢい様の書庫にあった本の丸写し通りですのお♪」

『うおっ！ キミが僕を呼び出したのかい？』

「うんうん、そうですう♪」

『ふむふむ、まあ、いいや♪ 僕の名前はピコ。まあ、“こつちの世界”じゃ妖精って呼ばれてる存在だお！』

「あらあらあ、妖精界なんて世界があるのかしらねえ♪」

『そりゃもちろんだお！ さて、キミは魔術師なのかな？ まあ、

一応、呼び出されたからにはキミが僕の主だお！』

妖精は自分を呼び出した者こそ、自分の主である——と言いながら、明日香の周りを飛んで回る。

「あらあ、そうなんですかあ♪ じゃあ、あのヘンテコな生き物をぶちのめしてえくさいですのお！」

私のご主人様よ……つとばかりに明日香は、そんな命令を妖精に下す。

「あいよっ！ あのキモい奴をぶちのめすんだね？」

妖精は目の前の奇妙な生物——怪異をぶちのめすことを容認。で、次に瞬間、再びその姿を光り輝く球体へ変えようと、物凄い勢いで空中を舞いながら、怪異めがけて突撃する。

「ガオオオッ！？ ギャガアアッ！」

怪異も光の球体と化した妖精めがけて突撃する。

次に瞬間、なにかも真っ白に染めるかのような純白閃光——純白の虚無がすべてを飲み込んだ。

「あれえ……妖精ちゃんもお、あのヘンてこな生き物もおいなくなっちゃったけど、どこへ行ったんですかねえ」

閃光はあつと言う間に消え失せる。それと同時に、妖精の姿も、あの怪異の姿も消えてなくなっている様子に明日香はきよとんとする。

「おい、こんなところでなにをやってるんだ！ 早くこの公園から出たほうがいい！」

そんなところへ城戸 誠司がハアハアと息を切らせながらやって来る。

「ん！？ どうしたんですの？ そんなに息を切らせちゃってえ？」

明日香はニコニコと微笑を浮かべている。とりあえず解決はしたのかな？ だけど、自分がどんな状況に追い込まれたあまり理解していない様子である。

「ふう、なにをやらかしたか知らんけど、この公園内は今、化け物だらけなのさ。さ、俺と一緒に外へ出よう！」

「あのおまだ野外学習が……」

「そんなこといつでもできるだろ！ さあ、来るんだ！」

「う、うん……」

城戸の態度に臆したのかは知らないけど、明日香はちょっとだけビクッと驚いた様子を見せながらも、そんな城戸と一緒にその場を

離れるのだった。

第2話「邪神胎動」その5（前書き）

他所に投稿した作品をこっちにも投稿しようかなあと企んでいます
w

第2話「邪神胎動」その5

第2話「邪神胎動」その5

「はああ……。みんなとはぐれちゃったぜ。まったく！」

恵介は溜息をつきながら、禍々しい黒雲が立ち込める虚空を見上げる。

「それにしても、さっきの化け物は一体なんなんだあ……。なにかのイベントってわけでもなさそうだし。つか、妙にリアルだったなあ……」

ぐるりと自分の周囲360度を見回す恵介。

「とりあえず、狂一だけでも探すかな。あいつは臆病者だから、近くの公衆便所にでも逃げ込んでそうだし」

とりあえず、僕……。雉飼 狂一だけでも探すかな、と自分の周りを警戒するようにもう一度、ぐるりと見回す恵介は、丁度よく目に留まった公衆トイレへと向かう。

「ふう、そういや最近の狂一の奴を見ると、どこか女っぽい身体つきに見えるんだよなあ」

そう僕の身に起きた変化に薄々勘づいているかのようなことをつぶやく恵介。まあ、バレるのも時間の問題かもしれない。

さて。

「おーい、狂一！ いるなら出てこいよ！」

恵介は公衆トイレの中を覗き込みながら、そう声をかける。

「ギャオオオ！ ギュオオオ！ ガオオオ！」

「んっ！？ どっかでワンコロでも吠えてるのか？」

なにか、獣の咆哮のような叫び声から公衆トイレの外から聞こえてくる。そんなわけで恵介は、公衆トイレの外へ出てみると、そこには――

「ば、化け物おお！」

全身が緑がかった半透明——ゼリー状と言ったほうがいいのだろうか？ そんなゼリー状の身体を不気味に蠢かせる人間型の異形生物が、ピチャリ、ピチャリと水のしたたるような音を奏でながら、恵介に迫っていたのだ！

「う、うわああああっ！」

恵介は悲鳴を上げながら、公衆トイレの中に逃げ込む。

「ギョオオオオッ！」

ゼリー状の身体を蠢かせる異形生物——怪異は不気味な咆哮を上げながら、恵介を追って公衆トイレのところまで迫る！ だけど、次の瞬間、ビシャッという音とともに怪異のゼリー状に身体が吹き飛ぶ。

「え、え、えッ！？ なにが起きたんだ！」

怪異のゼリー状の身体が吹き飛ぶ様を目の当たりにして恵介は呆然とする。

「山村クン、大丈夫だった？」

「あ、春香先生！」

颯爽と現れた春香先生が恵介の許へ駆け寄ってくる。怪異のゼリー状の身体を吹き飛ばしたのって、まさか——

「あの生物は、この公園内に巣食う邪神が放つ瘴気によって生み出された生物よ！ それはいいとして、あれと同一ような異形の生物が他にもうろちよろしてるわ。さっさとこの公園から逃げましょう！」

「あ、う、うん！」

春香先生は、呆然としている恵介の手を引きながら、今や邪悪な気配と瘴気に充満し、不気味な光景する作り出している安座主公園の出入り口を目指そうと駆け出す。

「ギャオオオオオ！」

だが、その刹那、怪異が復活する。バラバラになり、そこらへん

に飛び散った怪異のゼリー状の身体の一部、一部から、また新しい怪異が生み出され、その数がどっと増える。

「厄介だわぁ……。あの手のタイプは核を潰さないといくんどん増えちゃうのよね」

そう言いながら眉をひそめる春香先生。

「せ、先生！　どうでもいいけど、なんでそんなこと知ってるんだよ！」

さて、恵介が何故、そんなことを——と疑問を投げかける。

「ん、そうね。8年くらい前、同じような化け物と対峙したことがあるってことだけ、今は語っておくかなぁ……。ついでに、私は魔術師でもある」

「ま、魔術師！？」

「こそ、魔術師よ、魔術師！　あの手の生物をなんとかできる唯一の職業みたいなものかな？　ああ、テレビに出てるような連中とは別物よ……。っと、一応言っておくわ」

春香先生は魔術師である、と恵介の問いかけに答える。

「それより、あの化け物を何とかしてよ、魔術師なんでしょ！」

恵介は増殖した怪異たちに恐れおののきながら叫ぶ。

「うふふ、仕方ないわねえ♪　まあ、狂子ほどじゃないけど、一応、あれくらいなら……」

春香先生はニコニコと微笑むと、羽織っている白衣のポケットから数枚のカードを取り出す。タロットカードの類だろうか？　いや、違うな。カードはカードでも、真っ赤に燃え上がる眼が中央に描かれた五芒星の絵が見受けられるそんなカードだ。

「ええと……。さっきのは邪神の眷属を避ける旧神の印が施されたカードの一枚で……。ええと、こっちは……」

なんだかんだと、そんな説明を始める春香先生。こんな時によくもまあ……。

「だあああ！　なんでもいいから、あの化け物から逃げられればいいじゃん！」

なんでもいいから逃げられれば——と恵介が大声で叫ぶ。

「うーん、それもそうね。じゃあ、旧神カードで！……って、ありやりや破魔のカードが1枚もないわ！　あるのはLV1の退魔のカードが3枚……」

破魔のカードが1枚もない、そう言っで一瞬だけ慌てるが、相変わらずのマイペースな物腰を崩さない春香先生は、退魔のカードとやらを迫り来る3匹に怪異に対し投げ放つ！

「ぎゅうおおおおおおおっ！」

春香先生が投げ放った3枚のカードは見事に3匹の怪異のゼリー状の気味の悪い身体にクリーンヒットする。それと同時に、3匹の怪異の身動きがピタリと停止する。

「うおッ！？　化け物の動きが止まったあ！」

そんな状況に恵介は驚く。

「とりあえず、LV1の効力の弱いカードだけど、あの手の連中には効果があるのよね、旧神の印が描かれたカードは！」

両目をぱちくりさせながら驚いている恵介に対し、春香先生は自慢げの微笑む。

旧神の印——この印が暗黒の力を解放する、と前に狂子さんから聞いたことがある。そんなわけで怪異のような人あらざる邪悪な存在を避けることも当然できるのだらう。

だけど、春香先生曰くLV1の効力の弱いカードらしいので、なんとか怪異たちの身動きを止める程度と言った感じである。

それはそうと、今が逃げるチャンス！　キツと意を決したように春香先生は、

「ふう、とりあえず、今のうちに逃げましょう！」

と言いながら、恵介の右手を半ば強引なかたちで掴む。

「は、はい！」

怪異たちの動きが止まってる間に——ということで恵介と春香先生は、全力疾走で怪異たちの目の前から逃げ出す。

——で、恵介と春香先生の姿が怪異たちの視界から消え失せると

同時に、そんな怪異たちは再び動き出す。

「ふむ、ゲル状の怪異とは遭遇か……。とりあえず排除しておくべきだな」

効力の弱いLV1とはいえ、旧神の印が描かれたカードの効果で一時的に行動不能となっていたが、再び獲物を求めて動き出す。だが、そんな怪異たちの目の前にひとりに男が立ちはだかる。

キリスト教絡みの漆黒の衣装を身にまとう大柄の黒人男性――あのマルコ神父だ。

「さっさと、片付けて【んこみのろくね】の保有者を探し当てないといけないな」

マルコ神父が溜息をつきながら、怪異たちに向かって立ち向かっていくのだった。

第2話「邪神胎動」その6（前書き）

やっと出来上がりました＜＜

第2話「邪神胎動」その6

第2話「邪神胎動」その6

「ねえ、ねえ、あの化け物なに!？」

「私も知りたいわぁ!　つか、あれに近い化け物を8年前にもちらっと見たんだけど……」

「ええええッ!?　マジでえ!」

「うんうん、見たわ、見たわ!」

瑞希と由香里は「キャー、キャー」と悲鳴を上げながら逃げ回っていた。あっちを行ったり、こっちを行ったりと――

と、その前に、怪異に追い回されていた瑞希と遭遇した由香里は、彼女を助けようとするが、逆に自分も追いかけられるはめになる。そんなわけでふたり一緒に逃げ回っているわけだ。

「ぎゃおおおおおおおおおっ!」

さて、そんな二人を四つん這いの化け物――怪異が追いかけているのだった!

「お、お姉さんは見た感じだと刑事さんみたいけど、この状況をなんとか打開できないの!」

「あうう、そんなこと言われてもお!　つーかあんな化け物相手だよ、ヘタしたらこっちがやばくなるわ!　こーゆー場合はひたすらに逃げ回っていればきつと逃げ場が見つかるって寸法よ!」

「ええええ!　ま、まあ、そうかもね……」

「危ない橋は渡らない!　それが私のポリシーなんだなあこれが――」

頼りない刑事――というか、怪異が相手なんで、この状況を打開

するには難しいと判断し、ひたすら逃げ回ろう……みたいなことを言う由香里に対し、瑞希は期待はずれだな、と厭きれる。

「どわああああっ！ 前からも来たあああ！」

その矢先である。怪異がもう1匹出現する。しかも、瑞希と由香里のゆえ手を遮るように――

「ひいひいっ！ ぜ、ぜ、前門の虎、後門の狼ってところね！」

前門の虎、後門の狼、前へ進んでも危険が、一方で後ろへ進んでも危険が迫る！

とどのつまり瑞希と由香里は2匹の怪異によって追い詰められたわけだ！

「絶体絶命だあああ！ こ、こ、こ、こうなったら！」

絶体絶命、と由香里がひしゃげた声で叫ぶ。で、そんな時だからこそ彼女をとある行動へと駆り立てるのだった。

「こ、こ、この拳銃を使う時が来たのかな……。あはは……複雑だなあ……」

由香里は持ち合わせている一応、ブランド物であるバックから、一丁の拳銃を取り出し、それを前から迫り来る怪異、そして背後から迫り来る怪異に対し、その銃口を順に向けるのだった。

「わお、拳銃！」

うひゃーっ！ 自分も撃たれる！ ――っと、でも瑞希は勝手な妄想という邪推でも思い浮かべたのか、両手で頭を押さえながら悲鳴を上げる。

「そ、そんなことしないわ！ ま、まあ、ともかく……撃っちゃいます！」

由香里はそう瑞希に言った刹那、前方から迫り来る怪異に狙いを定め、そして意を決したように両手で握りしめている拳銃のトリガーを引くのだった。

ドギョウウウウウウウウウウウウッ！

由香里が両手で握りしめている拳銃の銃口がけたたましい音を奏でながら火を噴く。銃弾が螺旋の軌跡を描きながら、前方から迫り来る怪異目掛けて飛び交い。それがなんと！ 怪異の額にクリーンヒットする！

「ぎゃ、ぎゃおおおおおっ！」

ブシャツと銃弾が額にクリーンヒットした怪異のそんな額から、おぞましい緑色の血液が噴出す。で、そのまま怪異は絶命したのだろうか？ ドサツと倒れこみ動かなくなる。

「うは、あ、当たったわ！　つか初めて対象物に銃弾を当てることできたわ！」

「えええええ！　それマジ……。聞いててこっちが怖くなったかも」初めて、銃弾を対象物にヒットさせることができた！　なんて喜ぶ由香里のそんな様子に瑞希は思わずゾツと冷や汗をかく。

「うわわわ！　そういえばもう1匹……。って、うわああああああっ！」

ここで由香里は大事なことを思い出す。

そう怪異は一匹ではないことに。四つん這いで後方から迫り来る怪異の存在をすっかり忘れてしまう。

さて、その油断が招いたのか？　怪異の両手がグワツと巨大化し、右手に瑞希を、左手に由香里をそれぞれ掴み上げる。

「イヤアアアアアアッ！　こ、殺されるううう！　殺される！」

「こ、殺される前に、あんなことやこんなことをされるんだわあきつと！」

ふたりは死を覚悟する、というか殺される前にあんなことやこんなことをされる……。つと、そんな感じの妄想を頭の中で思い浮かべながら悲鳴を張り上げる。

さて、まさにそんな時であった。怪異の巨大化した腕が緑色のおぞましい血液を吹き散らしながら吹っ飛ぶ。それと同時に、怪異の不気味な頭がパンツと高い場所から落下し砕け散ったスイカのように吹き飛ぶ。

丁度よく、駆けつけ〈銀天使〉へと再び変身した僕が怪異へと攻撃を加えたのだ……というか、怪異を頭を吹き飛ばしたのは、天宮弓子の魔道書こと【んこみのろくね】に記載された魔術文字から紡ぎ出された狂子さんの攻撃魔術であるが。

まあ、なにはともあれ、瑞希と由香里を救うことができただけいいかな、うんうん。

「さて、さっさとこんな場所を抜け出すわよ！ 【んこみのろくね】さえあれば、並みの怪異なんか目じゃないわ！ それに〈銀天使〉が一緒だしね♪」

天宮 弓子の魔道書こと【んこみのろくね】と〈銀天使〉——つまり僕がいれば並の怪異など目がじゃない！ と狂子さんが豪語する。

まあ、確かにその通りだけど、油断は禁物だと思う。
さて。

「うわっ！ 特撮ヒーローって感じの人だあ！」

瑞希は今頃、〈銀天使〉と化した僕の存在に気がつく。そしてきやーきゃーと騒ぎながら、僕の周りを行ったり来たりと忙しく駆け回る。

「あれれ、8年前にも同じようなヒーローさんを見かけた気がするけど、あれは気のせいかな？」

由香里は8年前にも同じような存在——つまり〈銀天使〉を見かけたような……というデジャビュを覚え、神妙そうに左手の人差し指を口許に当てながら首を横に傾げる。

「気のせいよ、気のせい……。さ、また怪異が現れた厄介だから、さっさとこの安座主公園から立ち去るわよ！ ああ、春香たちならすでに外へ出たって電話があったから大丈夫！」

〈銀天使〉形態から元の姿に戻る僕——それを見てさらに忙しく、そんな僕の周りを駆け回る瑞希はともかく、春香先生、明日香、それに恵介も無事との事。

まあ、そんなこんなで僕は狂子さんに導かれるまま、ここ怪異が

出現、そして禍々しい空気が漂う安座主公園を後にするのだった。

第2話「邪神胎動」その7（前書き）

えっと、第2話はこれでおしまいです^^
次回から第3話につきまゝす！

第2話「邪神胎動」その7

第2話「邪神胎動」その7

某都道府県S市のベッドタウンである仏滅町には、仏教伝来以前の遺跡や神社といった神代の時代を連想させる建造物がいくつかに存在する。

そのひとつ——5世紀後半だったか6世紀前半に建立された、と伝えられる白鳳神社の巫女であり、日に3万HITは叩き出す人気ブログ『猫の巫女』の主である神崎 燐華という人物が、そんな自身のブログに、

「この町は今、超危険なことが起こり始めています！ 何千年、何万年の時を経て蘇るのです、邪神が！」

こんな奇妙なことを書いたことが起因し、興味本位でこの町——仏滅町へやって来る者も増えている。

まあ、それはそれで町の発展に繋がるなら、僕はそれでいいとは思うけど……。

「はあ……。マジで洒落にならないよ」

僕は……雉飼 狂一は私室の窓辺から、煌々と瞬く今宵の夜空の主役です、と如何にも言っているような満月と、その周囲でチカチカと輝く星々が幻想的な光景を作り出している夜空を見上げながら、小さな声で呟いた。

「僕はこのまま女の姿で一生を送るのだろうか……」

そう考えると気が重い——ああ、先が思いやられる、とはこーゆーことなんだろうか？

「もういい！　今日はもう寝る！」

明日、明日になれば――そう願いつつ枕元の照明を消し、僕はベツドの布団の中へと潜り込むのだった。

「あう、眠気がまったく……」

布団の中に潜り込んだ――まではよかったかな。だけど、眠気がまったく……。そんなこんなで僕は真っ暗闇の私室の天井を見上げ続けるのだった。

「へえ、それは我が町の伝説的人物――天宮　弓子の魔道書こと【んこみのろくね】つつうモノか！　つか、姉さんが持ってたとはなあ」

深夜――一部の連中以外、大抵の人間は夢の世界と現実の世界の狭間を行き来している睡眠時間である。

こんな時間であっても平気で起きている人間の神経はどうなんだろう……と僕は思っているところである。

さて、そんな時間であっても平気で起きている人間のひとりが僕の兄、狂介と叔母、狂子である。

「ん、まあ、そんなところね。でも、この【んこみのろくね】は、あたしたち――8年前のあの事件を知る者たちにとっては、【白の書】という通称で呼んでいる場合もあるわねえ……」

夜食かは知らないけど狂子さんはドーナッツを口にくわえながら、自分が保有している【んこみのろくね】は、【白の書】という通称で呼んでいる、と狂介兄さんの問いに答える。

「ほうほう、8年前か……。姉さんもまだ高校生だねえ。今は口やかましいオバサンだけだなあ〜♪」

「そうそう、まだあたしの若々しい……って、今だって若々しいわよ、この馬鹿！」

「うわ、いきなりビンタはねえだろ、この野郎！」

「うるさいわね！　この超美人で超天才のあたしをオバサン呼ばわ

りしたお返しよ、この今時流行らないリーゼント頭の古代人！」

狂介さんと狂子さんの会話は、いつの間にやら口論へと発展：
：つと、まあ、我が家はこれが普通なんだよなあ。

「喧嘩はいけませんよ！」

おろおろとしながらアカリが、そんなふたりの間に割って入るが、それも無駄に終わるのだった。

「はあ、また始まったよ、まったく！ 今の時間帯に騒ぎと近所迷惑になるだろうに……」

自宅の2階にある僕の私室にまで狂介さんと狂子さんの怒鳴り声が響きわたる。

「耳栓が必要不可欠なんだよなあ、我が家は……」

僕はとりあえず耳栓を両耳に突っ込むと、再び布団の中に潜り込む。当然、今の騒ぎでちよつとだけ眠たくなってきたところが、それも完全に吹っ飛んでしまう……あああ、最悪だよ。

そうしているうちに東の地平線の彼方から、太陽が顔を出し始める――早朝という時間がやってくるのだった。

第3話「蠢く邪神」その1（前書き）

第3話開始です^^

新キャラも登場しますW

第3話「蠢く邪神」その1

第3話「蠢く邪神」その1

容姿端麗で才色兼備、こんな言葉がよく似合う一方で、頭のいかれた化学実験なんかも平気でやっちゃう鬼のような人……それが僕、17歳高校生である雉飼 狂一とは9歳しか年が離れてはいないので姉のようであるが、一応、父親の妹ってことで叔母という間柄にある雉飼 狂子である。

そんな叔母の狂子さん曰く『正義のための人身御供』、『正義のための化学実験』……なんて馬鹿げた理由を大義名分の被験者となった僕の性別は、なんと入れ替えられてしまった！ うわあああっ！ これから僕は女として一生を過ごさないといけないのか！ で、でも、女のままでもいいなあ……とか地味に思い始めてきた僕は一体、なんなんだろう？

某都道府県S市のベッドタウンである仏滅町。

訪れた者の感想は、穏やかでなにもない閑静な町——と誰もが例外なく認識するそんな町なんだけど。

昨日、町の裏側を偶然知ってしまった僕は非常に……そして微妙に複雑な気分であった。

殺風景と言ってもいい私室の窓を開けると、爽やかで心地の良い春風がサーッとレースのカーテンを揺らしながら、部屋の中に入り込んでくる。

「ううーん、清々しい清涼感あふれる日だなあ」

僕は思わず深呼吸をする。

「うわ、寒い！ 窓を閉めてよね！」

「そうだ、そうだ！ 寒いから窓を閉めるんだ！」

だけど、そんなふたつの忌々しい声のおかげで僕の気分は暗転する。

「ぬああああっ！ なんで兄さんと狂子さんが僕のベッドの中にいるんだよ！ しかもふたりとも下着姿じゃないか！」

はあ、まったく、なんでこのふたりは……。僕は溜息をつきながらガクンツとうつぶいた。

「コ、コンビニへ行ってくるよ！」

こんなふたりと一緒に居たくない一心で、僕はそさくさと着替えると私室を後にする。

「あらあら、せっかく添い寝してあげたのに……」

そんな僕に対し、狂子さんはムスツと唇を尖らせる。

自宅の外へ出るとさらに清々しい春風が僕の足許を吹き抜けていく。

こんな清々しい気分でいられる時間が永遠に欲しい、と僕は思う。自宅には害虫のような二人組みはいるし、身体は女性化するし……。

色々あって僕の心はバッドな気分で満たされている。でも、こんな吹き抜ける清々しい春風が、それを一瞬だけ忘れさせてくれるようだ。

「あ、サラシを巻くのを忘れちゃった……」

ふと僕は思い出す。自宅を飛び出し、いざ近所のコンビニへ——と思い立ったが、女性化の象徴である狂子さんほど大きくはないが、それなりに大きくなった胸を目立たなくするためのサラシを巻き忘れたことを思い出す。

（まあ、気づかれなければそれでいいかなあ……）

誰かに出逢っても女性化した今の僕の身体に気がつかなければいいなあ……と僕は胸中で願う。

「あれゝ雉飼クンだよねえ♪」

「うッ!？」

胸中でそんなことを願った直後、背後から首のところに手を回したかたちで僕に抱きついてくる者が現れる。

んで、振り返ると、赤いタンクトップにジーンズという格好をした黒髪のショートカットというボーイッシュな容姿の少女の姿がそこにあった。

「す、す、諏訪部先輩!？」

思わず苦笑を浮かべながら、ボーイッシュな少女の名を僕は呼ぶ。彼女の名は諏訪部 真央。

僕が通う冥皇学園の1学年上の先輩に当たる人物である。

「ねえねえ、昨日、安座主公園でなにやってたの? つーか、なんであたしを誘ってくれないわけ!」

「いや、あのその……」

「あ、分かった! みんなであたしを除け者にする計画ねえ! そんなの許さないんだから!」

「はあ、なにを勝手な……」

ちよっと被害者妄想が激しいところもあるけど、決して悪い人ではない。だけど、僕にはちよっと付き合いにくい人かもしれない。

「ああ、そういえば。昨日、安座主公園で殺人事件があったみたいね! ふう、なんつーか行かなくてよかったかなあゝ♪」

「う、うん……」

「最近つつうか、ここ数日の間に殺人事件が多発してるのよね! 危ないったらありゃしない!」

話し始めたら止まらない……。そんなこんなで僕は彼女がちよつとウザかったんだけど、気弱な性格が災いして口に出せないでいた。はあ、我ながら情けないなあ……。

「ねえ、それより、なんで胸パットなんか入れてるのさ?」

「え、あ……。な、なんでもないよ、なんでも！」

不意に諏訪部先輩の手が僕の胸に……。

やばいなあ！ バレる！ そう思った僕は彼女を振り払い自宅がある方へとランナーウェイする。

「あの感触は……。うふふ、きっと狂子先生になにかされたのかな

？　　なんか面白そう……。追いかけてみるかな♪」

そうなにやら策謀する諏訪部先輩は僕の後を追いかけてくるのだった。

おいおい、なんでだよ！

第3話『蠢く邪神』その2（前書き）

ちよつとネタ不足で困ってますがなんとかがんばります！

第3話『蠢く邪神』その2

第3話「蠢く邪神」その2

「ふう、なんでいつもいつも！」

僕はグチグチと文句を言いながら、自宅の玄関に駆け込む。

靴なんて2、3足あればOK……なんて考えてる僕と違って狂介兄さんと狂子さんは靴を何足も持っている。

そんなこんなでふたりの靴で埋め尽くされた玄関の靴箱が、ある意味で目を見張るのが、僕の自宅の玄関に特徴かなあ？

「あら〜お早いお帰りねえ」

と缶ビールを手にとって狂子さんと僕は鉢合わせとなる。

まったく、朝っぱらからビールなんか飲んでちゃってるよ、この人……。

「あらあら、お友達が一緒のようねえ〜」

「えっ!？」

「うふふ、一緒に来ちゃったわ! あ、狂子先生、おはよう♪」

友達も一緒? と狂子さんはビールががぶがぶと飲みながら言う。

僕はきょとんとしながら背後を振り返る……と、そこには両手を腰の後ろで組んだ形でニヤニヤと微笑む諏訪部先輩の姿が!

「うえ〜……なんで諏訪部先輩がここにいるんだよ〜!」

僕は大きな溜息をついてガクンツとうつぶいた。

「な、なんということだっ! この街で一体、なにが起きていると
いうのだ!」

S市にある某国際空港から、そんなS市のベッドタウンである仏滅町へと向かうタクシーの中で男は暇つぶし……という感じで買った今朝の新聞のとある記事を見て、思わずそんな大きな声でつぶやいてしまう。

その男の名前は雉飼 狂蔵。僕、雉飼 狂一の父親である。

んで、アメリカ合衆国のマサチューセッツ州にあるアーカムという町に200年以上前から存在するミスカトニックという名門大学での仕事……つか僕らには行方不明というかたちで長期滞在していたようだ。

まあ、そんなこんなで某名門大学での用事を終え、つい先頃、日本へ帰国。そして、実家がある某都道府県S市のベッドタウンである仏滅町へと帰る途中であった。

さて、そんな父さんの容姿を一言で説明すると、ヒゲマツチヨの大男。

でも、

「我々人類が誕生する以前の世界は、宇宙の暗闇からやって来た邪神たちによって支配されていた暗黒の時代だったのだ!」

——みたいな奇妙な学説を唱える奇人変人な考古学者としても有名な人物でもある。

ついでに、

「サタンやルシファーと呼ばれる人々が悪魔や堕天使と呼ぶ者たちは、実は邪神と呼ばれる悪しき神々と倒すために立ち上がった勇者であったが、抗うことができず敗れ去る。そして、邪神とその一派によって悪魔化され今の至る!」

こんなある意味で世界中のキリスト教徒を敵に回すような学説を唱えたばかりに父さんは、悪魔崇拝者という徒花としても有名な様

子。

中東の某国にある人類最古の文明であるシュメール文明の遺跡を調べに行ったときなど、現地人……っと、この場合はテロリストに危うく殺されかけたこともあるとか……。

そんな男、雉飼 狂蔵を父に持つ僕、雉飼 狂一は正直、複雑な気分であった。

余談だが、父さんは42歳。んで、厄年である。

「それよりも息子たちや愚妹の狂子は元気だろうか……。とりあえず心配しておこう」

父さんは両目をうんうん、と頷きながらつぶやく。

「そーいえば、お客さんはこの町の出身者のようですね？」

不意に父さんが乗るタクシーの運転手が、スッと後ろを振り返りながら、そう話しかけてくる。

「ああ、その通り。自分は生まれも育ちも仏滅町ってところですよ」
父さんは、とりあえず、そんな返事を返すと、再び新聞を見始める。

「私はこの町に来て数年ですが、この町には色々な伝説があるんですね！ 例えば、天宮 弓子の魔道書の伝説とか、散夜姫の亡霊伝説とか！」

「うむ、この町には他に、幕末の動乱期にアメリカから吸血鬼がやって来た、なんて都市伝説さえあるぞ！」

天宮 弓子の魔道書の伝説、綾乃姫の亡霊伝説……etc

とにかくっていうか、仏滅町にはS市のベッドタウンであるが、その歴史の古さから数多くの都市伝説が今も数多く残されている。

まあ、そんなこんなでタクシーの運転手と父さんは、この仏滅町に伝わる都市伝説の話で盛り上がるのだった。

（ふう、この町の都市伝説の多さには、ある意味で驚かされる。やはり、深き眠りについていとはいえ、あの存在が存在するかぎり、怪異なるモノを呼び寄せ続けているのだろうか？ まあ、杞憂ならいいが……）

都市伝説の話で盛り上がる一方で父さんは、そんな杞憂を胸中で抱くのだった。

第3話「蠢く邪神」その3（前書き）

ついに冥皇学園でも殺人事件が起きてしまいます！
ついでに加筆修正しました！

第3話「蠢く邪神」その3

第3話「蠢く邪神」その3

「うふふ、今日もいい天気ですわねえ。こんな日はお昼寝に限りますわア〜♪」

ハイツ仏滅——どこにでもあるようなごくごく普通の有り触れた3階建てのマンションの202号室の窓が勢いよく開く。

んで、そこから顔を出したのは、あの金髪碧眼の美人シスターサマエルであった。

フワフワの珠のついた赤いナイトキャップと赤いパジャマ……季節はずれのサンタクロースのような格好をしている。

「ああ、なんだかすぐく眠いんだけど……。うにゆううう……。」

天空で燦々と輝く太陽を見上げながら、嬉しそうにつぶやいた直後、金髪碧眼の美人シスターことサマエルは、急激な眠気に襲われたのかは定かであるが、そのままガクンと窓の外の身体を半分出したかたちでそのまま眠ってしまうのだった。

まあ、それはともかく。

「えへへ、あたしまで朝食をご馳走になっていいんですか？」

「OK、OK、かまわないわ♪」

「やっぱり、大勢で食う食事は美味しいものさ！」

「ねえ、どうでもいいけど、たまには自分で食事くらい作ってら？」

ふう、まるで親鳥が持ってくる餌を巣の中でピーピー鳴きながら心待ちにしている雛鳥のように狂子さん、狂介兄さん、そして闖入者の諏訪部 真央先輩は、チャンチャカとご飯がてんこ盛りになっている茶碗を箸で叩きながら、僕が作る食事を待っている。

諏訪部先輩はともかく、狂子さんと狂介さんの私生活は超自堕落で、掃除洗濯、朝飯、夕飯を絶対に自分からやろうとしない。

まあ、普段ならメイド型のサイボーグであるアカリの仕事なんだが、今日は朝から彼女が野暮用で留守であるせいかな、狂子さんと狂介さんは家事のすべてを僕に押しつける有様……。

まあ、慣れてしまったことではあるが、不愉快で不愉快で仕方がないんだけど、なにを言っても無駄なので諦めている……というかわ句を言ったところで素直に聞くような人たちではないのは目に見えている。

（はあ、なんでこういつも……）

僕の胸中で溜息をつきながら、ガクンッとうつむくのだった。

「ん、そういえば、狂一クンったらさっき胸パットなんか入れてこつそりと女装してましたよ」

「うッ!？」

とりあえず、卵焼き、納豆、味噌汁、あと漬物をいくつか食卓に用意する僕。

「ふむ、アカリならもっと豪勢な朝飯を用意するんだけだなあ」

狂介兄さんはブツクサと文句を言うが、ガツガツと飢えた野良犬のように僕が用意した食事に食らいつく。

（まったく、なんなんだ、この人は!）

さて、僕がそう胸中で文句をつぶやいたその直後、諏訪部先輩がいきなりそんな話をし始め、思わず僕はギクリとする。

「うふふ、女装ですって？ それは違うわあ。今の狂一クンは女性そのものよん」

「ほうほう♪ なんだか興味深い話!」

「あのね、あのね、この間……ウブブッ!」

僕は咄嗟に狂子さんの口を押さえるが、時すでに遅し……。

「よし、同じ女なら一緒にお風呂に入りましょうよ♪ つーか、身体検査よ!」

「ひ、ひいいい! お、断ります! ってことで僕はもう学校へ

行きます〜！」

ニヤニヤと笑いながら、一緒にお風呂へ……。なんていい始める
諏訪部先輩に対し、ゾッと寒気を感じた僕は思わず悲鳴を上げ、そ
してバタバタと忙しく今居る茶の間から逃げ出すのだった。

「ンもう〜つまらない人ねえ！」

両手を腰のところに当てながら、諏訪部先輩はムスツとする。

「はあ、なんで僕の周りには変人ばかり集まるんだあ……」

僕は深い溜息をつきながら、とぼとぼと学び舎である冥皇学園を
目指して歩いていた。

さて、サラシを胸にギュウギュウに巻きつけ女性化の象徴である
胸を目立たなくはしておいたけど、一応、油断はしない方がいいか
なっとな、とりあえず肝に免じてみる。

「ちよっとお、あたしを置いて一人で行っちゃうなんて酷いわあ
！」

「うわ、諏訪部先輩！」

はあ、また諏訪部先輩だよ！僕は思わず苦笑を浮かべる。

諏訪部先輩は学校指定のブレザーとミニスカートという格好をし
ている。とりあえず、学校指定のブレザーさえ着てくれば、下はど
んなものを穿いてOKという校則があるのが、僕の学び舎である冥
皇学園である。で、諏訪部先輩のそんな格好はボーイッシュな彼女
の容姿とは相反するような気もするが可愛いな、と思ってしまふ僕
であった。

「ねえ、さっきからずっとあたしのことを見つめてるけど、どうし
たのかな〜♪ ああ、もしかして自分もミニスカートを穿きたいと
か思ってるのかな〜？」

「い、いや、なんでもないよ、なんでも！」

冗談で言ってるのは分かってるけど、なんだか複雑な気分である。

そんなこんなで僕は顔を赤らめながら一路、学び舎である冥皇学園へ向かって駆け出す……っていうか、諏訪部先輩の許から逃げ出す。「あん、また逃げ出すぅ」

そんな僕を諏訪部先輩は当然とばかりに追いかけてくるのだった。

「え、なんかあったの？」

僕が冥皇学園へと到着した時、その事件は起きたあとであった。

「おお、狂一か！ 聞いてくれよ、今度は俺たちの学び舎であるここ冥皇学園で殺人事件が起きたらしいぜ！」

「な、なんだってー！」

恵介と僕は遭遇する。んで、そんな恵介から、冥皇学園内で殺人事件が起きたことを知らされ動揺する。

「犯人はともかく。殺されたのが、あの美術部の顧問をやってる服部らしいぜ」

恵介は首を横に振りながら、殺されたのは美術部の顧問の先生である服部である、と説明する。

「あの先生か……」

あまりイイ感じのする先生ではなかったが、何故、殺されたんだろう？ 僕は一縷の不安を抱くのだった。

第3話「蠢く邪神」その4

第3話「蠢く邪神」その4

僕、雉飼 狂一が通う某都道府県S市のベッドタウン仏滅町にある小中高、そして大学も含む総合的な学び舎である冥皇学園の高等部の美術部の顧問を務める服部 光二郎先生が昨日の深夜、冥皇学園の4つある校舎のひとつで高等部専用の後者である東校舎4階の美術室で変死体となって発見される。

服部 光二郎先生——僕が昨日、安座主公園で遭遇した怪異を彷彿させる化け物の絵を描かせたら彼の右に出る者はいない、と言っても半ば間違っではない画家であり、ミステリー作家としても有名な人物である。

だけど、性格の問題から生徒たちからは評判が悪い。当然、僕も服部先生が大嫌いだ。

まあ、そんな服部先生が昨日、亡くなったわけだけど、なんていうか複雑な気分かな……。

「あらあら、警察さんたちも大変ですねえ」

首を40度ほど斜めに傾けるサマエルは、ポカーンとしながら冥皇学園校門前に集まる警察官たちをジッと見つめる。

「あ、サマエルさん」

「みゅっ……由香里ちゃん、こんにちは」

バタバタと喧しい足音を奏でながら、美人だがどこかおどけた感じがする眼鏡をかけたポニーテールの若い女がサマエルの許へと駆け寄ってくる。現役警察官であり、一応、先輩でもある深山 由香里である。

「あうう……っ、ついに私たちに学び舎でも殺人事件が起きてし

ましたあゝ！」

「そうですねえ……。なんだか複雑な気分ですわ、ホント……」

ふたりは顔を見合わせる。学校名、そして男子校の冥陽学園との合併によって男女共学制の学校へと生まれ変わったとはいえ、校舎そのものは女子高であった月皇学園そのものということで、その惨事を嘆く卒業生のひとりである由香里に対し、サマエルはボーッとした感じである。だけど、その青い目には怒りのようなものが彩っているように僕は思えた。

「服部 光二郎先生はミステリー作家ということを利用し、作品中に何度も登場させている邪神等の禍々しい連中の実在を警告していたのでは？ と私は解釈しているわ」

とサマエルと由香里の間に狂子さんが割って入り、そう言うのだった。

「狂子先輩、おはようです！」

「おはよう、由香里ちゃん。お勤めご苦労様……。っと、殺された服部先生ってどんな死因だったわけ？ こっそりでいいから教えなさい！」

狂子さんは半ば強引に服部 光二郎先生の死因を由香里に尋ねる。
「うにゅ……。狂子先輩になら特別教えますね。本来、こーゆーことはあれですけど……」

由香里は流石に困った顔をするが……。狂子には特別に、ということ为例の服部先生の死因を小声で話し始める。

「一言で説明するとミイラみたいな……。全身の血を抜かれ、カラに乾いた状態で発見されました！」

全身の血という血を抜かれ、まるでミイラ化したようなカラカラに干からびた状態で服部先生は発見された、と由香里から聞いて、流石の狂子さんもうわっ！ って感じで驚く。

「まるで吸血鬼に血を吸われ尽したって感じじゃん！」

だけど、次の瞬間にはニヤニヤと笑い始める狂子さんは、ある意

味で最悪である。

「あら、狂一クンじゃない」

さて、そんな狂子さんは僕と恵介、そして何故か僕の首のところから手を回した形で抱きついていてる諏訪部先輩に気がつく、ニヤニヤと笑いながら歩み寄ってくる。

「今日は臨時休校よ！ あ、ついさっきアンタのお父さんこと、私の兄である狂蔵が帰宅したわ」

「り、臨時休校！？ それに父さんが……」

狂子さんは臨時休校、と僕らに向かってニヤけながら言う。ついでに、父さんの帰宅を告げるのだった。

「やっぱり臨時休校になるわな……」

「そ、そうだね」

「まあ、臨時休校ってこと本来は喜ぶところだけど、そう言っただけで、実際は……。なにせ、殺人事件が起きたんだし……」

臨時休校、ということ嬉しさもあるが、それと同時に殺人事件が起きたことに対する不安も僕らは抱くのだった。

第3話「蠢く邪神」その5（前書き）

ついに一連の怪事件を引き起こしている連中の名前が明かされます！
第2話のその2&第3話のその3を加筆修正しましたのでよろしく
お願いします^^

第3話「蠢く邪神」その5

第3話「蠢く邪神」その5

ここ最近、真夜中でもパトカーのサイレンが鳴り響き日が増えたような気がする。

これが気のせいならいいけどさ……。

その前に僕の杞憂ならいいけど……。

そんな話はともかく。

僕の学び舎である小中高、そして大学と一度入学すればエスカレーター式で駆け上がっていくことができる冥皇学園の教員のひとりで、高等部の美術部の顧問であり、マニアの間ではちよつとした有名な人でもあるミステリー作家の服部 誠二郎先生が学校内……多分美術室だろうとは思うけど、そこで原因不明の怪死を遂げたことによる臨時休校となり、僕は帰路に着く。

「ねえ、なんで恵介と諏訪部先輩が一緒なのさー！」

「まあ、いいじゃんか、俺たちや親友じゃん♪」

「そうそう♪ 恵介ちゃんの言うとおりよ」

とまあ、何故か、恵介と諏訪部先輩が一緒である。

それはいいとして、自宅へと帰宅した僕を真っ先に迎えたのが、ついさっきアメリカから帰国した父さんであった。

「うおおおおおっ！ な、なんて……なんて可愛らしい姿になってしまったんだあああ！」

父さんは僕の姿を見た途端、耳障りで喧しい大声を張り上げ、ついでに涙を滝のように流しながら抱きついてくる。

「ぎゃああああああっ！ い、痛い、痛いいいい！ ぐえええええっ！」

職業は考古学者であり、科学者でもある父さん。だけど、その外

見は筋骨隆々のヒゲマツチヨの大男である。

そんな父さんは、ちよっと力加減を知らないところがあるので、抱きつかれた僕は全身の骨という骨がバラバラになるかのような激痛に苦しむのだった……あうあう。

そして、案の定、僕の意識は夢の世界へと行ってしまうわけだ。

「ふうふう、久し振りの再会を喜ぶあまり、思わず力が入ってしまったぜ！」

僕が気絶すると同時に、ハッとした感じで父さんは正気を取り戻す……おいおい。

「おー、恵介くんではないか！」

「こ、こんにちはッス、狂蔵おぢさん」

父さんは今頃、とばかりに恵介が僕と一緒にいることに気がつく。で、とりあえず、恵介はあはは、と口許に苦笑を彩らせ鼻の頭をかきながら、挨拶をする。

「およよ、キミは見慣れないな……」

「あ、狂一クンの彼女ですー♪ なーんちゃって」

初対面ってことで諏訪部先輩は、自分は僕……雉飼 狂一の彼女である、と父さんに対し、大きな声で言う。うわあ、そんな嘘つくなよ！

まあ、それは今のところさておき。

「そういえば、狂子から聞いたぞ！ キミらも怪異を見たようだな」

「か、怪異！？ も、もしかしてアレのことですか？」

怪異という言葉聞いて恵介は、昨日の安座主公園での一件を思い出し、一步後退りする。

「怪異？ なあにそれ？ 食べ物ですか？」

なにも知らない諏訪部先輩はきよんとする。まあ、当然と言えば当然だろう……。

「いや、食べ物つつうかなんていうか……。実際、アレを見た者には分からないことッス」

恵介はとりあえず、そう答えるが、アレに関して上手く言葉にで

きないのもまた事実かな？

「ああ、言ってなかったわね。アレは……怪異は、人間や動植物、それにゴミステーションで回収した生ゴミなどベースにあいづらが造り出した人口的な怪物よ」

いつの間にか帰宅し、缶ビールを片手に気絶した僕の鼻をつまんだり、耳を引っ張ったり、ついにで……ま、それはともかく。

暇つぶし感覚で、そんな僕に悪戯をしながら、ニヤリと笑う狂子さんがそう言うのだった。

「あいづら！？　もしか、あの連中がこの町にも舞い戻って来ているというのか、狂子！」

狂子さんが口にするあいづらという言葉に対し、父さんが真っ先に反応する。

「そのあの連中……。8年前に、確かに、この町から追い払ったと思ったのに、またまた懲りずにしゃしゃり出てきた粘着な黄金邪神団の馬鹿どもよ！」

黄金邪神団、と口にする狂子さんの綺麗な顔が、次の瞬間、般若の形相へとシフトしたように思えた。

狂子さんと、黄金邪神団って連中の間になにがあったんだろう……。

謎は深まるばかり……かな？

第3話「蠢く邪神」その6（前書き）

キャラクターが多いとついつい忘れがちのキャラも増えちゃいますね^^;

ついでに色々と修正箇所があったりと大変です><

あ、タイトル名も変更しましたのでよろしくお願いしますね><b

第3話「蠢く邪神」その6

第3話「蠢く邪神」その6

某都道府県S市のベッドタウンである仏滅町で、もともと賑やかな場所、それが須佐野橋商店街アーケードである。

さて、それはあくまで華やかな表通りの話であって、裏通りへと一歩足を踏み入れれば、そこは昏く寂れたまったくの別世界である。とりあえず、ノスタルジックなBARや古本屋などもあるので人通りがない、というわけではない。

でも、日が暮れたら気をつけないといけないかも知れない。日が暮れると同時に性質の悪い連中がうろろし始めるのが、痛いところだろうか？

それはともかく。

「あらあら、物騒ですね。一体、なにがあったんでしょうか……」
一応、メイドの格好をした20歳くらいの若い女性の姿をしているが、その正体は狂子さんが造り出したサイボーグであるアカリの機械仕掛けの双眸に映ったものは、気味の悪い生物の五体バラバラになった惨殺死体であった。

「野暮用の帰りにこんなものを見てしまうなんてイヤですわあ。あらあら、誰かいますわねえ……」

左手を口許に当て、ガクガクブルブルと身を小刻みに震わせながら、自分の周りを警戒をするアカリの機械仕掛けの双眸に、気味悪い生物の五体バラバラとなった惨殺死体を踏みつける魔人のようなモノの姿が映り込む。

「ふう、この町もずいぶんと変わってしまったものだ。まあ、80年も時が経てば、こんなものだろう」

魔人は蒼く澄んだ虚空を見上げながら、溜息をつく。

「ほう、女……。お前は人間ではないな？」

ニヤリと魔人は笑いながら、アカリの方を振り返る。

「そちらも人間ではありませんね。貴女の身体から得体の知れない妖気のようなものがにじみ出していますわよ！」

魔人がどんな行動に出るのか？ それを警戒しつつ、キッとそんな魔人見つめながら、アカリは言い放つ。

「ほう、分かるのかな？ 私が何者か——」

魔人はヒヤリとするような冷たい目つきでアカリを睨みつける。

「その可愛らしい姿とは、裏腹な様子ですね」

気に弱いアカリは今にも泣きそうな気分であったが、勇気を振り絞り、キッと魔人を果敢に睨み返す。

さて、そんな彼女の機械仕掛けの双眸に映り込む魔人は——ストレートな艶のある長い黒髪、あえて言えば刃物のように鋭く、そして冷たいそんな目尻のところに見受けられる縦に連なった泣き黒子が、ある意味で特徴的な長身痩躯の容姿端麗な青と白で基調されたセーラー服の少女という外見とは、まったく違った異質で異様な雰囲気……。人あらざるモノの妖気のようなものを感じさせる。

「ふ、まあ、確かに、我は人間ではない。とりあえず、蓮田 魅夜美という人間の名はあるがな」

魔人は確かに自分は人間ではない、と認める。ついでに、蓮田 魅夜美と名乗る。

「ちなみに、この身体は我にとっては、あくまで精神を共用する仮に肉体である。したがって、共用するもうひとつの精神が——人格が目覚めると同時に、我は一時の眠りにつかねばならん。さて、その時が来たようだ……。うにゅうううう」

フツと口許に不敵でふてぶてしい笑みを浮かべる蓮田 魅夜美は、次の瞬間、スッと両目を閉じると、ガクンツと膝から崩れ落ちるように地面に倒れ込む。

「あらあら、一体、なんなんでしょうね、この娘は……」

ふう、と溜息をつきながらアカリは、気を失って地面に倒れこん

でいる蓮田 魅夜美を抱きかかえる。

「とりあえず、雉飼家へと連れて帰りましょうかね」

僕の自宅は古い。

なにせ60年以上前、戦前から、この地に――仏滅町に建っているのだから。

ちなみに、今は亡き曾祖父の雉飼 狂司郎が世界中を飛び回って集めてきた宗教上の理由から発禁焚書となった禁断の書物等の怪しい書物が保管されている地下書庫があったり、狂子さんがアカリに造らせた地下研究所なんかもあったりする。

それはさておき。

「まったく、うざい、うざい、うざい！」

狂子さんはとにかく不愉快な気分で、とにかく荒れていた。

（放っておこう。今、話しかけたらなにをされるか……）

触らぬ神に祟りなし……ってことで僕は、狂子さんと目を合わせないように心がける。

「ただいま〜です♪」

丁度よく、アカリが帰宅する。当然、あの魔人――蓮田 魅夜美も一緒である。

「今日は奇妙なお人に出会いましたわ。そんなこんなで連れて帰って来ました！」

アカリは気を失っている魔人――蓮田 魅夜美を茶の間へと運び、ソファアの上に寝かせる。

「あらあら、この娘の着てるセーラー服だけど、間違いない……月皇学園の制服だわねえ！」

アカリが連れ帰った蓮田 魅夜美が着ているセーラー服を見て、狂子さんは不愉快そうに眉をひそめる。

「月皇学園！？ ああ、確か、現冥皇学園のことだろ？」

「ま、その通りね。私もそのセーラー服に袖を通したもののさね……」

つと、その娘に見覚えがあるのよねえ」

学生時代の哀愁を感じつつ狂子さんは、茶の間のソファーに横たわる蓮田 魅夜美に見覚えがある、と言う。

その次の瞬間、茶の間のソファーに横たわる蓮田 魅夜美の眼がカッと開く。

「う、うみゆみゆ！ ここはどこですの！」

うみゆみゆ、とヘンな声を張り上げながら、蓮田 魅夜美は必死な形相で飛び起きる。

「久しぶりね、魅夜美。まさか、行方不明……っていうか、最後に逢った？あの時？のままの姿で、こうして私の眼の前に現れるなんて信じられないわ」

ニヤリと笑う狂子さんは、蓮田 魅夜美にそんな意味深な言葉を交えながら声をかける。

「きよ、狂子ちゃん……なの！？」

両目をぱちくりさせながら、半ば呆然とした感じの物腰で蓮田 魅夜美は狂子さんの名前を口にするのだった。

第3話「蠢く邪神」その7（前書き）

最近、修正箇所や加筆が増えてます^^；

第3話「蠢く邪神」その7

第3話「蠢く邪神」その7

月皇学園オカルト同好会——通称、GODを知らない者は、元月皇学園の出身者にはいないだろう。

なにせ、冥陽学園という男子校が理事長とやらの経営破綻となり、それを機に月皇学園と合併、そして誕生したの冥皇学園で、そんな冥皇学園が誕生するまで数十年の間、月皇学園内で存在し続けたようであるから……。

さて、GOD最後のリーダーが、冥皇学園に在学中の男子生徒の間ではアイドル的存在でもある春香先生の話だと僕の叔母、狂子さんであったらしい……。

でも、まあ、なんとなく分かる気がするんだよね……。

狂子さんは科学者としても、その才能を十分すぎるほど発揮する一方で、あの伝説の天宮 弓子の魔道書こと【んこみのろくね】を保有する魔術師であるのだから——

ああ、そういえば、狂子さんらと交流がある探偵の城戸って人が、
「狂子は天宮 弓子の魔道書と呼ぶ【んこみのろくね】こと【白の書】以外にも、宗教上の理由から発禁、焚書になった禁断の書物を他にも保有してるらしい。その中に、あの【キタブ・アル・アジフ】もあるらしい……。あくまで噂だけだな」

こんなことを以前、語ってくれた覚えがある。

うむむ、ホントだしたら僕も飛び上がったって驚くよ！ 彼の有名な魔道書【ネクロノミコン】の原本らしいから——

僕の自宅の一階、茶の間にあるものは、とにかく古くさい。

冷蔵庫は去年やっと新しいもの買い換えたけど、テレビなんて1980年代前半からずっと使い続けている有様。

ついでに、父さんの趣味もあるんだろなあ……。そんな父さんが海外で仕入れてきた洋書がズラリと収納された本棚もあったりする。僕は、英語が超がつくほど苦手で、テストがある度に赤点三昧……。そんなこんなで洋書なんか買ってきてきてもなあ……。

まあ、それはともかく。

「うーん、8年ぶりになるのかな……」

きょとんとしながら、蓮田 魅夜美は首を横に40℃ほど傾ける。「そうなるわね。つか、アンタが何者なのか知りたいわねえ」

狂子さんとは、顔見知りのようである。でも、狂子さんですら、蓮田 魅夜美が何者なのか？ そこらへんがさっぱりな様子。

（なんだろう……。禍々しい妖気のようなものを感じるんだけど……。き、気のせいかな？）

僕には得体の知れない不気味な気配——例えるなら、禍々しい妖気、邪悪な瘴気……。こんな気配を蓮田 魅夜美に身体から滲み出しているように思えた。

これは僕の杞憂なんだろうか……。それならいいけど……。

「うーん、自分でもそこらへんよく分からないですの……」

さて、自分でもよく分からない、と答える魅夜美。

その次の瞬間、彼女の眠気でトロンとした美顔に狂気のようなものが彩り始める。

「表の私に訊くだけ無駄だ。あいつはなににも知らないし、なににも分かっている」

人格が入れ替わった、と言ったほうがいいのか？ 見た感じの魅夜美の様子がガラリと変貌を遂げる。

「出たわね。裏魅夜美！」

裏魅夜美、と口にしながら狂子さんはニヤリと笑う。

「裏魅夜美だと！？ ふ、ふははは……つと、まあいい。それより、お前ならもう気がついていんだろう？ あの連中が目覚めさせようと企んでいるモノの正体がなにかってことを——」

狂子さんが口にした裏魅夜美という言葉に呼応するように、その美顔に狂気のようなものを彩らせる魅夜美は身をよじらせ、お前はもう気がついていいるだろ、と言い笑いながら問う。

「分かっているわ。這い寄る混沌、顔なきもの、暗黒神……なんて呼ばれている、あの邪神の化身の一体ってことくらい。ああ、それか海底に眠る“あの邪神”か——」

その言葉は——僕は恐れを抱く。

「ニャルラトテップ、それにクトゥルフか……」

父さんは、次の瞬間、眉をひそめながら、ニャルラトテップ、そしてクトゥルフと口にする。

第4話「平和を穿つモノ」その1（前書き）

この頃、修正が多いですが宜しくお願いします^^
クトゥルフ神話の化け物をまたいくつか出そうと思います。

第4話「平和を穿つモノ」その1

第4話「平和を穿つモノ」その1

20世紀末、人類は滅亡する――と予言したノストラダムスの大予言が嘘っぱちで終わってから、どれほどの時が経過しただろう？

「予言なんて当たるわけがないのさ！」

「まあ、どうせどこかの誰かが流したデマだよ！」

「夢だよ、夢！ ノストラダムスなんて本当に存在した人物かどうか怪しいぜ！」

誰もが、件の大予言が外れた時には、そう思ったんじゃないかな？
そういえば、僕と同じく某都道府県S市のベッドタウン仏滅町に住んでいる人物で、ついに先日亡くなった冥皇学園の教師兼オカルト作家でもあった服部 光二郎先生とも交流があった魔術師を自称する木下 盛ノ介氏は、

「20世紀末の件のノストラダムスの大予言、あれは人類滅亡のきかけのひとつでしかない。滅びの時は、何十周期、何百周期ごとにやって来るものだ」

なんてアングラなオカルト雑誌で語っているが……。彼のことを知っている者は少ない。

臨時休校の日――服部 光二郎先生が惨殺された事件が起きてから丸3日が過ぎる。

その間、僕は……っていうか、冥皇学園オカルト研究部の面々は、僕の自宅の地下にある今は亡き曾祖父、狂司郎が世界中を飛び回って集めてきた宗教上の理由から発禁、焚書となった禁断の書物等の怪しい書物が保管されている地下書庫に集まっていた。

自宅の地下書庫は、僕の学び舎である冥皇学園の図書館、天道坂図書館以上にオカルト関連な本がそろっている。

じっくり探し回れば読む者の精神と行動に悪影響を及ぼしかねない危険な魔道書の類も出てきそうな気がするくらいに……。

「うふふ、ここはあぶちミスカトニック大学ってところですよ」

事典並みに分厚い洋書を何冊も抱える大きな赤いリボンでツインテール状に束ねられている黒髪、頭脳明晰で知的な人をイメージさせる銀縁の眼鏡、そして着こなしている服の上からでもはっきりと分かるスタイルの良さの3つの要素が上手い具合に映える才色兼備で容姿端麗な外見はともかく、冥皇学園に在籍する者なら誰もが1度は、その奇妙奇天烈な噂を聞くとと思われる人物であり、僕らオカルト研究部の部長でもある須藤 明日香は、そんな言葉を口にする。「あゝ、知ってる、知ってる！ あの有名人【ネクロノミコン】が秘蔵されてるっていう大学のひとつだよね？」

明日香の口から出た、ミスカトニック大学という言葉に真っ先に食らいついたのは、動くものならなんでもお構いなしに飛び掛る子猫のように落ち着きがなく、そわそわした感じがする騒々しい髪の長い小柄な少女――宮森 瑞希だ。ちなみに、今日の瑞希は黄色いカチューシャを身につけており、それが可愛いなあ……と僕は思ってしまった。

「しかし、洋書ばっかだな。英語の成績が全然駄目な俺にとっては、まったくもって無関心な代物だぜ！」

「でも、日本語に写本されたものもけっこうあったりするわあ」

はあ、恵介はともかく、なんにでも興味を抱く諏訪部先輩も地下書庫に来ている。

「げ、ラテン語の本じゃん……。これじゃあたしも読めないなあ……」

…」

「ん、先輩は英文なら翻訳できるの？」

「もちろんじゃん！」

地下書庫にある本はラテン語のものがけっこう多い。

で、ラテン語じゃなければ翻訳可能である、と諏訪部先輩は自身ありげに瑞希に対して語る。

（へえ、体力馬鹿じゃないんだ…）

僕はチラッと横目で諏訪部先輩の方を視線を向ける。

「ん、どうしたのお？」

「うわ、なんですすぐ絡んでくれるんだよう！」

僕の視線に気がついた諏訪部先輩はニヤッと微笑みながら、そんな僕の背後に回り込んで首にところから手を回したかたちで抱きついてくるのだった。

しかし、なんていうか、何故、僕にばかり絡んでくるんだ、この人は！

「なんか羨ましいな」

恵介がボソッと小声でつぶやく。

（羨ましい？ はあ、僕には迷惑で仕方がないんだよなあ…）

恵介のそんな小声に対し、僕は胸中で大きな溜息をつく。

「ねえねえ、さっきまでそこにいたセーラー服の娘…誰なの？」

瑞希がきょとんとした如何にもなにも考えていなそうな顔で、さっきまで一緒にいたセーラー服の少女――蓮田 魅夜美がどこへ行ったのか？ と訊いてくる。

「そういえば、あの娘、どこへ行ったんだろう…？ と、その前に狂子さんとは知り合いのようだけど、僕には何者なのかさっぱりなんだよねえ」

（…：…：というか、人あらざる者って感じの邪悪な気配を感じちゃったな、あの娘…）

瑞希にはそう返答する一方で、胸中では蓮田 魅夜美の異質で邪悪、人あらざる者…：…という感じがする雰囲気と脅威を抱く僕であ

った。

「皆さん、遊んでないでえ面白そうなあ本がないかあ探すのをお手伝ってくださいですのお〜プンプン」

「あ、う、うん……」

明日香のそんな言葉に僕はハッと我に変えたと、彼女の言う面白そうな本を探すべく地下書庫にある本棚と向かい合う。

その前に僕の自宅の一部なんだけどなあ……。

仏滅町の名物公園であり、5世紀頃の豪族でこのへん一体を支配していたとされる九頭氏の墓と伝えられる無明山古墳が園内に見受けられる安座主公園は、無明山古墳の発掘調査にたずさわっていたフリーの考古学者島原教授率いる調査チームの惨殺事件によって、地元警察である仏滅警察署の警察官たちによって封鎖されて立ち入りが禁止の状態となっているのだけど――

「まったく、自分の分身が何体存在するのかすら忘れちゃうなんてホント僕ってばあわてんぼうさんだなあ〜♪」

なんて独り言をペチャクチャとつぶやく真っ赤な蝶ネクタイが特徴的な黒い背広と半ズボン、白と黄のストライプのニーソックスという格好の13、14くらいの小柄で華奢な少年の姿が見受けられた。

こっそり入り込んだのかな？ いや、それは違う！ そんな少年の足許には仰向けに寝転がる仏滅警察署の警察官と思われる人物の姿が数人ほど見受けられる。

両目をカッと見開き、口は苦悶を表すようなへの字に歪んでいる。なにか、そうだなあ……。得体の知れないモノを見てしまい恐怖を通り越し、恐慌に陥ったことを物語っているかのようだ。

現に僕はこの公園で先日、怪異と遭遇したし……。

「あれれ、どうしたんだろう？ この人たち……」

少年はニヤニヤと笑いながら、自分の足許に仰向けに倒れこんで

いる警察官たちを冷ややかの見下ろす。

さて、警察官たちはとりあえず、死んではいないようだけど、まったく動く気配が見られない。

生きたまま石化した、と言ってもいい感じだろうか？

「人間は脆く、そして弱々しい生き物だ。少しは手加減してやったらどうだ？」

そんな声が響きわたると同時に、少年の目の前の空間に亀裂が入り、次の瞬間、バリントと硝子を砕くように砕け散り、そこからはかが勢いよく飛び出してくる。

艶のある長い黒髪、左の目尻のところに縦にふたつ連なった泣き黒子が特徴的でもある刃物のように鋭く冷たい眼。容姿は、小柄で華奢な可愛いらしい白と青で基調されたセーラー服の上から黄色いフード付きのケープを羽織った美少女だが、その身体から邪悪な瘴気のようなものがにじみ出しているように思える異質な少女――あの蓮田 魅夜美だ。

「やあ、キミも来ていたんだね、黄衣の王。うふふ、8年くらい前に出逢った時と同じ姿のようだね♪」

少年はニヤ々と口許に嫌味ったらしい笑みを浮かべる。

「やれやれ、キミか……。我はキミのように様々な姿を使い分けるほど器用ではない。それにこの姿は――いや、この肉体を気に入っている。それはそうと、今回はなんと名乗っているのかな？」

魅夜美は無表情のまま尋ね返す。

「ん？ ああ、そうだねえ……ニヤルでいいよ」

ニヤルと名乗る少年は、相変わらず嫌味で、卑屈で、双眸に映るものすべてを馬鹿にしているような不敵な笑みを浮かべている。

「まあ、お前がなんと名乗ろうが我の知ったことではない」

「うふふ♪ そうかい？」

「それはともかく。お前がこの公園に現れた、ということは――」

「あは♪ バレちゃったか……。そう、あれを食べに来たのさ。あ、でも、すでにこの中だけだね」

「ほう……」

眉をひそめる魅夜美。そんな魅夜美を見つめながら、ペロリと口許を舐めるニヤルという少年は、ポンツと自分の腹を叩いてみせる。
「なるほどねえ……。どうりで無明山古墳とやらの玄室がボロクソに破壊されていたわけだ」

魅夜美はふん、と鼻で笑いながら、ここ安座主公園内にたたずむ無明山古墳がある方向を視線を移す。

「うふふ、この町は面白いね。しばらく、留まることにするよ」

ニヤルはちょこんと首を横に傾げ、背広のポケットから取り出した飴玉を口に中に放り込むと、ニヤニヤ笑いながら、この町——仏滅町にしばらく留まると言い始める。

しかし、一体、彼は何者なんだろう？ 彼からも魅夜美同様、得体の知れない異質で邪悪な瘴気をまとっているように思えるので、人あらざる者なんだろうか……。

ともかく、この町——仏滅町には危険なモノが増えてきたなあ……。

第4話「平和を穿つモノ」その2（前書き）

えっと、自分が考えた魔道書とか、ここで紹介しようかなあと企んでいます^^

第4話「平和を穿つモノ」その2

第4話「平和を穿つモノ」その4

「燃えるぜ、ビィィイトオオオ！ イィィイヤッホオオオオオ！」
自分では最高の髪型だと思っているようだけど、誰が見たって狂介兄さんの髪型は今時流行らない髪型のひとつであるリーゼントである。

とまあ、そんな今時、まず流行っていないことは間違いないリーゼントにセットした髪をゆさゆさと激しく上下に揺らしながら、趣味であるエレキギターの弦を狂ったようにかき鳴らし、頭が痛くなるような爆音を轟かせている。

「うひゃー、お兄さんのエレキギターの騒音が地下にまで響いてくるよお！」

瑞希が両手で左右を耳を押さえながら、ムツと眉をひそめる。

「ま、まあ、これがいつものことだから、もう気にしていても仕方がないんだよね、僕の場合……」

と瑞希に言うとは僕は、首を横に振りながら溜息をつく。

魔術師を自称する奇特な人間の部類に入る部長の須藤 明日香のおかげで、某都道府県S市のベッドタウン仏滅町にある小中高、そして大学とエスカレーター式で進んでいくことが可能な由緒正しき名門校である冥皇学園内じゃオカルト研究部の存在を知らない者はいない。

一応、高等部の生徒がメインなんだけど、部員は僕こと雉飼 狂一、山村 恵介、宮森 瑞希、そして部長の須藤 明日香の高等部の2年G組の級友4人だけである。

とりあえず、オカルト研究部には所属してはいないけど、僕らは1学年上の先輩に当たる諏訪部 真央も僕らの活動を面白がってなにかとつきまとってくるが、それはさておき。

あと、オカルト研究部の顧問が、僕の叔母であり、月皇学園こと現冥皇学園の卒業生でもあり、教員のひとりでもある雉飼 狂子というだけで、恐れをなして忌避する者もけっこういたりする。

なにせ狂子さんは、7年前まで存在した悪魔崇拜組織、異端の結社、魔王の棲家なんて悪名で知られていた月皇学園オカルト同好会——通称、GODのリーダー的存在だったからである……っというか、狂子さんの悪名は卒業から7年経った今でも冥皇学園の生徒たち……主に一昨年の冥陽学園と月皇学園の合併以前からいる月皇学園の生徒を媒介に雷鳴のごとく飛び交っている。

僕の自宅地下にある書庫は、とにかく怪しい本がたくさん保管されている。

曾祖父の狂司郎がどんな人だったか分からない僕にとっては気になって仕方がなかった。

それはさておき。

「あれえ……なんだろうこの鎖と3つの南京錠で封印された奇妙な本は！？ えっと、【時の書】かぁ……。これ魔道書なんですか？」

瑞希は偶然とばかりに、鎖と3つの南京錠で嚴重に封印されている一冊の本——【時の書】を発見する。

「ああ、それね。時間跳躍に関してなんたらかんたらと記された本ね。作者は嶋中 崇文という昭和初期のオカルト主義者よ。どんな人物かはさっぱりだけどね」

チラッと瑞希が見つけた【時の書】を横目に見つめながら狂子さんが、本の内容、そして作者について簡単な説明をする。

「時間跳躍？ タイムスリップできる、とか！？ まあ、冗談だけ

どさ……」

僕はそんな冗談を言ってみる。

「ははは、タイムスリップなんて夢のまた夢だぜ！」

とそんな僕の冗談に対し、恵介が即答する。

「あう、夢がないなあ」

恵介には夢ってものがないのかな……つと、僕は苦笑を浮かべる。

「まあ、夢や希望はともかく。鎖と南京錠で封印されている本以外なら持ち出してもOKよ」

鎖と南京錠で封印されている本以外は持ち出しOK……僕にはその手の本がどんなモノなのか？　それがなんとなく分かる気がした。

「ええとお、鎖とお南京錠でえ封印されてる本はあ、俗に言う魔道書のお一種ですかあ？　そんな本ならあ他にもお見つけましたですのお♪」

【時の書】以外にも、ここ地下書庫には鎖と南京錠で封印されている本が何冊も存在する。で、そんな本——魔道書と呼んでもいいそんな本を2冊抱きかかえながら、ニコニコと微笑む明日香が狂子さんにそう尋ねる。

「【吸血鬼の書】、【アロダルスの日記】……どれも曰くつきの本ねえ」

狂子さんは両目を細めながら、ニヤリと微笑むと、

「ああ、当然、その手の本は持って行っちゃダメよ！　ついでに、アンタ達に警告するわ。魔道書の類は読んだ者の精神と行動に悪影響を及ぼす上に、そんな魔道書に記されている旧支配者なんて呼ばれる連中の眷属なんかに命を狙われる恐れがあるわ。」

警告と口にしながら狂子さんはサッと明日香の手から、【吸血鬼の書】と【アロダルスの日記】を取り上げる。

「旧支配者と呼ばれる存在の眷属……。安座主公園で遭遇したあの怪異みたいな奴らのこと？」

「ん、まあ、そんなところかな」

「げげ、あの化け物か！」

「わはっ！ イヤだよ、もうあんな化け物に遭いたくないよお！」

「うんうん、遭いたくないですのお」

「ねえねえ、なんの話い？」

諏訪部先輩はともかく。

安座主公園で怪異と遭遇、戦闘にまで発展した僕らオカルト研究会の面々は二度と遭遇したくない、という思いに駆られるのだった。（とりあえず、あの連中——安座主公園に怪異を解き放った悪の秘密結社、黄金邪神団の動きが気になるのよねえ。今回は【んこみのろくね】と〈銀天使〉という刃がある。8年前みたいにアイツの手助けは……っ否！ 誰が手助けなんか求めるものか！）

狂子さんは明日香から取り上げた【吸血鬼の書】と【アロダロスの日記】という魔道書に分類される鎖と南京錠で封印された本を交互に見つめながら、胸中でキツと意を決したようにつぶやく。

（アイツらは私の野望を——私の夢の妨げとなる存在だけに、今度こそ徹底的にブチのめさないとねえ……）

今度はそう胸中でつぶやく狂子さん——

さて、そんな狂子さんの綺麗な顔に狂気のようなものが彩っていることを僕は見逃さなかった。

「ん、なに、見つめてるのよ！」

「うひゃあ！ や、やめてよ、うああああっ！」

丁度よく、狂子さんと目が合う。で、その途端、狂子さんはニタ笑いながら近寄ってきて、いきなり僕に対し、ヘッドロックを仕掛けてくるのだった。

ここはジメジメとしたカビ臭くむせ返るような悪臭が漂う下水道に造られた施設——通称、地下ロッジ。

とはいえ、ルネッサンス期の高名な巨匠の作を連想させる絵画や胸像などがズラッと飾ってある豪華絢爛な絨毯が敷いてあったりも

する廊下、そして施設内を流れる流麗なクラシック調のBGM……これは悪臭の漂う下水道に造られた施設とは思えない豪勢な様子がアツと驚かされるかもしれない。

それはさておき。

地下ロッジ内の中央に存在する大広間に、悪趣味なピンクの全身タイツに身を包む怪しい集団の姿が見受けられる。

そんな悪趣味なピンクの全身タイツに身を包む怪しい集団は、どいつもこいつも仮面を被っている。そんなわけで容貌は分からないが、その中には数は極端の少ないが線が細く丸みを帯びた体形から女性らしきモノの姿もある。

「よく集まった、同士よ!」

さて、そんな声に反応する怪しい集団の視線は、一斉にこの大広間の深奥に位置する場所に据えられている玉座に座るひとりの男へと注がれる。

玉座に座る男——長身瘦躯の美丈夫で、医者や科学者といった連中を連想させる白衣を入っている。

この男こそ、この地下ロッジの主であり、秘密結社——黄金邪神団の首領でもあるドクター・ベリアルその人であった。

さて、ドクター・ベリアルの際には、あの白いタキシードに内側が真紅で外側が黒というマントを羽織った顔の鼻から上を銀のマスクで覆った長身瘦躯の男の姿も見受けられる。

「ハイル、ベリアル! ハイル・ベリアル!」

「我が偉大なる首領! 我らが神! 我らが救世主!」

「偉大な指導者にバンザアアアアイ!」

怪しい集団はまるで操られるかのように、そんな言葉を大声でドクター・ベリアルを褒め称える言葉を連呼する。

「んんん、余を賛美する声……あああ、なんてイイ響きなのだ!」
恍惚な表情が男の顔に彩る。んで、そんな男は——ドクター・ベリアルは勢いよく玉座から立ち上がって、フルフルと身を震わせながら、

「ついに我ら、黄金邪神団がこの町を拠点に世界征服を始める日が来たのだ！」

大広間に喧しいくらい響きわたる大声でそう宣言するのだった。

「おおおおおおおおおっ！」

ドクター・ベリアルの世界制服宣言を聞いた怪しい集団は、歓呼の叫び声を上げる。

「ふう、なにが面白いのかねえ……。世界制服なんて馬鹿馬鹿しいねえ……」

ドクター・ベリアルは筆頭とした黄金邪神団の幹部はおろか、誰もが大広間に招かれざる客の姿があることに気がつく様子がない。招かれざる客——ニャルは大広間に無造作に置いてある何段も積んであるダンボール箱の物陰からニタニタと連中の様子を覗いながら、

「面白そうだからしばらく様子を見てようかなあ♪」

上着のポケットから取り出した飴玉を口の中へと放り込むのだった。

「さて、これからどうしようか……。僕的には連中に今すぐにでも破滅をもたらしてやりたいけど、“あれ”がまだ足りないんだよね……」

なにかを策謀するかのようにつぶやきニャルの姿が、次の瞬間、スッと自分の影の中の溶け込むかのように消え失せる。

「あれれ、誰かそのダンボール箱の後ろにいたような……。ううむ、気のせいかなあ？」

怪しい集団のひとりがニャルの気配に気がつくが、その時にはすでに彼の姿が完全に消え失せた後であった。

ドクター・ベリアル率いる黄金邪神団という秘密結社、そしてニャル……彼らは一体、何物なんだろう？

この時、当然、僕には知り得るはずがなかった——

第4話「平和を穿つモノ」その3（前書き）

新人賞に応募しようかなあ〜と悩んでいます＞＜
さて、オリジナル魔道書のついていくつか書いてみます！

【時の書】

昭和初期の神秘学者で時渡り……つまりタイムトラベラーを自称した嶋中 崇文によって記された本。

内容は彼が時間跳躍し、過去の賢人や英雄たちとの対談したという話や、数年先の未来から遙遠い未来のことに關して綴られている。しかし、数年後に日本が敗戦する、と記したため治安維持法に引っかかり、焚書処分となる。現存しているものは6冊ほどらしい。なお、作者である嶋中 崇文は、治安維持法によって監獄送りとなり、そこで「時渡りの敵となる異形の獵犬」という奇妙な血文字で綴られた遺書を残し、獄死したと伝えられる。

【吸血鬼の書】

作者は不明。

15、6世紀頃のドイツで書かれたと言われる魔道書。
生きたまま吸血鬼になる方法や死人を吸血鬼へと変える方法が記されている。

当然、こんな内容の本である故に時の権力者によって発禁焚書となり、現存するものはたった5冊ほどである。

そのうちの1冊が狂一の自宅の地下書庫に保管されている。

【アロダロスの日記】

パピルス紙に記された紀元1世紀頃のギリシアの詩人アロダロスが地中海に面した各地を旅歩き体験した不思議な出来事――主に化け物について記されたものを12世紀頃に彼の子孫に当たるウルダ

リスという人物によって編纂された書物である。

作中にはギルエテプルという異界の化け物を召喚する方法などが記されている。

第4話「平和を穿つモノ」その3

第4話「平和を穿つモノ」その3

読む者の精神と行動に悪影響を及ぼしかねない危険な書物として、時の権力者によって発禁、焚書処分となったこともあり、現存しているものはごくわずか……。

また、風の噂によると、その手の本を保有しているという理由から、得体の知れない存在に命を狙われる恐れだつてあるとか……。禁断の書物、悪しき魂の宿る悪魔の本——魔道書の類には、そんな話がツキモノである。

「それにしても曰くつきの本が多いなあ……。曾爺さんの狂司郎ってどんな人だったんだろ……」

僕の自宅の地下にある書庫——ある意味で異様である。

本棚を調べれば調べるほど、怪しい本が出てくる！

まあ、どれも閲覧ができないよう鎖と南京錠で封印されてはいるけどね……。

さて、僕の曾祖父、雉飼 狂司郎について語ってみようかな……。つと言ったところで、そんな僕が生まれるずっと以前、父さんが10歳に満たない幼い頃、旅行先のアメリカで行方不明になったらしいから、どんな人だったかさっぱりである。とりあえず、父さんや別宅に住んでいる祖父の狂太郎から聞いた話によると、世界中をまたにかけ探検家であったとか。んで、同時に考古学者でもあり、主にエジプトの古代文明についての権威だったらしい。

父さんが考古学者でもある由縁は、曾祖父である狂司郎に影響を受けたのかしれないなあ。

それはともかく。

「ふう、いつ間でもこんな場所にいたら気が狂っちゃいそう……」

「うんうん、確かにな……」

僕と恵介はお互いの顔を見合いながら、ウンウンと何度か頷くと、脱兎のごとく勢いで地下書庫から立ち去るのだった。

「あ、狂一クンと恵介クンが逃げ出したわ!」

「よし、後を追いかけよう!」

諏訪部先輩と瑞希が、そんな僕と恵介の後を追いかける。おいおい、別について来なくても……。

「ああん、置いてけぼりですのお〜ぷんぷん!」

置いてけぼりだあ……と明日香は口を尖らせながら怒るが、その怒り方がどこかキュートで可愛らしい感じがするのだった。

「ありやりゃあ、狂子先生もいないですよ! あうあう、私ひとりぼっちですよ!」

狂子さんの姿もいつの間にか……。恐らく僕らの後を追いかけたんだろうなあ……。

「ふふふ、ひとりぼっちじゃないぜ! 俺と一緒にいてやろう!」

とそこへ狂介兄さんが今時流行らないリーゼントにセットした髪をゆさゆさと激しく揺らし、ついでに両手エレキギターを抱えながらやって来るのだが、

「ええとお、お兄さんはあ私のお趣味のお範囲じゃないですよ!」

首を40度ほど横に傾げ、人差し指をピンツと追っ立てながら、どこことなく眠そうな笑みを浮かべる明日香は、そんな風に即答する。

「な、なんだってー!」

狂介兄さんは口をぽかーんと開けたまま硬直する。

「ん、じゃあ、私もお失礼しますねえ……っと、何冊か本をお借りしますう♪」

そんな硬直する狂介兄さんにニコニコと微笑みかける明日香も地下書庫から立ち去るのだった。

「俺って一体……」

虚しさ、という真っ白なペンキが狂介兄さんの心の中を染めてい

く。で、ガクツと勢いよく狂介兄さんはその場に沈み込むが……。

「くうううッ！　こーゆー時こそ、エレキギターだぜええ！」

虚しい気持ちを無理矢理にでも吹っ飛ばすかのように狂介兄さんは、両手に抱えているエレキギターの弦を気が狂ったようにかき鳴らすのだった。

「臨時休校つつうのは嬉しい一方で暇なんだよなあ……。はあ、こんなことなら体育会系の部活に入ればよかったぜ！」

牛乳50%ミルクコーヒーという赤い文字とニコニコ微笑んだ牛のプリントが目を引きそんな缶コーヒーを口にくわえながら、恵介は溜息をつく。

「右に同じく……。僕も体育会系の部活の方がよかったよ」

恵介の意見に僕は同意だ。

今思えば、小中の頃、僕はサッカー部に在籍しており、レギュラーには残念ながら入れなかったものの毎日汗だくになってグラウンドを駆け回っていたなあ……。あの頃が懐かしいよ、まったく！

さて、僕と恵介は須佐野橋商店街アーケードにあるゲームセンターの中にいた。最近、出来たばかりで地下1階、地上3階建て大型ゲームセンターである。ついでに、たまに人気タレントや歌手のイベント会場となったりと、今話題の場所でもある。

「うふふ、じゃあ、今から陸上部に来るう？」

といきなりそんな声がどこからか聞こえてくると同時に、何者かが背後から僕に抱きついてくる。

「す、諏訪部先輩!？」

案の定っていうか、予想通りの展開とばかりに現れたのは諏訪部先輩であった。はあ、またこの人かあ……。

「わー、こんなところにいたんだ！　あ、どうでもいいけど、キラークタンの人形をゲットしたよう♪」

両手の血のついた包丁を持った凶悪な面構えの猫……っと、それ

がキラ猫クンというキャラクターである。まあ、そんな悪趣味なキャラクターのぬいぐるみをクレイニングゲームでゲットしたらしい瑞希の姿もあった。

「あ、悪趣味な人形だなあ……」

「悪趣味じゃないわ！ あの名超有名デザイナーの名腰 洋平ことナコヨーのデザインしたキラ猫クンは！」

「そ、そうなんだ……」

「うんうん、みんなが欲しがってる一品よ！ あたしなんかキラ猫クンのクツズが100個以上持つてるよう！」

瑞希は両目をキラキラと輝かせながら、キラ猫クンというキャラに対するこだわりを忙しなく、そして熱く語る。

「ま、まあ、こだわりの一品があるってことがいいことだね、きっと、うんうん」

僕にとつては悪趣味な人形にしか見えないんだけどなあ……。

まあ、とりあえず、そう答えたものの、どこかいい加減な言葉になってしまう。

「うみゆ、狂一クンはキラ猫クンに関してなにも知らない模様ねえ……。よおし、今から熱く語ってあげる！」

「い、いや、べつにいいよ！」

と僕は即答するが、半ば強引な瑞希は勝手に語り始めるのだった。はあ、なんなんだよ……。

「あれ、狂子先生は一緒じゃないんだ」

キラ猫クンとやらに人一倍のこだわりの持ち手であり、そのことに関して熱く語る瑞希はともかく。

狂子さんは一緒じゃないの？ と諏訪部先輩はきょとんとしてながら訊いてくる。

「え、狂子さん？ み、見かけてないけど……」

冗談ではないって感じ！ 仮にも狂子さんが、このゲームセンターへ一緒へ来ていたらと思うと……。

「うん、一緒じゃなくてホントによかった気がするよ」

狂子さんのことを思い浮かべるだけで、僕の脳裏に悪い予想がもやもやと浮かび上がってくる。

さて、噂の狂子さんだけど、須佐野橋商店街の路地裏にいた。それは何故かっというところ――

「アンタ……。魔道書ハンターね？」

「その通りつつうか、やっと探し当てた【んこみのろくね】……いいや、【白の書】を渡してもらおうか！」

あのマルコ神父が、狂子さんの目の前に立ちはだかっている。

魔道書ハンター――それがマルコ神父の正体なんだろうか？

それはともかく。

「まったく、ストーカーのように私の後ろをつけ回しやがって……」

狂子さんは眉をひそめる。だけど、次の瞬間にはニヤニヤと微笑みながら、着こなしているニットのセーターと黒いスリットの入ったタイトスカートという衣装の上から羽織っている白衣のポケットから自分の親指と同じくらいの大きさの真っ赤な光を帯びたカプセルを取り出す。

「うふふ、これは【んこみのろくね】の魔術障壁によって完全防御を施している私以外のモノを――周囲1キロに存在するモノというモノを焼き尽くす代物……クトウグア弾。さて、これを使っちゃおうかなあゝ♪」

狂子さんの顔に狂気のようなものが彩る。

「む、クトウグア弾だど！？　ちっ……今回は見逃してやる。だが、覚えていろよ。俺は必ず、貴様が持っている【白の書】を回収してみせる！」

クトウグア弾と言葉を聞いた途端、マルコ神父は狂子さんの目の前から踵を返す。で、そんな言葉を吐き捨てながら立ち去るのだった。

「ふう、うるさいのがやっと消えたわね。しかし、よく騙せたもんねえ」

マルコ神父が目の前から立ち去った直後、狂子さんはニタニタと

笑いながら、白衣のポケットから取り出した自分の親指と同じくらいの大きさの真っ赤な光を帯びたカプセルを足許に落下させるが――パリーンッという硝子を碎ける音をとまって碎け散る。

ええと、要するに周囲1キロに存在するモノというモノを焼き尽くす代物であるクトウグア弾というモノの実体は、狂子さんの口から出たデタラメであつたわけだ。

それにしても怖い嘘を……。狂子さんなら本物を作り出すことも十分可能ってわけで、地面に落つこととしたカプセルが本物なのか偽物なのか、僕にはその区別ができないかもしれない。

「さて、これからどうしようかな……」

狂子さんは今にも雨が降ってきそうな鈍よりとした黒雲の立ち込めている虚空をニヤニヤしながら見上げる。

まるでなにかをたくらんでいるかのように――

第4話「平和を穿つモノ」その4（前書き）

新人賞に応募しようなあと企んでいます！

前に2度落選してるだけにちよい自信がないかも（あ

さて、クトゥルフ神話でお馴染みの魔道書ネクロノミコンの日本語写本版があったら？

そんなコンセプトで作中にちよくちよくと名前が出る【んこみのろくね】について少し語ろうかと思えます。

【んこみのろくね】

通称、天宮 弓子の魔道書として某都道府県S市では都市伝説と化している代物である。

当然、ベッドタウンである仏滅町でも有名な都市伝説である。

さて、天宮 弓子の魔道書こと【んこみのろくね】は、1920年代にこれまたクトゥルフ神話でお馴染みのミスカトニック大学に留学していた天宮 弓子という人物が、ミスカトニック大学に保管されている17世紀のラテン語版の魔道書ネクロノミコンを日本語に写本&独自のアレンジを加えたもので、彼女が帰国の際、秘密裏に持ち帰ったという設定の他、現在の所有者である雉飼 狂子は【んこみのろくね】を【白の書】と呼んでいる。

その他に【黒の書】と【赤の書】が存在し、【んこみのろくね】は三位一体の書物という設定です。

第4話「平和を穿つモノ」その4

第4話「平和を穿つモノ」その4

読んだ者の精神と行動に悪影響を及ぼしかねない危険な本や宗教上の理由から発禁、焚書処分となった禁断の書物——いわゆる魔道書と呼ばれるような代物の回収、あるいは跡形もなく焼き捨てることを目的とした連中が古の昔から存在したらしい。

そんな連中を魔道書ハンターと呼ぶらしい。

連中の起源はカトリック教会が絶大な権力を誇示していた十字軍遠征などで沸き立った中世ヨーロッパにさかのぼるとか、魔道書に記された禁断の秘術でアメリカなどの連合国に一泡吹かせようなんて企んだヒトラー率いるナチスが起源だとか……。

怪しい物事に関して人一倍物知りな狂子さんがいつだったか僕に語ってくれたことだけに、これらの話は信憑性は高い……のかな？

「くそ、あの女ッ！　なんてモノを持ち歩いているんだッ！」

ガーツと勢いよく目の前のテーブルの上においてある硝子のコップに入ったアイスコーヒーを喉の奥へと流し込む筋骨隆々の神父の格好をした大男——マルコ神父は、眉間に皺を寄せ、ついでに額に青筋を浮き出させながら、忌々しげにつぶやく。

さて、彼がいる場所、そこはこの仏滅町でもっとも賑やかな場所須佐野橋商店街アーケードのほぼ中心にある喫茶店の店内である。

ちなみに、彼が今居る喫茶店の名前は〈吉祥天〉、ついでにメイド喫茶と呼ばれる部類に入る喫茶店だけに当然、メイド喫茶ということもあってウェイトレスはみんなメイドの格好をしている。

あと、制服の可愛らしさが人気を呼んでいるとかどうとか……。

地元メディアもそう報じているから間違いないだろな、きっと。

それはともかく。

マルコ神父と向かい合った形でひとりの若い女の姿がある。年齢は18かそこらだろうか？ 容姿は長く艶やかな黄金色の髪を頭の大きな黄色いリボンで三つ編みに束ねている青空のように蒼い瞳と象牙の陽に白い肌が美しい白人の少女である。目付きは優しそうに見えるが、その一方で獰猛な雌獅子を連想させる戦慄と近寄り難いオーラのようなものを放っているように思えた。

「マスター……私ならあの女から魔道書を奪い取る自信があります！」

「ほう、強気だな、ミスティア」

少女は自信ありげに狂子さんから魔道書——【んこみのろくね】を奪い取る自信があると言うと、彼女もまた勢いよく目の前のテーブルに置いてあるコップの中に貼ったオレンジジュースを喉の奥に流し込む。

「そりゃ、そうです！ あの女——雉飼 狂子は危険すぎます！」

ガタンツと勢いよく立ち上がる少女は——ミスティアは、テーブルに両手を叩きつけながら言い放つ。

「お、おい……。お前、目立ってるぞ！」

「えッ！？ あ、あははは……」

向かい合うマルコ神父を含むメイド喫茶〈吉祥天〉の店内にいる客達の視線が一斉にミスティアへと集う。

で、カーツと顔を紅潮させるミスティアは、

「さ、さて！ わ、私はあ……あの女を見つけ出して、あれを奪い取ってきます！」

ドタバタと忙しくメイド喫茶〈吉祥天〉の店内から外へ飛び出して行く……つと、入り口のところでスッ転ぶ。あらら……。

「ふう、なにはともあれ、ちつとだけ、お前さんに期待するとしよう、戦乙女——」

マルコ神父は溜め息を交えながら、自分の許から立ち去るミスティア

イアを見送る。

「ここ数日、物騒な事件ばかりねえ……。ホント嫌になっちゃうわ！」

「まあ、一連の事件はきっとアイツらの仕業だろうけど……」

「アイツら？」

「ほら、8年前を思い出さない？」

「8年前!? あ、もしかして……」

「そ、あの忌々しい連中——黄金邪神団よ!」

狂子さんは須佐野橋商店街に隣接した駐車場に置いてある愛車である派手な真紅のスポーツカー——通称、ミラージュの運転席で物思いにふけっている。ちなみに、助手席には狂子さんとは学生時代から数少ない友人であり、学生時代からのつき合いがある悪友の三村 春香先生の姿がある。

「そういえば、あの魅夜美に逢ったわ。8年前とまったく同じ姿だったわ」

「へえ、アンタもあのバケモノに逢ったんだねえ……」

春香先生はあの蓮田 魅夜美と出逢った、と眉をひそめる。それを聞いて狂子さんは嫌味ったらしくニヤニヤ微笑む。

「ああ、バケモノっていうと、あの連中——黄金邪神団の連中が、あの無明山古墳に封じられているアイツの化身を復活させいと企んでるようね。ま、とりあえず、魅夜美から情報かな……。ま、あの連中の企みなんざあ私の手の内だけだね」

と自信ありげに狂子さんが言った直後だった。

「うふふ♪ 流石だねえの一言だよ」

如何にも人を馬鹿にしているような不愉快な笑い声とともに、そんな言葉が暖かな風に乗って狂子さんと春香先生の耳に入り込んて来る。

「ア、アンタは!？」

「まさか……」

運転席の狂子さんと助手席の春香先生はほぼ同時に、ミラージュの後部座席に、キッと睨みつけるような視線を向ける。

「やあー♪ 8年ぶりだね、女クロウリー」

そこには不敵な笑みを浮かべる真つ赤な蝶ネクタイが特徴的な黒い背広と半ズボン、白と黄のストライプのニーソックスという格好の13、14くらいの小柄で華奢な少年——ニヤルの姿があった。

「ふう、化身が近くにいてってことは本体も……ってわけね。つか、8年前とはまったく違った姿ねえ、ニヤラトテップ……いや、ナイアルラトホテップかな？ それともニヤラトホテップ——」

そう言うのと、狂子さんは眉をひそめる。

「あはははー♪ 僕には色んな名前があるねえ。自分でもその全部を覚えきれないや」

ニヤルは——ニヤラトテップは、上着のポケットから飴玉を取り出し、それを口の中に放り込みながら、ニタニタと微笑む。

しかしなんっていうか、名前が多いってことは大変だなあ……。

流石は千の顔を持つ、なんて言われる存在だけあるなあの一言、かな？

「その嫌味な態度は相変わらずだねえ……つと、なんの用事？ ふざけた内容だったら、アンタを敵対視している旧支配者のクトゥグアを呼び出して丸焦げにするわよ」

さて、狂子さんはそんな脅し文句をニヤルに対して言い放つ。

「おお、怖い、怖い♪ ま、今回はっていうか、僕はキミらと敵対する気はないよ。寧ろ協力してほしいくらいさ」

怖い、怖い、と狂子さんの発言等を怖がる素振りを見せるニヤル。だけど、如何にもわざとらしい……。

「え、協力してほしいことがある！？」

きよんとする春香先生が、協力して欲しい、とニヤけながら言うニヤルに、その理由を尋ねる。

「協力してくれるかはキミたちの自由でいいよ。とりあえず、この

町のどこかに封印されている僕の化身のその2が探しだして欲しいんだ。どうも僕の行く手を阻む結界のようなモノが張り巡らされているんだなあ、この町は——なんか忌々しいね。そして、齒痒いねえ」

ニヤルはニコニコと笑いながら、自分の化身その2がどこに封印されているのか？ それを探して欲しい、と言う。とそんなニヤルの目は笑ってはいない。

「け、化身その2!？」

「まあ、アンタは千の顔を持つ邪神だしね。化身が何体も存在するって言われても別段、不思議じゃないわ……っと、化身その2を見つけ出してなにをする気？ 8年前みたいなことをやろうなんて企んでいないでしょうね？」

「うふふ♪ さあねえ、それはどうだろう」

化身その2と聞いて驚く春香先生。一方で狂子さんは、件の化身その2を見つけ出して、なにをするつもりだ、と言いいながらニヤルをキッと睨みつける。

さて、ニヤルこと這い寄る混沌などとも呼ばれるトリックスターのような邪神ニヤラトテップは、千の顔を持つ邪神である。そんなこんなで彼の化身は物凄く多いんだろうな……。それはともかく。

「それより、アンタ……。面倒くさいの奴にストーキングされていたみたいね」

「ん？ ああ、彼女ね」

狂子さんはチツと舌打ちをしながら、ミラージュのドアミラーに映る中世ヨーロッパの騎士を連想させる鎧兜というコスプレ衣装……っと、思われるようなモノをその華奢な身にまとう奇妙な少女に睨みを利かせる。

「あはは♪ あの娘は戦乙女かな……っと、僕はあんな面倒くさい奴の相手をするほど暇じゃないんだ。あとは頼むよ」

「あ、コラッ！」

ニヤルの姿が漆黒の霧状のモノへと変わる。それ同時に、フツとミラージュの後部座席から、まるで周囲の空間と一体化するかのようにあつと言う間に消え失せる。

「まったく、面倒事を押付けて逃げるなんて最悪だわ！」

「それより、どうするの？ あの花娘……魔道書ハンターよ、きつと」
「分かっているわ。まったく、この本は私の所有物だつうのに……忌々しい！」

狂子さんは如何にも面倒くさそうに、そりやもう深い溜息をつく
と、手許にある古びた本——【んこみのろくね】こと【白の書】に
視線を向けるのだった。

（はあ、面倒くさい……。ここは狂一クンを強制転送させちゃおう
かな）

ニヤリと狂子さんの口許の見る者を不快な気分させる。そんな
笑みが浮かぶ。

——と、その前に、僕を強制転送ってどういうことだよ！

第4話「平和を穿つモノ」その5（前書き）

バイトを掛け持ちすることになりました＞＜
そんなわけで更新が遅れがちになりますTT

第4話「平和を穿つモノ」その5

第4話「平和を穿つモノ」その5

魔道書と呼ばれる禁断の書物には、なにかしらの魂が宿ると聞いたことがある。

その手の本を何冊も読破しているせいか、精神と行動に悪影響が出まくっている狂子さんの話だと、大体的場合が邪悪な魂が宿っているらしい。

——が、時折、聖なる清き魂が宿っているケースもあるとかないたか……。

それはともかく。

仏滅町でもっとも賑わう場所、須佐野橋商店街アーケードのすぐ近くにある駐車場、そこに駐車してある真紅の愛車——通称・ミラージュの運転席から、はあ……っと、面倒くさそうに溜息をつきながら狂子さんは降り、目の前に立ちふさがるように現れた中世ヨーロッパの騎士のコスプレにでも興じているのか？ そのへんがよく分からない鎧兜を身にまとったコスプレ少女にキッと睨みを利かせる。

「まったく、誰の差し金かは知りたくもないけど、そんなにこれが欲しいわけ？」

狂子さんはニットのセーターとスリットに入った黒いタイトスカートの上から羽織っている白衣をバツとひるがえしながら、天宮弓子の魔道書こと【んこみのろくね】——【白の書】を挑発的な物腰でチラつかせる。

「私の名前のミスティア。魔道書ハンターだ！ さて、貴女がなにを言おうが、どんなに抗おうが問答無用で、その本を回収させてもらう！」

うゝん、見ようによつては燐とした女騎士……って感じがするコスプレ少女はミスティアと名乗り、自分は魔道書ハンターであるとも名乗る。

んで、狂子さんが所有する【白の書】を問答無用で回収する、と腰からぶら下げている一本の長剣を鞘から勢いよく抜刀し、その切っ先を狂子さんに突きつけながら宣言する。

「やれやれ、こんな場所で物騒なモノを……」

狂子さんはやれやれ、といった感じで首を横に振りながら溜息をつく。

「とりあえず、その物騒なモノをなんとかしてほしいものね」

「うるさい！ 問答無用と言ったはずだ！」

ミスティアの声には明瞭な殺気が孕んでいる。絶対に、【白の書】を——例え、相手を死なせて奪い取る、なんて危ない考えすら抱いていそうな感じである。

「あらあら……。んじゃ、問答無用ってことで、ここはひとつ懲らしめてやろうかしら。この私——雉飼 狂子に抗う者がどうなるかってことを教えてあげるわ！」

「なにッ！？ キヤアアアアアッ！」

卑怯者っていうのは狂子さんのような人間を表現する言葉なんだろうか？ ——とまあ、そんな狂子さんは先手必勝……っていうか、手が早いっていうか——

まあ、とにかく、狂子さんは上着の上から羽織っている白衣のポケットから飴玉ほどの大きさの小さな丸い物体に取り出し、それをひょいっとミスティアに投げつけると、その刹那、小さな丸い物体じゃ純白の閃光を伴いながらミスティアの眼前で爆発する。

「うるさい娘はそこでしばらくオネンネしてるっていわ」

純白の煙が周囲に立ち込める。さて、それが拡散、そして晴れると、見事なまでの水晶の柱がフツとその姿を現す。それを見ていると、まるで柩を連想してしまう。んで、水晶は透明ということもあってか、柱の中に押し込まれた者——ミスティアの姿が丸見えであ

る。

「あらら、狂子ったら酷いことするのねえ……」

ミラージュの助手席側の窓を開け、事の成り行きを傍観している春香先生が、水晶の柱の中に閉じ込められてしまったミスティアを哀れむような言葉をつぶやく。

「さて、邪魔者をこのまま放置でOK！」

ニヤリと嘲笑を浮かべる狂子さんが、プイッと踵を返した次の瞬間である。ミスティアが封じ込められている水晶の柱が激しく揺れ始める。そしてバキバキというけたたましい音が響きわたると同時に、そんな水晶の柱のところどころにヒビが生じ始める。

「へえ……」

狂子さんは今には碎け散りそうな水晶の柱を冷ややかに見つめる。

パキイイイイインッ！

水晶の柱がバラバラに碎け散る。その細かな破片が暖かな春風に乗って舞い散る様は、まるで季節はずれのダイヤモンドダストを連想してしまう幻想的で美しい。

「はあはあ……こ、こんなことで私は……」

自力で水晶の柱から内側から碎き、外へと開放されたミスティアはヨロヨロとよろけながらも、凜とした態度でキッと狂子さんに睨みを利かせる。

「うふふ、凄いわネェ♪ ――っと、アンタ人間じゃないわね。あれは人間の力じゃどう足掻こうが絶対に破壊不可能な代物……。それをぶっ壊すアンタの正体が非常に興味深いわ」

ペロリと狂子さんは口許を舐める。その次の瞬間、狂気が入り混じった声色で、

「うふふふ……。解剖してあげるわ」

そんな言葉を口にする、容姿端麗な容貌にも狂気が彩る。

「ええいっ！ 黙れ、貴様ああ！ うぐ……」

ミスティアは満身創痍である。件の水晶の柱を打ち壊すだけで、その力のほとんどを失ったのかな……。

「やれやれ、これじゃ弱い者イジメだわ。簡単に解剖できちゃいそうだし〜♪」

狂子さんはニヤニヤと微笑む。さて、その微笑みは明らかに嘲笑であり、ミスティアに対する挑発でもある。

「貴様ああああ！」

単純だな……っと、ばかりにミスティアは狂子さんの挑発に乗って激昂し、両手にかまえる長剣を大きく頭上に振り上げながら、狂子さんに対して襲い掛かる。

「馬鹿ねえ……。とりあえず、これでアンタの正体が判明するわねえ、クククク」

狂子さんは喉の奥でククククと笑った直後、ミスティアの足許に真っ赤な禍々しい光芒を放つ魔法陣が出現する。

「な、なにッ！？ こ、これはああああ！ マ、マスター！ マスタァァッ！」

その刹那、ミスティアの身体から足許の真っ赤な禍々しい光芒を放つ魔法陣と同じ真っ赤な光を放ち始めると、徐々に徐々に彼女の身体が縮小を始め、あっという間にミスティアは一冊の古ぼけた本の姿へと変貌を遂げる。

「へえ、やっぱり人間じゃなかったんだ」

一冊の古ぼけた本の姿へと変貌を遂げたミスティアを狂子さんは冷ややかに見下ろすと、ニヤニヤ笑いながら拾い上げる。

「タイトル名【戦乙女の足跡】……。作者名は、なにもかに故意に消された形跡があるわね、この本……。っと、まあ、レアモノっぽい代物をGETできたからいいかな。さて、面白い曰くがないかしら、この魔道書！」

触らぬ神に祟りなし……。っていう言葉を知らない怖いもの知らずな狂子さんは、拾い上げた魔道書【戦乙女の足跡】は純銀製と思われる豪華な表紙をニヤニヤしながらめくる。

「へえ、第1次十字軍遠征時に活躍した男性顔負けに活躍した死後、戦乙女と褒め称えられた女性の記録ねえ……。だけど、大の男が女性に武勲を横取りされちゃ人生最大の恥だなんて考えるような連中によって、この本に記された女性の記憶は闇の中……。男女差別の激しい時代ってのは不愉快なものだわ」

現代ならともかく中世では男女差別が激しかったんだろうな……。

狂子さんは、魔道書【戦乙女の足跡】に記されている第1次十字軍遠征時に男性顔負けに活躍しながらも、その記憶を——女性に武勲を横取りされたことを妬んだ連中によって、存在そのものを歴史の闇の中へと葬りさられたひとりの女性に対し、なにかしらの共感を覚える。

さて、一見すると魔道書じゃないぞ、これって思うかもしれないが、作中にはニヤルことニヤルラトテップの化身を筆頭とした邪悪な存在に十字軍の進行が妨害に遭ったなどと明記されている。

この本——【戦乙女の足跡】が魔道書の類となったのは、それが原因かもしれない。

さて。

「この間の怪異に引き続き、魔道書の化身が登場とはねえ。やれやれ、こんな連中とはホント縁があるね、昔から……」

怪異のような生物と縁がある、と苦笑を浮かべる春香先生は、深い溜息をつきながらミラージュの助手席から降り、狂子さんの許へと歩み寄る。

「く、遅かったかッ！ ミステリア……」

はあはあ、と息を切らせながら、殺意すら感じさせる険しい表情のマルコ神父が狂子さんと春香先生の目の前に立ちふさがる。

「ミステリア？ ああ、この本の名前かしら？」

狂子さんはニヤニヤしながら、如何にも嫌味で不愉快な物腰でマルコ神父に対し、微笑みかける。

「その本は——俺の大事なパートナーだ！ 是が非でも返してもらう！」

マルコ神父はファイティングポーズを取りながら、キツと狂子さんを睨む。

「へえ、魔道書ハンターのクセに、この本——【戦乙女の足跡】がパートナーなんて矛盾してるわねえ」

クククク、と狂子さんは喉の奥で嫌味ったらしく笑う。

「毒には毒を持って制するって感じじゃないの？」

「ああ、そういうことね。でも、馬鹿馬鹿しくて楽しいわ♪」

毒には毒を持って制する。時のは、こんな考えも必要なんだろうか？

ま、それはともかくとして、春香先生がそんな話をするに狂子さんは、さらに嫌味ったらしい態度でマルコ神父を挑発する。

「くう、貴様あ！」

マルコ神父の表情に怒りが彩る。今にも爆発しそうなくらいに……つと、これも狂子さんの罠に違いない、と僕は見た！

「魔道書は——持つ者によって聖なるモノ、邪悪なるモノ、どちらにも傾くもの。うふふ、この私の手に渡ったこの本はどうなることやら」

ニヤニヤしながら狂子さんは、【戦乙女の足跡】に記されている呪文のような言葉を読み始める。

「願わくば聖なる魂が宿らんことを我は祈る、か……。皮肉にしか聞こえない言葉だこと」

そんな言葉が秘められた神秘の力の発現の条件だったのかな？

次の瞬間、魔道書【戦乙女の足跡】は神々しい、と思える青白い光を帯びた一本の槍へと瞬時に変化する。

「うふふ♪ イエス・キリストの脇腹を突いたロンギヌスの槍、北欧神話の主神オーディンが持つグングニルの槍……いわゆる神槍って代物かしらねえ」

思わずゾツとするような冷気の奔流が、狂子さんがたずさえる魔道書【戦乙女の足跡】が変化した槍から放出されて錯覚すら覚える。「さて、この槍がどんなモノか実験してみようかしらねえ、うふふ



マルコ神父は思わず後退りするような激しい殺気と狂気の奔流を狂子さんから感じ取る。

「く、悪魔めッ！ ミ、ミスティアをそんなことに——」

——と、言い終わる前に、マルコ神父に狙いを定める狂子さんは、魔道書【戦乙女の足跡】が姿を変えた槍が投げ放つ！

第4話「平和を穿つモノ」その6（前書き）

新たなオリジナル魔道書を考え中です

第4話「平和を穿つモノ」その6

第4話「平和を穿つモノ」その6

なんていうか狂子さんの手にトンでもないモノが手渡ってしまったな、と僕は思った。

狂子さんはサイボーグを造ることができるほどの天才であるが、そりゃもう危険な代物も発明する奇人変人である。

同時に、怪しい知識——オカルトな物事にも精通している。

魔道書【戦乙女の足跡】は、そんな狂子さんの興味を引く代物である。

だけど、悪いことに使いそうで僕は怖いなあ……。

それはともかく。

「う、うわああああああああっ！」

狂子さんが投げ放った魔道書【戦乙女の足跡】が姿を変えた槍のなにかもを貫いてしまいそうな切っ先が、マルコ神父に直撃——いや、そんなマルコ神父の身体に接触した途端、バツと赤い光の粒子となって拡散、消滅する。

その刹那——

「ギョアギガゴアアアアアアアアアアアアアアアアッ！」

不気味な声色の特徴の絶叫が響きわたる。

「か、怪異！？ い、いつの間に……」

マルコ神父は勢いよく背後を振り返ると、そこには気味の悪い緑色の肌、蝙蝠のような羽、イヌ科の動物を連想させる頭……要するに怪異の姿がある。で、そんな怪異の気味の悪い身体をマルコ神父に直撃すると同時に赤い光の粒子となって拡散、消滅したはずの魔道書【戦乙女の足跡】が変化したあの槍が貫いている。

「む、むう！？ どこへ行った！」

さて、マルコ神父はキツと険しい顔で狂子さん&春香先生がいる方向へと向き直ると、そこにはすでに誰もいないシーンと静まり返った駐車場の光景だけが映り込む。

春香先生はともかく。狂子さんに逃げ足の速さは尋常ではない。ちよつと目を離れた隙に、その姿を消している……なんて当たり前だ。

前に狂子さんの逃げ足の速さのせいで僕は酷い目あったことがある。だけど、その一方で助かったことも……。

さて、狂子さんの愛車ミラージュもいつの間にか駐車場から、その真紅の機体を消しているのだった。

「くそ、あの女ああ！ 次こそはあああ！」

ドガツと勢いよく地面を踏みつけながら、怒りの絶叫を張り上げるマルコ神父は、

「ミステリア、絶対に助けてやるぞ！」

胸のところで左手をギリリと血がにじむほど強く握りしめるながら、そんな誓いを立てる。

なんていうか、マルコ神父よりも僕的には狂子さんの手に渡った魔道書【戦乙女の足跡】が、この先、どうなるかが心配である。

「ふんぐるい むぐるうなふ くとうるふ るるいえ うがⅡなぐる
ふたぐん！」

「ふんぐるい むぐるうなふ くとうるふ るるいえ うがⅡなぐる
ふたぐん！」

「ふんぐるい むぐるうなふ くとうるふ るるいえ うがⅡなぐる
ふたぐん！」

「ふんぐるい むぐるうなふ くとうるふ るるいえ うがⅡなぐる
ふたぐん！」

不気味な祝詞が気味の悪い声色とともに響きわたる。

そこは昏くジメジメと湿った地下に存在するアジト——通称・地下ロッジ

そして、悪意に満ちた怪しい気配で満ち溢れた禍々しい空間。
黄金邪神団と名乗る不気味な集団の吹き溜まりである。

ピンクの悪趣味な全身タイツに身を包む仮面を被った奇妙な数人の男たちは、ぴくりともせず押し黙り、全身麻痺、金縛りにでもあったかのように身動きひとつ見せず円陣を組んでいる。

その中心には魔術師を連想させる漆黒の衣装に身を包む4人の男の姿が見受けられる。

「ふんぐるい むぐるうなふ くとうるふ るるいえ うがⅡなぐる ふたぐん！」

「ふんぐるい むぐるうなふ くとうるふ るるいえ うがⅡなぐる ふたぐん！」

「ふんぐるい むぐるうなふ くとうるふ るるいえ うがⅡなぐる ふたぐん！」

「ふんぐるい むぐるうなふ くとうるふ るるいえ うがⅡなぐる ふたぐん！」

魔術師を連想させる漆黒の衣装に身を包む4人の男は声をそろえながら、再び不気味な祝詞を不気味な声色で唱え始める。

さて、そんな薄気味の悪い謎の儀式に勤しむ連中——黄金邪神団が集う一室はそれなりに広い。

それ故に、なんだろうか？ 胴体が人間で頭がイカのようなタコのような……とにかくそれらの人間と軟体生物を合体させたような姿をした不気味で禍々しい石造りの巨像が部屋の深奥に鎮座している。

「うむ、クトゥルフ復活には、やはり“這い寄る混沌”の化身を生贄に使うのが一番なんだろうか……」

不気味で禍々しい神像の足許にひとりの男の姿がある。

仏滅町の陰に巢食う悪の秘密結社である黄金邪神団の首領ドクター・ベリアルだ。

「さてさて、その這い寄る混沌の本体が、このアジト内に目撃されたい、と監視員からの報告を受けましたが、貴方ならどうするおつもりですか？」

「な、なんだとっ！ シュトレーゼ、それは本当かつ！」

「ええ、そのようすなあ」

スウツと不気味で禍々しい神像の影からひとりの男がその姿を現す。

あの白いタキシードに内側が真紅で外側が黒というマントを羽織った顔の鼻から上を銀のマスクで覆った長身痩躯の男である。

さて、ドクター・ベリアルは、不愉快そうに眉をひそめながら、彼をシュトレーゼと呼ぶ。

「這い寄る混沌は神出鬼没すなあ……。いつどこに現れるのか、このシュトレーゼにも分からず仕舞いです」

「うむ、奴の狙いはやはり……。『あれを奪い返す』ことだろうか？」

「そうでしょう。だが、彼奴には“あれ”に触れることすら適わぬでしょうが……」

「ふふふ、確かななあ！ この超天才科学者であるドクター・ベリアルが開発した邪神捕縛強制封印システムの効果の賜物だな！」

ドクター・ベリアルとシュトレーゼはニヤニヤと笑いながら、不気味で禍々しい神像を下から見上げる。

さて、そんな神像のイカのようなタコのような……。とにかく気味の悪い頭部の額の部分に、赤く燃え上がる炎のような煌きで周囲を照らす宝玉のようなモノが見受けられる。

でも、なんだろう……。とてもイヤな感じがする。例えるなら、ドス黒く強烈な悪の気配を感じ、思わず気圧されてしまいそうだ。件の宝玉がニヤルこと這い寄る混沌ニヤルラトテップの化身の一

体だからなんだろうか？

「この町、仏滅町は特異だ。這い寄る混沌……ニャルラトテップの化身が2体も封印されていたのだからな」

クククク、と喉の奥で笑うドクター・ベリアルは、口許に右手を当てながら、狂気染みた笑みを浮べる。

（さて、特異なこの町——仏滅町には、さらになにかあるかもしれないな、クククク）

シュトレーゼはなにか——得体の知れないモノとの遭遇でも心待ちにしているような心境を胸中でつぶやく。

はあ、それにしてもこの町にこんな怪しい連中が巢食っているなんて気分が悪いことこの上ないよ……。

第4話「平和を穿つモノ」その7（前書き）

魔道書【不死者教本】とやらを考えてみましたW
どんな本なのかは次回で^^

第4話「平和を穿つモノ」その7

第4話「平和を穿つモノ」その7

ミステリー作家であり、僕……雉飼 狂一が通う学び舎である冥皇学園に勤務する教員のひとりである服部 光二郎先生の怪死事件に始まった臨時休校もたった2日で終わる。

まあ、臨時休校ってものはそんなものかぁ……。僕的には、もう少し続いて欲しかったなぁ、というのが本音かもしれない。

窓から入り込んで来る風は、どこか甘い香りがする。多分、錯覚だろうか……。

とりあえず、冥皇学園校舎へと続く道は桜並木である。

甘い香りは桜の木、もしくは舞い散る桜の花びらの香りなんだろうか？

だけど、今の僕にとっては――

「はあ、憂鬱だなぁ……」

僕は机に顔を押付ける形で溜息をつく。

そんなこんなで憂鬱な気分の僕の耳の中には、ワイワイガヤガヤと級友達の笑い声とともに昨日のテレビ番組の話題、流行に歌手のプロモーションDVDの話題なんかが旋律となって飛び込んでくる。

そのなかにはゲームやインターネットのアダルトサイトでなんだかんだという話で盛り上がってる連中の声も聴こえるが、まあ、それはさておき……。

「なんだぁ、辛気くせえな」

ポンッと僕の肩を叩きながら、そんな風に声をかけてくる者が現れる。悪友の恵介だ。

「ああ、恵介かぁ……」

僕はチラッと恵介の方に視線を向けるけど、その次の瞬間には再び机に顔を押付けた形で溜息をつく。

「おいおい、マジで辛気くせえぞ、お前」

恵介は苦笑を浮かべながら、再び僕の肩をポンツと叩く。

「ん、今はなにも考えたくない気分なんだ」

「そうかあ……。お前も色々あったなあ」

恵介は不思議そうな表情を作って僕を見つめると、首を横に振りながら、自分の席へと戻っていく。

「はあ、マジで憂鬱だああ……。」

僕はとにかく憂鬱である。そんなわけでなにもする気になれなかった。

（誰も僕に話しかけないでほしいなあ。今はなにもする気が起きないんだよ）

胸中で僕はそう願うけど、それも呆気なく終わりを告げる。

「ねえねえ、狂い」

今度はなにやら図鑑らしい分厚い本をたずさえた瑞希が僕に話しかけてくる。

「ん、なに？」

僕は面倒くさいので適当に返事をする。

「もお釣れないなあ。せっかく面白そうな本を図書室で見つけたのに」

瑞希はムツ口を尖らせるが、次の瞬間にはニタニタと微笑む。

「ふふん♪ この本は現在でもその伝説が語り継がれている我が町の英雄、我が町、最強の魔術師、蒼十寺 御影が残した魔道書よ！」

「へえ、凄いナァ……。っと、僕には関係ないや」

僕は再び適当に返事をする。

さて、僕が住む某都道府県S市のベッドタウンである仏滅町には、今から時を遡ること80数年前、留学先の大学……。確か数多くの魔道書が保管されていると聞いたことがあるアメリカ合衆国のマサチューセッツ州にあるアーカムという町に200年以上の前から存在

するミスカトニク大学だったかな？ まあ、そんなミスカトニクに保管されていた最凶の魔道書と言っても半ば間違っていない【ネクロノミコン】を独自の見解とアレンジを加えた形で写本し、それを――【んこみのろくね】を帰国の際に秘密裏に持ち帰った、とされる天宮 弓子と並んで、英雄やら最強に魔術師なんて呼ばれている人物がかつて存在したとか……。

その人物の名前は、蒼十寺 御影である。

それはともかく。

「そういや、さっきから気になっていたんだが、お前の耳、なんかヘンな感じが……。まるで動物みたいな感じだな」

恵介が、どこか気まずそうな態度を見せつつ、そう訊いてくる。

「えッ!? うわ、おわああああああああああああっ！
なんだ、なんだ、この耳は!?!」

多分、狂子さんの仕業だと思われるんだけど、僕の耳がまるで犬猫のような毛の生えたモノになっている。ついでに尻尾も……。

「わぁ、可愛いアクセサリーだね♪」

「イタタタッ！ 引っ張るなよお！」

可愛らしいアクセサリーだと勘違いしてるのはさっぱりだけど、妙にはしゃぐながら瑞希は、僕の犬猫のような毛の生えた左右の耳を面白がってグリグリと引っ張る。

当然、アクセサリーではなく、紛れもなく僕自身の耳であるせいか痛みだつてある。

「ふう、なんでいつもいつも!」

僕の胸中に怒りのようなものが込み上げてくる。すべて狂子さんの仕業だな、と思った途端にだ。

（こんな耳になったのは、きっと狂子さんの仕業だな！ 一体、なにを考えてるんだ、あの女ああ!）

そんなこんなで僕は、ぐりぐりと両耳を引っ張ってくる瑞希を押し退ける。

「きゃっ！ いきなりドーンッと押し退けるなんてヒドイよ！」

押し退けられたことにムツとする瑞希は、眉をひそめながら僕を見つめる。

「よ、用事を思い出したよ！」

少々、気まずい雰囲気が始める。なにせ級友たちの視線が僕ひとりに注がれるし……。

用事がある、と僕はそんな適当な理由を言うと、咄嗟に2年G組の教室から廊下へと飛び出し、一路――狂子さんがいる“あの場所”へと向かうのだった。

「うみゅ、逃げたなあ！ 待てええ！」

「おいおい、どこ行くんだあ！」

さて、なんだかんだと瑞希と恵介も僕の後を追いかけて2年G組の教室を後にするのだった。

みんな次の授業が始まるまで好き勝手に娯楽等を楽しんでいる。

休み時間は学生にとって貴重な時間、ということ……。

まあ、当然、僕もそうなんだが、今日は別である。

なにせ、その貴重な休み時間を叔母である狂子さんによってブチ壊されたようなものだけに――

「狂子さん、今日という今日は僕も――」

僕は勢いよく冥皇学園高等部校舎4階にある図書室の奥に設けられた備品保管室へと駆け込む。

そこは本来なら図書室および、この冥皇学園内に保管されている数冊しか存在しない貴重な本なんかが、もしも消失したりした場合に備えての予備品が保管されていたりするんだけど、実際のところは狂子さんのこの学校内でのアジトと化しており、彼女の私物で埋め尽くされている。

「あら、可愛い獣耳&尻尾じゃない、うふふふ♪」

「うわ、そんなこと言う前になんでそんな格好してるのさ、狂子さん！」

さてと、図書室の奥にある備品保管室へと駆け込んだ僕の双眸には、如何にもゴスロリなフリルがたくさんついた真紅の十字架の刺繍が施されている黒いボンテージ風のワンピース、黒いレザーブーツ、髑髏の刺繍が施されたカチューシャという衣装に身を包んだ狂子さんの姿が、ある意味で小悪魔的というか衝撃的というか……。まあ、そんな妙な気分を駆られる格好の狂子さんの姿が映り込む。「うふふ♪ 超可愛い服をネットオークションで落札しちゃってさあ……っと、今、『年齢を考えろや!』って心の中でつぶやいたでしょ?」

どうやらネットオークションで落札した衣装らしい。一体、何円で落札したんだろうなあ……。っと、それよりもなんだか言いがかりをつけてくる狂子さんに対し、僕は苦笑を浮かべながら、首を激しく横に振るのだった。

「そ、そんなことは……。そんなことはない! か、可愛いよ!」
気に障ることを言うとなにをされるか……。

狂子さんがどんな人間か嫌なくらい理解しているつもりは僕は、とりあえず“可愛いよ”と褒めてみる。

「ふふふ、まあ、とりあえずは、この衣装が放つ美麗で妖しいセンスを理解いるようねえ……。っと、それはともかく。今、大変なことが起きてるのよねえ」

僕が褒めると狂子さんはニヤリと微笑む。

それはいいとして、今、なにか大変なことが起きている、と狂子さんは僕に対し、鋭い刃物が突き刺さるような視線を向けながら言い放つ!

「た、大変なこと!？」

僕は恐る恐る尋ねる。

「ええ、大変よ、大変ッ! なにせ、この学校——冥皇学園に秘蔵されていた魔道書【不死者教本】が何者かに盗まれたのだから!」

魔道書【不死者教本】がどんな代物かは分からないが、“魔道書の類が盗まれた、とあれば一大事なのかな?”

とりあえず僕は、ゴクリと生唾を飲み込むのだった。

第5話「不死者」その1（前書き）

吸血鬼とか不死者絡みの話が展開します＞＜

第5話「不死者」その1

第5話「不死者」

僕、雉飼 狂一の叔母であり、最凶最悪の魔術師であり、狂気の天才科学者でもある狂子さん曰く、数ある魔道書と呼ばれる外道の知識の集大成たる書物の中でも【不死者教本】という書物のおぞましさは、他の魔道書を一蹴する、とか――

とりあえず、かの有名な魔道書【ネクロノミコン】以上の魔道書は、僕的にはないと思うけど、あの狂子さんが“おぞましい”と言うのだから想像するだけでも鳥肌が立ってくるよ……。

魔道書【不死者教本】――紀元前2世紀頃のギリシア人の詩人アレキサンドロスという人物が、旅先として訪れたプトレマイオス朝の支配下にあった当時のエジプトの名もなき辺境の町で夜な夜な行われていた思わず目を背けたくなるようなおぞましい儀式の詳細をパピルス紙に綴ったものをアルカード・フォン・ハインヒルドという古物収集を趣味とするドイツ人の貴族が、自身の屋敷の地下の保管されていた先祖の遺品の中から発見したものであり、それを元に1406年頃に一冊の書物として纏め上げたものである。

『この書物を閲覧する者は幸いである。』

貴方は不死者として人間を超えた存在と化すことができる叡智を手に入れるのだから――』

本の冒頭には、そんな言葉が記されているとか……。それはともかく。

この書物——魔道書【不死者教本】は当然とばかりに当時の権力者等の手によって発行の差し押さえ、発禁、焚書となったとか——そんな著者アルカード・フォン・ハインヒルドの最後は、彼の弟子のひとりであり、実妹であるルージェ・フォン・ハインヒルドが残した日記によると、

「兄は黒い服を着た男たちに、私の目の前で惨殺された」

黒い服を着た男たちの手によって惨殺されたらしい。

僕は大方、魔道書ハンターの仕業では、と推測している。

さて、なんだかんだと危険でおぞましい本として発禁焚書となりながらも【不死者教本】は数冊も現存している。当然、写本ばかりだが、なんと原本が残っているらしい、という話を狂子さんから聞いて僕は驚く。

かの有名な魔道書【ネクロノミコン】の原本である【キタブ・アル・アジフ】でさえ、現存しているかどうか不明だというのに——あ、時代的に新しいからなんだろうか……。

それよりも魔道書【不死者教本】の原本あるいはその写本の一冊が、僕の学び舎である冥皇学園に保管されていたなんて、さらに驚きである。

さて、この本の派生書物が、僕の自宅の地下書庫に保管されたいた【吸血鬼読本】かな、と僕は推測する。

ちなみに、この手の不死者絡みの書物を元におぞましい行為に及んだ歴史上の人物を連想してしまう。

例えば、シャルル・ペローの童話「青ひげ」のモデルとなった何百人もの子供をおぞましい黒魔術の名の下に惨殺し続けたというジル・ド・レや、自前の美貌が衰えるのを恐れ処女から鉄の処女などアイアンメイデンの惨たらしい拷問器具を使って血を絞り、血液風呂に入った、なん

て言われているエリザベート・バートリーとか……。

「単刀直入に言うわ！ あの本には行きながらにして不死者——吸血鬼や屍鬼^{ゾンビ}となることができるおぞましい方法が記されているってわけよ」

狂子さんは眉をひそめながら、そう僕に語りかける。

「まあ、どこのどいつが盗み出したかつうことは判明してるのよねえ」

魔道書【不死者教本】を盗み出した輩が、どんな輩なのかってことは、狂子さんにはすで判明済みであるようだ。

「えええッ！？ 判明済みなの！」

「もちろんよお！ この私をナメちゃいけないわあ……つと、放課後に件の魔道書【不死者教本】を盗み出した泥棒を取っ捕まえに行くわよ！ ああ、反対意見を受け付けないわよ！」

ゴスロリには悪魔系、天使系、なんて種類があるようだけど、そんなゴスロリな格好をしている狂子さんの場合は間違いなく悪魔系だろうなあ……。

まあ、それはともかく。

狂子さんは反対意見を一切受け付けないよ、と僕を睨みつける。

「とりあえず、あの連中の関係者……。彼女にも手伝わせようかな」
プイッと狂子さんは自分の手許の机に置いてある一冊の本に視線を移すと、両目を細めニヤリと微笑む。

「そ、その本はなに！？」

僕はとりあえず訊いてみる。

「秘密よ、ヒ・ミ・ツ♪ さて、そろそろ休み時間が終わりを告げるわよ」

「あ、もうそんな時間に！」

なんだかんだと狂子さんのワガママを聞いているうちに休み時間

の終わりを告げるベルが鳴り響く。

そんなこんなで僕は、今いる冥皇学園高等部の校舎4階にある図書室に設けられた備品保管室を後にする。

ちなみに、女体化に続いて僕の耳は、ふさふさした毛の生えた耳……例えるなら猫耳あるいは犬耳となってしまうので、それが目立つのがイヤだあああつてことでニットキャップを深々と被るのだった。

狂子さんは相当、ゴスロリな衣装が気に入ったのかな？

まあ、そんな感じで今日一日、その格好のまま授業を行うのだった。

んで、後日、狂子さんのゴスロリな格好に触発されたのは定かだけれど、我が校の保険医であり、狂子さんの学生時代から親友である春香先生や北に玄武、南に朱雀、西に白虎、東に青龍という四神相応、風水の力を使って学校の安泰を願っているかのように配置されている冥皇学園を形成する4つの校舎の中心——通称、大中庭に建つ聖ドミナス教会のシスターであり、春香先生と同じく狂子さんとは学生時代からの親友であるサマエル・アーミテージさんも同じようなゴスロリな格好で出勤するようになる……おいおい。

さて、なんだかんだと時間は経つのは早いもんだ……つとばかりに、ハッと気がついた時には西の空が白と赤のコントラストが萌える黄昏時であった。

「ふう、ずっと居眠りしていたみたいだ……」

僕は2年G組の自分の席でぐっすりと眠っていたようである。

で、そのせいかな？ 僕以外、2年G組には誰も居らずシーンと静まり返っている。

「お、やっと起きたか！ ……って、お前、居眠りなんかしてる」と単位落とすぜ！ 俺なんか去年、危なく数学の単位を落としそうになったからなあ……。あ、自慢することじゃないかな……」

目覚めたばかりでまどろみ靄がかっている僕の双眸に、窓辺から射し込むオレンジ色の西日に照らされた身につけているシルバーアクセサリーがキラキラ光っているそんな恵介の姿が映り込む。

「オカルト研究部員、全員集合だってさ！ あ、やっと起きたね」
瑞希がドカドカと喧しい足音を奏でながら2年G組の教室内へと駆け込んでくる。

「むう、なんだかイヤな予感が……」

僕は薄々っていうか、瑞希が口走った“オカルト研究部員、全員集合”という言葉に戦慄にも似たなにかトンでもないことを担任の教師である狂子さんが始めるのでは？なんて危機感を覚える。

（そういえば、狂子さん……『放課後に件の魔道書【不死者教本】を盗み出した泥棒を取っ捕まえに行くわよ！』みたいなことを言っていたような……）

ふと僕は狂子さんの先ほど僕に対して言ったそんな言葉を思い出す。

それと同時に大量の冷や汗が……。

「ん、どうしたのお？」

瑞希が不思議そうに僕の顔を覗き込む。

「な、なんでもないよ。さ、行こうか！」

僕はとりあえず、目を逸らす。で、適当にそう言いながら、2年G組の教室からさっさと立ち去るのだった。

（ふう、狂子さんの思惑をここでバラすわけにいかない気がする……。ゴメン、本当は言いたいんだけど）

なんだか後ろめたい気がするけど、とりあえずここでは……。

さて、そんな僕、恵介、瑞希の3人は、オカルト研究部の活動拠点である高等部の校舎4階図書館へと足を運ぶのだった。

第5話「不死者」その2（前書き）

最近、クトゥルフ神話にはまっていますW

第5話 「不死者」 その2

第5話 「不死者」 その2

そういえば、魔道書に分類される禁断の書物を保有していると、魔道書ハンターや邪神の眷属と言っても半ば間違っていない怪異な連中に命を狙われる可能性が高いかどうか……。

そんな魔道書に分類されるような禁断の書物の一冊である【んこみのろくね】を常に持ち歩いている僕、雉飼 狂一の叔母である狂子さんもあの手の連中から命を狙われているんだろうか……。

ま、まあ、狂子さんの場合、あの手の連中を確実に返り討ちにす
るだろうなあ……。

それはともかく。

「さてと、今夜は月が真円を描く時！　そう満月……ってことで吸血鬼退治に出かけるわよ！　うふふ、我が部の課題実習ってことでね！」

その姿がっというか、その格好が如何にも墮天使や悪魔を基調したって感じがするゴスロリな格好をしている狂子さんが、そう言い放つと同時に、

「な、なんだってえええええええええええ！」

僕と恵介、そして瑞希は声をそろえて、そんな驚きの絶叫を張り上げる。

予め、狂子さんから放課後の実習らしきことについて聞いていたけど、本当にやるとは、と驚く僕もそうだけど、初めてあんな馬鹿げたことを聞かされた恵介と瑞希の反応は、それ相応な驚愕だろうなあ……。

「吸血鬼退治ですか……。うふふ、なんだか面白そうですね♪」
「吸血退治ね……。実際にいるかいなかさっぱりだけど、なんか面白そう♪」

驚きの絶叫を張り上げる僕、恵介、瑞希の3人とは裏腹に、僕らオカルト研究部の部長であり、この冥皇学園でその名を知らない者はいない、と言っても過言ではない奇特な人物であり、冥皇学園の理事長を務めている須藤理事長の孫娘、須藤明日香と、興味本位で僕らオカルト研究部の活動に参加しちゃってる変わり者の先輩、諏訪部真央は、なんだか浮かれっぱなしである。その様子は、動くものならどんなものにも飛び掛っていく無邪気な子猫のようである。

その前に危機感を覚えないのかな、この人たち……。

僕はこの間の怪異のことを吸血鬼に例えると震えが……。

それはともかく。

「この学校には、とある封印されていたルネサンス時代……つまり中世末期に書かれた一冊の古い洋書があったのよ。読む者に〈不死者〉となることを勧めるおぞましい禁書——【不死者教本】がね！
んで、そんな【不死者教本】を盗み出した輩っていうのが、なんと吸血鬼かもしれないのよ！ まあ、そんな感じで吸血鬼退治も兼ねて【不死者教本】も取り戻しましょう、私たちの手で！」

バンツと狂子さんは、自分で用意した教台に両手を叩きつけながら、そう言い放つ。

「ふむふむ、【不死者教本】ねえ……。どんな内容なのか是非、見てみたいよね、狂一クン！」

僕の許に歩み寄りニヤニヤと微笑みながら絡んでくる諏訪部先輩が、そんな僕の耳元で囁く。

「えっ！？ ううう……。読んでみたいけど、読むのが怖い……」

読んでみたいけど、読み終わった後に僕の問題と行動にどんな悪影響を及ぼすのやら……。っと、そう考えると、段々、読むのが怖くなってくる、というのが本音である。

「ところで狂子先生、素朴な質問があります！」

「ん、なあに？」

と、瑞希が恐る恐る尋ねる。

「そもそも〈不死者〉ってどんな存在なんですか……っと、質問してみます！　もしかして、この間のバケモノと同種類ですか？」

「うーん、まあ、同じバケモノに違いないけど、その名の通り“死なない”のよ、あいつらは……」

この間のバケモノ——僕らが安座主公園で遭遇した怪異とは同じバケモノに相違ない、と狂子さんは右手で自前のメガネのズレを直しながら返事をする。

だけど、〈不死者〉というその名称の通り、彼らは“死なない”……いや、正確には“死ねない”のだ、と言って眉をひそめる狂子さん。

「死にたくても死ねない、哀れな連中——それが〈不死者〉と言ってもいいわね。だから、そいつらの同一の存在、吸血鬼を私たちが滅ぼしてやろうじゃない」

そう言ってニヤリと微笑み狂子さん。

さて、狂子さんが提唱する僕らオカルト研究部の放課後の課題実習である吸血鬼退治——即ち〈不死者〉退治ってわけであるが……。

「はあ、マジでやるのかよ……」

「う、うん、そうみたい……」

恵介は溜息をつきながら、僕の顔を見つめて苦笑を浮かべる。

「そのふたり！　なにか文句でもあるの？」

さてと、そんな僕と恵介に対し、殺気立った声と視線を向けながら、そう狂子さんは言い放つ。

「な、なんでもないよ、なんでも！」

「み、右に同じく！」

僕と恵介はほぼ同時に狂子さんから目を逸らす。

「まあいいわ。んじゃ、一時帰宅後に、白鳳神社に集合よ！」

狂子さんは教台をバンバンと何度か叩きながら、一時帰宅後に白鳳神社の集合、と言い放つ。

さて、そんな狂子さんが、一瞬だけど、ニヤリと微笑みながら、僕の方に視線を向けたような気がする……。

ううう、なのかイヤなことが起きる前触れを僕を感じ取る。

その前に“吸血鬼退治”なんて、そんなムチャクチャな課題実習自体がイヤなことだなあ……。

「え、白鳳神社！？ うーん、とりあえず了解しておいた方が無難だな、おい」

「う、うん、そうだね……」

なんだかんだと、ここは素直に従った方が無難、と僕と恵介は顔を見合わせながら苦笑を浮かべるのだった。

「さ、なんだかんだと楽しみ♪」

「ですねえ♪ 吸血鬼とのお遭遇……楽しみですよ♪」

諏訪部先輩と明日香は相変わらず、危機感つてものがない……。はあ、この人たちは……。

僕ら——地球人が住む母なる惑星、地球は太陽系と呼ばれる広大で無限なる銀河系の辺境に位置する小さな惑星である。

宇宙全体に比べれば辺境銀河の矮小な小惑星だろうけど、生命の営みが存在する、という特別な環境がそこにはある。

それは素晴らしいことなんだろうか……。

それとも……。

「わあ、もう真っ暗闇の夜かあ……」

さて、赤々と燃えるような紅のコントラストが映えていた天空を見上げると、煌々と瞬く星々、真円を描く月——つまり、満月が一際明るく、そして妖しく輝くそんな夜という時間へと移行していることに僕は、時間の流れの速さにちよつとばかり驚く。

僕は今、この仏滅町のアイドル的な存在であり、日に3万HIT

を叩き出す超が付くような人気ブログ『猫の巫女』の管理人でネットアイドルとしても有名な神崎 燐華の住まいでもある白鳳神社の境内入り口にある鳥居のところでボーッと煌々と輝く星々が幻想的であり、また宇宙の暗闇に得体の知れないモノの存在を思わず感じてしまう、といったコズミックホラー的な言葉を連想してしまう夜空を見上げていた。

「んー、こんな時間にご参拝なんて物好きなこと……」

そんな声がどこからか聞こえてくる。ちなみに、澄んだ綺麗な声である。多分、声の主は女性だろう。

「やあ、誰かと思ったら狂ちゃんじゃない。こんな時間になにしてるのかなあー♪」

そう言いパタパタと軽快な足音を奏でながら、声の主が僕の許へと駆け寄ってくる。

「あ、燐華さん、こんばんは」

「ふふふ、こんばんは、狂ちゃん」

と、僕はとりあえず声をかけ、一礼する。

さて、僕の目の前には一応、雅な巫女の格好なんだろうけど、今にも自前の大きな肉の双丘がはみ出しそうなくらい上着である純白の衣の胸元が大ききはだけた妖艶な……っというか、僕には自堕落だな、と思ってしまうような格好が目に残るひとりの女性が――
神崎 燐華が現れる。

ちなみに、年齢は20歳で背中まで伸びた艶のある黒髪を和風美人といった感じである。

ついでに言うておくと、僕とは某人気ネットゲーム内の友人でもある。

ああ、それと狂介兄さんとは〈腐った林檎〉というバンドの仲間である。そのせいかな？ 常に派手なエレキギターを持ち歩いている。

まあ、とりあえず、狂介兄さんのように真夜中の路上ライブを始めたとか、そんな非常識なことはやらないと思う……。多分ね。

さて。

「さてと、狂ちゃんがこんなところにひとりで見ると、なにか面白そうなことが起きる予感がするのよねえ……」

ペロリと口許を舐める燐華さんは、怪訝そうに僕をジッと見つめる。

燐華さんは超常現象とか、その手の話題が大好きな人だ。

自身のHPでも世界各国で起きた超常現象なんかについての情報を扱ってるくらいだし……。

僕の父さん、雉飼 狂蔵と同じく、

『我々、人類が誕生する以前、宇宙の暗闇からやって来た外なる神々、旧支配者などと呼ばれる邪悪な神々によって支配されていた暗黒の時代が存在したのよ!』

『ムー、アトランティス、レムリア、そしてハイパーボリアという海底に沈んだ現代文明を凌駕する超文明を育んだ幻の大陸についてのレポートシリーズ随時更新!』

こんな奇妙なことを言っちゃってる変人でもある。

まあ、人の趣味のケチをつける真似は僕には出来ないけどね。

ちなみに、彼女のホームページは愛らしい子猫や子犬などの小動物の写真&身近な出来事を毎日欠かさずに投稿させれているブログがメインである。

それが爆発的なHIT数を生み出している。

「あ、そういえば、さっきトンでもない、そりやもう信じられないような光景を見ちゃったわ! あ、でも、狂ちゃんが信じてくれるか心配かも……」

「え、な、なに!?!」

胸のところでパンツと両手を合わせながら、ふっとなにか……きつと、そんな燐華さんにとっては物凄くインパクトがある光景でみ

目撃したんだろうか？

まあ、そんなこんなで、そのことを語りたくてウズウズしているような素振りを見せる燐華さんは、ジッと僕を見つめるのだったが、

「おっと、残念だけど、そろそろホームページを更新する時間が来たわ！ 毎日更新がモットー！ あ、そんなわけで失礼するわぁ……っと、じゃあ、シーユーアゲイン！」

毎日更新がモットーのホームページの更新を理由に燐華さんは、ドタバタと足早に自宅でもある境内の深奥にある本堂へと駆け出していく。

おいおい、一体、僕にどんな凄い光景の話について語りたかったんだろ……。むう、気になるなぁ……

「ふう、忙しいねえ、あの人も……」

目の前から立ち去る燐華さんを見送る僕……っと、次の瞬間、明瞭な……明確な殺気のような思わずゾッと冷や汗をかくような気配を背後に感じ取る。

「あら、一番乗りは我が甥の狂一クンじゃん。つか、私より先に来るなんて生意気ね！」

殺気の正体は狂子さんである。

それはともかく。いつの間にやら狂子さんが僕の後ろに……。しかも、未だにゴスロリな格好のまま、である。相当気に入っているようだけど……。

「ふ、まあいいわ。今回だけは許してあげるわ。さて、狂一クン、再び〈銀天使〉になるかもしれないわよ、とりあえず言っておくわ」「う、ううう……」

狂子さんは僕をジッと見つめつつ、如何にも不敵な笑みって感じの微笑みを口許に浮かべながら、〈銀天使〉に再びならねばいけないことになるかも、と脅しをかけるように言う。

ま、まさか、とは思うけど……。

「うふふ、今宵の課題実習……いや、この私の崇高な計画――『吸

血鬼をブチのめしましょう計画』の主軸は、連中のような不浄の存在〈不死者〉を滅ぼすことができる〈銀天使〉となった狂一クンのよねえ〜♪」

「え、えええええっ！ ……って、如何にも誇大妄想のような課題実習がいつの間にやら、そんな計画に！」

はあ、これだから狂子さんは……。僕は狂子さんの思い描いた誇大妄想的な計画にまんまと乗せられた自分がイヤになってきたよ…。

ううむ、この間、安座主公園で異形異質の怪異な生物と遭遇した経験から、吸血鬼――〈不死者〉って連中が実際に存在するんだろうなあ、とは思っただけで、やっぱり……。

「ん、どうしたの？ もしかして文句があるのかな？」

「な、ないです……」

「よしよし、それでこそ我が愛玩動……ゲフンゲフン、な、なんでもないわ！」

「む、今、愛玩動物って……。はあ、なんだかなあ……」

はあ、愛玩動物って……。

狂子さんにとって僕の存在は……。

さて、なんだかんだ狂子さんとやりとりしているうちに恵介たちも、ここ白鳳神社へとやって来る。

第5話「不死者」その3（前書き）

んゝ、戦闘シーンとか思いつく一方でいざ書くとなると難しいものですね^^..

戦闘シーンの書き方をもうちつと勉強しようかなあゝ><

第5話「不死者」その3

第5話「不死者」その3

それは僕、雉飼 狂一やその友人たち——冥皇学園高等部に属するオカルト研究部の部員たちが、顧問の先生であり、僕にとっては叔母でもある雉飼 狂子が提案する“吸血鬼退治”なんて奇妙な課題実習にまんまと乗せられて白鳳神社ってところへやって来る少し前の話である。

西の地平線の彼方に半分ほど、その身を沈める形の太陽は、今日一日分の輝きを放ち終え、今にも消えてしまいそうな虚ろな太陽の様子である。

そんな太陽を見ているうちに、どこか儚く、どこか物悲しい気持ちに駆られてしまう。

「時の移り変わりは速いものだ。あつと言う間の昼と夜は入れ替わるものだ。ふ、世の中も同意義だろう……」

東の空から迫り来る深淵のような夜の闇と、完全に地平線の彼方に太陽が沈んでいないこともあって未だに黄昏時の名残りとはばかりに紅に染まり、萌えている西の空がぶつかり合う天空をジッと見上げる白と青で基調されたセーラー服を着こなした小柄なひとりの少女は——蓮田 魅夜美は、自前の漆黒の長い髪を吹き抜ける風になびかせながら、時の移り変わりの速さに対しての憂いのような言葉をつぶやく。

「ふむ、この町には、“あの連中”の他にも厄介なモノが巢食っているようだな。〈不死者〉とやらか……」

そうつぶやきながら、自分の周りをぐるりと見回す魅夜美のそん

な周囲には、大人の拳と同じほどの大きさはある巨大な蜂に酷似した空中を滑空する昆虫のような生物の姿が見受けられる。

「ビャーキー、引き続き“あの連中”の監視を——」

魅夜美が無表情で言い放つ。それと同時に蜂に酷似した昆虫のような生物は、目にも留まらぬスピードを活かし、彼女の目の前から瞬時にいなくなる。

一体、あの生物は……。

某都道府県S市のベッドタウンである仏滅町を拠点に活動する2組のアイドルが存在する。

前者は日に3万HITを叩き出すこともある超人気ブログの管理人であり、約800年の歴史と文化を謳歌する白鳳神社の宮司である神崎 修吾氏の一人娘である通称、コスプレ巫女とファンの間で呼ばれている神崎 燐葉。

後者はつい最近CDデビューを果たした双子の女子高生アイドルの散夜と咲夜である。ああ、ちなみに彼女らも僕が通う冥皇学園の生徒であるらしいけど、滅多に見かけない……芸能人は忙しいってところだろうか？

さて、この二組のアイドルはお互いをライバルとして意識し合っている、とも聞く。

それはともかく。

「ここは白鳳神社か……。ふ、8年前から全然代わらん、ここは……」

魅夜美の目の前には、今にも東の空から押し寄せてくる夜の闇にどんと追いつまれている黄昏時の朱に染まった空と同じ鮮やかな朱色の鳥居がそびえ立っている。

そこは神社の境内入り口——『白鳳神社』と刻まれた石塔が鳥居の側に見受けられるそんな場所である。

「ふう、さっきから妙な声が聞こえるねえ……。これは戦闘の！」

血の臭いか！」

魅夜美は両目をつぶり耳を済ませながら、ペロリと口許を一度舐めると、キッと白鳳神社の境内深奥にある御神体が鎮座する本殿の方に視線を向ける。

白鳳神社の境内深奥にある御神体が鎮座する本殿裏には、この白鳳神社の宮司である神崎 修吾氏がオーナーを務める少年野球チームへ仏滅グレートファイターズ専用グラウンドがあったりする。それはともかく。

そんなグラウンドから耳障りな金属と金属がぶつかり合うキンツと周囲に響きわたる音や、銃弾が発射されるけたたましい騒音が奇妙な旋律となり、吹き抜ける風に乗って周囲へと拡散している。

「こんな場所でいきなり襲い掛かってくるなんて物騒だね、キミたちは！」

「黙れ、不浄な存在である〈不死者〉がッ！ 貴様らをひとり残さず滅するのが、この俺の――いや、先祖代々から脈々と引き継がれた使命でもあるッ！」

サングラスを素顔を隠した黒ずくめの長身瘦躯の男は、左手に握られた大型のリボルバー拳銃を、右手に一振りの日本刀を握っており、それを交互に操りながら目の前にいる赤いニットのセーター、右膝のところが破けたジーンズという格好の上からベージュのロングコートを羽織った金髪碧眼の美女を襲撃する姿が見受けられる。

男が言い放つ〈不死者〉とは、この美女のことなんだろうか？

「こんな人目につきやすい場所でもおかまいなしに攻撃を仕掛けてくるって、どういう神経してるんだが……っと、こんな場所に立ち寄った自分もなんなんだかねえ！」

美女は黒ずめの男の攻撃を紙一重でヒョイヒョイとかわしながら言い放つ。

「ふん、戯言をッ！」

黒ずくめの男はシャツと身を翻しながら、左手に握られた大型の

リボルバー拳銃を乱射すると、その刹那——神業とも言える速さで弾丸をリロードし、再び大型のリボルバー拳銃から弾丸を乱射し始める。

「うわああッ！」

その神業とも言える弾丸リロードの繰り返しが生み出す、弾丸の雨の前に流石の美女もかわし切れず、その身を何発もの弾丸が貫く。「その程度じゃ死なないだろ、吸血鬼！ 今度はこいつだッ！」

続けざまに黒ずくめの男は、何発もの銃弾を浴び、その衝撃で激しく後方へと吹っ飛ぶ美女の懷に刹那の一瞬で接近し、瞬時にその身を屈め、下段から逆袈裟に右手に握られた一振りの日本刀を美女——吸血鬼目掛けて振り上げる。

黄昏時の紅に萌える光を浴び、オレンジ色の鈍い光を帯びた斬撃が閃光となって逆袈裟に走る。それと同時に、真紅の流血がドバツと飛び散り、黒ずくめの男はそれを浴び血まみれとなる。

「その程度か、吸血鬼！」

ドシャアッ！

黒ずくめの男は仰向けに倒れこむ美女——吸血鬼の胸元に止めの一撃とばかりに、右手に握る一振りの日本刀の鋭い切っ先を思い切り突き刺す。

だが、吸血鬼はその程度では死なない。それどころか痛々しい血まみれの姿になりながらも、

「ぐうう……。この服、お気に入りなのに……」

着こなしているお気に入り衣服に傷がついたことの方が気になっっている模様である。おいおい……。

「やはりお前ら〈不死者〉に対し、真なる死をくれてやるには、その首を切り落とすしかないようだな」

左手に握られた大型のリボルバー拳銃を腰のホルスターに収納すると黒ずくめの男は、スラリッと背中中に隠し持っていた予備の日本刀を鞘から引き抜くと、その冷たく、そして鈍い光を帯びた刃を吸血鬼の白くきめ細やかな首筋に押し当てる。

「ふうん、私の首を刎ねるってわけね。だけど、早々、上手くいくかしら……」

「なにッ！」

吸血鬼はニヤリと挑発的な笑みを浮かべながら言い放つ。

さて、その次の瞬間、

「ひ、人殺しいいいいい！」

そんなけたたましい叫び声が響きわたる。

それと同時に、巫女の格好をした若い女が数人の男たちを連れてドカドカと、このグラウンドへと駆け込んでくる。

「チッ……。この場は引こう。だか、次は確実にお前を殺すぞ、吸血鬼——いや、ルージェ・フォン・ハインヒルド！」

「ふう、やられっぱなしっていうのはちつとばっかし癪に障るかも……つと、アンタのその台詞、それは次に遭遇したときにこっちが言う台詞になるかもね、忌々しい魔道書ハンター兼ヴァンパイアハンター御剣 良！」

黒ずくめの男——御剣 良は、吸血鬼ことルージェ・フォン・ハインヒルドの胸元に突き刺した形の多分、愛刀と思われる日本刀を引き抜くと、まさに神速という言葉がまさによく似合おう物凄い脚力を活かし、この白鳳神社の境内深奥にある御神体が鎮座する本殿裏にあるグラウンドから疾風の如き勢いで逃走する。

「ふう、逃げ足が速いねえ……。さて、色々ややこしくなる前に私も——」

血まみれの痛々しい姿であるが、ムクリとまるでなにもなかったかのように起き上がるルージェもグラウンドから神速の勢いで退散しようとする。タダ、彼女の場合、全身血まみれで、その姿はまるで幽鬼のようである。

んで、そんな全身血まみれの幽鬼のような思わずゾッとするような姿で、スッと燐華さんの横を通りすがっていく。

「い、一体、なにがあったわけ！？」

そこへ駆けつけてきた巫女の格好をした若い女——神崎 燐華は、

思わず呆然とし、その場に立ち尽くすのだった。

まあ、当然といえば当然かな……。

「うふふ、面白い場面を見ちゃったかも♪ 〈不死者〉かあ、ここ最近、ヴァンパイアハンター等の連中のせいで、そのほとんどが抹殺されてしまっているから、“ある意味”で貴重で、希少な存在かもね」

黄昏時のオレンジ色の陽光を浴びさらに萌えて見える白鳳神社境内に生息する樹齢500年は軽く数えるだろうと思われる桜の大木——通称、天の桜と呼ばれていることもある御神木の木陰から吸血鬼ルージェ・フォン・ハインヒルドと魔道書ハンター兼ヴァンパイアハンターの御剣 良の様子を傍観していたモノ——ニヤルこと邪神ニヤルラトテップは、次の瞬間、その姿を黒い霧状の禍々しい姿に変貌させるとフツと空気の中の溶け込むかのように、そんな禍々しい姿をあっという間に消失させるのだった。

さて、物語は再び、僕らオカルト研究部の話に戻そうかな……。

第5話「不死者」その4（前書き）

新たな怪異が登場します！

あ、オリジナルの呪文を考えてみました W

第5話「不死者」その4

第5話「不死者」その5

「んじゃ、各自適当に探索！ なにか怪しい生物等を発見した場合、即この私に電話をッ！ では、一時解散ッ！」

はあ、狂子さん、アンタって女は……。

僕は恵介と顔を見合わせながら思わず苦笑を浮かべるのだった。

さて、僕ら冥王学園高等部に属する部活動のひとつであるオカルト研究部に対し、顧問の教師である僕にとっては叔母という間柄にある狂子さんは、ある意味で究極の課題を押付けるのだった！

それは“吸血鬼退治”である！ ……つと、本来は僕の学び舎である冥王学園に保管されていたらしい魔道書【不死者教本】を盗み出した輩から、そんな魔道書【不死者教本】を取り返すことが課題なんだが……。

まあ、こっちの課題もメチャクチャなんだけど、臆病者の僕は逆らうことが……。あああ、考えただけで身震いがッ！

それはともかく。

「えへへ、狂一クンとお一緒のおチームですう♪」

「あ、ああ、そうみたいだね」

狂子さんはこれまた適当に僕らオカルト研究部の部員を何組かに分ける……。といっても僕、雉飼 狂一、それに恵介と瑞希、部長の明日香、ついでにゲスト参加のような感じで僕らのメチャクチャな課題実習に付き合っただけの形の諏訪部 真央先輩を加えると計5人しかない。

とりあえず、なんだかんだと僕は明日香と組むこととなる。

「ああん、なんで狂一クンと一緒にじゃないわけッ！」

とまあ、諏訪部先輩が文句を言うが、泣く泣く恵介と瑞希とチー

ムを組むこととなる。

まあ、僕はあの人とチームを組むことにならなくて良かった、と本気で思うのだった。

（はあ、でも、明日香もなあ……）

自称、“魔術師”である明日香は奇特な人間である。でも、一応、なにかあれば――そうだなあ、吸血鬼にもしも遭遇したら、なにかしらに“対処法”を心得ていればいいなあ、と僕はそんな他力本願なことを胸中で思い描く。

「うふふ、なんだかあこうしてえふたりでえいるとお、まるでデートみたいでのお♪」

「うん、そうだね……って!? デ、デ、デ、デートォ!」

本気で言ってるのか? それとも冗談って言ってるのか? 明日香がいきなりそんなことを言い出すので僕はビクツと一瞬、身震いをする。

（彼女とだけはデートなんかしたくないなあ……。恵介曰く、“酷い目に遭うぞ”らしいからなあ……）

以前、恵介が彼女の買い物に付き合ってそりやもう酷い目にあった、と嘆いていたことがある。まあ、それを考えるとなあ……。

「そういえばあ、私はあ夜の街とはあ無縁のお存在だと思おうのですのお」

「ん、どういうこと?」

「お爺様が『夜というのは邪悪なモノが集まりやすい時間だ!』とか、『月の光は人間の内に秘める狂気を駆り立てる』なんて言うのでえ、なんだか怖くてえ滅多にい出歩かないものでえ……」

「そ、そうなんだ……」

明日香はお爺様こと、冥王学園理事長である須藤 賢蔵氏は僕の父、雉飼 狂蔵とは同じ穴のムジナである。

まあ、要するに学会等で怪しい学説を述べて人々から白い目で見られているような変わり者ってわけだ。

そんなこんなで少なからずお爺様こと須藤 賢蔵氏の影響を無駄

なくらい大袈裟に受け継いでいるのが孫娘である須藤 明日香というわけ。

ちなみに、僕の父さんと明日香の祖父である須藤 賢蔵は同じ穴のムジナってことで当然とばかりに交流を持っていたりする。

んー、類は友を呼ぶってわけだ。

それはともかく。

「ねえねえ、あの店へ行きましょうよぉ♪」

「う、うん……」

あまり気が乗らないんだけどなあ……。

まあ、とりあえず僕は、ぐいぐいと上着の右腕の袖口を引っ張る明日香に付き合って、彼女が“行こう”と指差す店へと向かうのだった。

夜の街は怪しい雰囲気支配している。

それは例え、多くの人々で賑わう繁華街でも変わらない。

そう行き交う人々の中に怪異のような怪しいモノも混じり込んでおり、そんな連中の身体から発散される瘴気が時として人間の内に秘める狂気を駆り立てるのかもしれない。

さて、僕と明日香は『黒鴉』という自称、オカルトショップと掲げる店の中へと足を運ぶ。

とりあえず、オカルトショップというだけあって怪しい代物が店内に陳列している。

店長と思われる人物もどこか怪しい雰囲気を漂わせてはいるが、まあ普通の人だろうな、きつと……。

それがいいとして狂子さんに、吸血鬼退治を——と言われてはいるが、正直言ってそんな危険な行為に身を委ねるよりもこんな感じで遊び歩いていた方がいい！ まあ、そんなこんなで一時的に“吸血鬼退治”のことは忘れよう、と僕は企むのだったが——

「ねえ、このネックレス可愛いですねえ♪」

「そ、そう？」

ある意味で悪趣味な感じがするシューケースに飾ってある如何にも怪しく、如何にもなにからしの曰くがありそうな雰囲気醸し出しているネックレスを指差しながら、僕を見つめて微笑みかける明日香に対し、僕は思わず苦笑を浮かべてしまう。

「ん、それよりこの店の客……。なんだかみんな青白いつていうか土気色の不健康そうな顔色の人々ばかりだな……」

僕は奇妙なことに気がつく。その奇妙なことっていうのは、このオカルトショップ『黒鴉』の店内にいる客たちに様子だ。

まるで生気の失せた青白く、そして死人のような土気色の顔色の者ばかりである。

「なんかヘンだぞ、この店……」

怪訝そうに僕がそうつぶやいた直後のことだった。

「隠しても無駄よ！ アンタがああ忌まわしい本を——【不死者教本】を隠し持っていることくらいお見通しなのよ！」

そんな怒鳴り声が店内の響きわたる。声色から若い女性のような感じが……。

「な、な、なにを言ってるんだ、キミはッ！ そ、そんなわけの分からない本なんぞ知るわけがないだろうがッ！」

店主らしきボサボサ頭に瓶底のような分厚い眼鏡、そして如何にも怪しいでたちと態度が目立ちまくってる小柄な男は、そんな具合に怒鳴り返す。

「ああああ、なにやらあ向こうでえ問題発生でもお……」

「そ、そうみたいだね」

（今、【不死者教本】がどうとかった聞こえた気がしたけど……」

僕と明日香は怒鳴り声が交錯するレジカウンターの方を物陰からこっそりと覗き込む。

「嘘をついても意味がないってことをその身に教え込んであげましょうかッ！」

と前述した店主らしき小柄な男の胸倉に掴みかかっている多分、ルーン文字だと思われるがそんな文字が全面に刺繍された真紅のカチューシャが見受けられる背中まで伸びた黄金色、雲ひとつない蒼穹のような蒼い瞳が特徴的な白いブラウスとジーンズの上からベージュのロングコートを羽織っている22、3歳くらいの若い白人女性性の姿が、物陰からこっそりと様子を覗っている僕と明日香の双眸に映り込む。

ああ、ついでに、女性としては背が高い方だろう。身長175センチ、腰周りの高さや足の長さなどスタイルなんかも日本人とかアジア系の人間との違いを見られる。まあ、言い換えれば“西洋美”というもののなんだろうか？

それはともかく。

「あたしには分かっているのよ！ アンタが人間じゃないってことくらいねッ！」

そう言い放った次の瞬間、女の左手の五指の爪が鉤状に変貌を遂げる。それはまるで猫科の大型肉食獣を連想させる。

「な、なにをする気だ、お前！」

「こうするのよ！」

その刹那、女は鉤状に変貌を遂げた左手の五指の爪を店主の顔面目掛けて頭上から振り下ろす。

「ぐ、ぐわあああああああああッ！」

店主の断末魔の悲鳴が店内に響きわたる。だが、次の瞬間、僕と明日香は呆然とする。何故なら、女の鉤状に展開した左手の五指による斬撃によって剥ぎ取られた店主の顔面の皮膚の下から、黒味がかったおぞましい化け物の貌が出現したからだ！ そう店主の正体は、僕らがこの間、安座主公園で遭遇した怪異と同一の異形の生物だった、というわけだ。

「おいおい、あれはこの間の……」

「う、うん、確かにいあればあ……」

僕と明日香は同時にゴクリと生唾を飲み込みながら、しばらくジッとお互いの顔を見合う。

「ケケケケッ！ バレちゃ仕方がねえ！ この俺様、マルツア様、直々にブチ殺してやるぜえ！」

店主こと、マルツアと名乗る怪異は、上着の胸元を掴んでいる女の左腕を振り払う……っというか力任せに跳ね飛ばし、次の瞬間、骨格が存在しないタコやイカのようなニョロニョロとした不気味な動きを見せると、バツと天井に飛び上がり、そこにへばりつく。

「うぐう……」

女の左腕は普通なら曲がらない方向へと曲がっている。こりゃ明らかに骨折してるなって感じだ……。

「ウケケケ、俺様は獲物が弱ったところを食らうのが大好きなんだ！ おい、野郎ども、その女を食い殺せや！ のだーのだーのるつあ、ありまーありまーのるつあ、ふあるあ、むがぐん、ぐあるどうあ！ けぷつああ、かぷとおらー、いあいあ、のるつあぷとおお！」

マルツアは気味の悪い声色で、なにやら呪文のような言葉をつぶやく始めると、その刹那、

「ウガアアアアアアッ！」

「ギャアオオオオオオッ！」

このオカルトグッズ専門店『黒鴉』の店内にいる客たちは、天井にへばりついているマルツアと同様、人間とは思えない不気味な動きを見せ始めると同時に大声を張り上げながら、一斉に女に対し、襲い掛かる。その眼は白目を向き、表情は虚ろ、口からはダラダラと涎を滴らせている。

「おいおい、なにがあったんだあ！」

と僕がつぶやいた直後、如何にも気が狂った凶暴な生物って感じの姿に豹変を遂げた客のひとりが、不気味な咆哮を張り上げながら物陰に隠れている僕と明日香の許へと突撃してくる。

「うわ、なんだ、あいつ！」

「あうゝ、気持ちが悪いですよ！」

とりあえず僕と明日香は身構える。

さて、その次の瞬間、バツとあの女が神速の足回りを活かして……っと、そんな感じの物凄い足の速さを活かした形で、唾然としながらも身構える僕と明日香の目の前に駆け寄ってくると、凶暴な獣と化した客のひとりを刹那の一瞬で一蹴する。

「ここは屍鬼^{ゾンビ}の巣窟よ！ 生きた人間はここにいちやいけないわ！」

女はキツと僕と明日香に対し、睨みを利かせながら言い放つ。

「屍鬼！？」

「あたしの名前はルージェ・フォン・ハインヒルド。まあ、それはともかく。キミたちはさっさとこの場から逃げるんだね。屍鬼やあの怪物はあたしが始末するのに邪魔となるからね」

女はルージェ・フォン・ハインヒルドと名乗る。んで、そう名乗った直後、僕と明日香を出入り口付近へと強引に連れて行く。

（あ、あれ、あの女の左腕って確か骨折していたような……）

出入り口付近まで強引に連れて来られてしまった僕は、ある不自然な点に気がつく。さっき見た時は、確かに骨折していることが誰が見ても分かる普通なら曲がらない方向へと湾曲してしまっていた女――ルージェのか細い左腕が、まるでなにもなかったかのような状態となっていることに――

「と、とりあえず逃げようか！」

「は、はいですよ！」

とお互いの顔を見合いながら咄嗟に出入り口のドアの方へと踵を返す僕と明日香だったが！

「ケケケケ、逃がすかよ！ お前らは獲物なんだよ、ギャハハハハッ！」

天井にへばりついた状態のまま僕らのことを“獲物”と下品な笑い声とともに言い放つマルツアのドス黒い気も悪い長い舌がドバツと伸び縮みし、さらにドリルのような螺旋状に展開させながら僕と明日香に対して襲い掛かる！

第5話「不死者」その5（前書き）

んゝ、私オリジナルの邪神を考えてみましたW
魔道書、邪神&その眷族、色々考え中です^^

第5話「不死者」その5

第5話「不死者」その5

ドシャツ！ 骨が砕け、骨が潰れ、肉が穿たれる、肉がズタズタに切り裂かれる。

そんな表現が強ち間違っではない音程のひん曲がった奇妙な音が響きわたる。

「う、うわあああああっ！」

怪異マルツアのドリルを連想させる螺旋状に自前の蛇のような長く、そして伸縮自在の舌が、咄嗟に僕と明日香を庇う形で目の前に立ちはだかったルージェの白くて細く華奢な身体を貫く。

「うぐう……。さ、さっさと逃げるんだ。こいつはあたしが食い止める！ あ、あたしにはこいつを……。 “あの化け物” の眷族をすべて葬りさるという使命があるんだ！」

自身の身体を刺し貫くマルツアのドリルのような螺旋状に展開した触手のような舌を強引に引き抜くと同時に、大量の血を吐くルージェはそう言い放つ。

「チィ、邪魔をしやがって！」

マルツアは憎々しげに舌打ちをする。それと同時にマルツアはパチンツとなにかの合図を送るかのように指を鳴らす。

「ガ、ガオオオオオオオオオッ！」

「ウガガアアアアアアッ！」

人間の声とは思えない獣のような不気味な咆哮を張り上げる一方で、ボーッとした虚ろな表情のまま屍鬼たちは一斉に出入り口付近に詰め寄り始める。

「うわぁ、来た来たぁ！」

逃げろって言われても冷静な判断ができない状況じゃ咄嗟に動け

ないものである。

狂子さん&その愛読書のような【んこみのろくね】がないのでへ銀天使〉に変身することができない僕は、気も悪い唸り声を張り上げ迫り来る屍鬼に驚き冷静さを欠き咄嗟に身動きひとつできない状況に陥る。

「うーん、逃げろって言われてもお、すでに囲まれてますのお」

この状況でよく平然としていられるな、とばかりに明日香にはニコニコと微笑む。なにか策でもあるのか？

「な、なにか策でも？」

とりあえず僕は訊いてみる。なにか策があるのか、と――

「ん？ 策う……みゅーなんの策ですのお？」

「おいおい……」

はあ、なにか策があるのかと期待した僕が間違っていたのかな……。

「なにをやってるの！ 早く逃げなさい！」

本来なら重症で身動きすらロクにできない状態にあるはずのルージェだが、その身体になんの不調も感じさせない素早く、そしてしなやかな動作で迫り来る屍鬼を次々に叩きのめしながら、僕と明日香に対し、ガーッとキツめの声色で言い放つ。

「ひ、ひい！ じゃ、じゃあ、ホントに逃げるよお！」

ここは素直に従った方が……。

僕は明日香の右腕を左手で掴みながら、出入り口のドアノブに手をかける。

「逃がさないって言っただろうが！」

再びマルツアが攻撃を仕掛けてくる。再び、長く気味の悪い舌を螺旋状に展開させながら、それを僕目掛けて放ってくる。

「う、うわあ、またかよ！」

僕は悲鳴を上げながらも咄嗟に身構える。

さて、その次の瞬間だった。

「ふふふふ、ヒーローはこーゆー場面で登場する、というお約束が

あるのよねえ♪」

如何にも正義のヒーローが現れそうなカッコイイBGM？ そう思えるような曲がどこからとこなく流れ始める。

その刹那、ここオカルトグッズ専門店『黒鴉』の出入り口のドアが爆裂する。当然、出入り口付近にいた僕と明日香、そして屍鬼は、出入り口のドアが爆裂したことによって生じた爆風によって激しく吹っ飛ぶ。

「あううう……」

「あらあらあ、ゴメンなさいですのお」

爆風で吹っ飛んだ僕の上に明日香が落下する。しかも僕の顔面にだ！ ううむ、嬉しいような嫌なような……。

それはともかく。

悪魔系のゴスロリな格好の上に羽織るまるで某アメコミヒーローを連想させるような真紅の全身を覆いつくすような大きなマントを爆風と、そんな爆風によってバラバラに吹っ飛び空中に巻き上げられた出入り口のドアやその周辺の物体の細かな粉塵になびかせるひとりの若い女の姿が見受けられる。

「うえー、狂子さん！？ い、いつの間に……」

案の定っていうか、やっぱり狂子さんであった。

さて、よく見ると狂子さんは、ダサイようなカッコイイような？

ある意味で微妙な遮光器土偶を連想させるそんなサンングラスをかけている。その姿はどこか滑稽であった……っと、それはともかくだ。

「屍鬼ねえ、死体を再利用した肉人形。それに天井にへばり付いてる“アイツ”もどうせマイナーな魔道書にしかその名前が記されていないこれまたマイナーな邪神の眷族だろうさね」

遮光器土偶のようなサンングラスをかけているのでどんな目付きで屍鬼や天井にへばり付いている怪異マルツアを見ているかなんてことはさっぱりだけど、如何にも侮蔑に嘲笑といった感じの不快で嫌味で小憎たらしい笑みがニイーと狂子さんの口許には浮かんでいる。

それは明らかな挑発である。んで、そんな笑みをチラッと見ただけでも僕の気分も……。

「き、き、貴様ああああ！　だ、誰がマイナーな邪神の眷族だとお！」

怒声、奇声、とにかく音程がズレまくった気味の悪い大声を張り上げるマルツァは、案の定とばかりに狂子さんの挑発に乗り、天井から飛び降りてくる。

その次の瞬間、なにかがマルツァの顔面、脇腹、右胸、そして股間の4ヶ所に対し、不意打ちとばかりにほぼ同時に攻撃を仕掛ける。

「ぐ、ぐああああああああああつ！　ぬ、ぬ、ぬあああおおおお……」

怪異、人あらざる者とはいえ、マルツァは男性のようだから股間の一撃がもつとも利いたようだ。まあ、そりゃあ……。

「あ、あれは！？」

僕の双眸に狂子さんの周りを飛び交う4機の小型マシンが映り込む。そのうちの2機は背中に搭載されたランドセル型のジェットブースターで空中を滑空する猫型のマシン、残りの2機は堅牢な鋼の翼の生えた黒い球体である。

「ああ、この子たちは〈飛天猫〉、そして〈飛天球〉この私オリジナルの量子コンピューターで制御された自動砲撃システム、自動格闘システム、自動防衛システムの三大機能を有するマシン！　ついでに、アンタみたいな異形で禍々しい生物を自動で襲い掛かるようにセットしてあるのよねえ♪」

ニヤニヤと口許に嫌味ったらしい笑みを浮かべながら説明する狂子さんに対し、当然とばかりにマルツァは激昂する。

「ゆ、許さん！　許さんぞ！　俺様は旧支配者ノルツァプトの血を引く者だ！　それをタダの眷族だと！」

「ホントのことじゃん♪　なあゝに必死になってるのさ」

激昂するマルツァをさらに挑発する狂子さんは、“死ね”という合図を送るとばかりに右手の親指をガツと勢いよく下に向ける。

「旧支配者ノルツアプト!? ああ、【不死者教本】や【吸血鬼読本】などの〈不死者〉になって死を免れよう♪ なんてアホな考えを抱く連中の間じゃ聖書のような本かも知れない魔道書には、その名前がしつこいくらい見受けられる“死の法律を曲げるもの”、“死を知らぬもの”、”死ねないもの”なんていう呼称の邪神ね。私が調べた限りでは、古代エジプトの第18、19王朝あたりだったかな? その頃に信仰されていた神……っていうか悪魔ね。【死者の書】に相反する存在ということで時のファラオ……ラムセス2世だったか3世によって徹底的弾圧され、歴史の闇の中へ消失……。でも、裏では脈々と信仰され続け、現在に至るってところかな」

ニヤニヤと相変わらず挑発的な笑みを浮かべている狂子さんが常に持ち歩いてる天宮 弓子の魔道書こと【書白んこみのろくね】をパラパラと捲りながら、そんなこんなで旧支配者ノルツアプトについて語る。

「あらあら、誰かと思ったらルージェじゃない。ふうん、アンタがここにいてってことは写本を含めて【不死者教本】が近くにあるってことかな?」

屍鬼をすべて行動不能にするまで徹底的叩きのめし、キツとマルツアを睨みつけているルージェに対し、狂子さんが声をかける。

「お前は雉飼 狂司郎の孫の狂子……。まあ、そんなところだ。あたしには“あの本”を写本も含めて、そのすべてを焼き捨てる使命があるんでね。ちょっとでも情報があれば……」

ツカツカという靴音を奏でながらルージェは狂子さんの許へと歩み寄ってくる。

（し、知り合いなのかな? それに雉飼 狂司郎って僕の曾祖父だ!）

そう僕が胸中でつぶやいていると――

「アイツは〈不死者〉の一種である吸血鬼よ。ついでに、【不死者教本】の作者の血縁者でもあるわねえ」

狂子さんが、彼女は――ルージェは〈不死者〉で“吸血鬼”、そ

してあの【不死者教本】の作者の血縁者、とそう僕に語る。

「ん、あの本の作者の血縁者ってのは事実だけど、心の底から嫌になるものさ」

ルージェは首を横振りながら、はあ……と深い溜息をつく。

「貴様らああ俺を無視するなあああ！」

うむ、僕は肝心な奴を――マルツアの奴のことを無視しているようだ。

それはともかく。マルツアは無視されたことに腹を立てて、気が狂ったように襲いかかってくる。

「やれやれ単純な奴ほど、すぐにカーツとなるのよねえ」

「同感、同感……」

狂子さんとルージェは顔を見合わせると同時にふたりそろって溜息をつく。

その直後、狂子さんは自分の周囲を飛び交っている2機の〈飛天猫〉、2機の〈飛天球〉に対し、

「〈飛天猫〉、ドリルフォームよ！　〈飛天球〉、チェーンソーフォーム！」

そんな合図を送ると同時に2機の〈飛天猫〉に頭がドリルへと変形、〈飛天球〉の堅牢な鋼鉄の翼がチェーンソーへと変形し、4機それぞれがスピーディーでトリッキー、そしてデタラメな奇妙な動きを介しながらマルツアに攻撃を仕掛ける。

「なんだ、コイツは！？　ぐお、ぐおああああああっ！」

2機に〈飛天猫〉がマルツアの頭部に左半分と、右の二の腕を穿ち、2機の〈飛天球〉が左右同時に袈裟懸けにマルツアの胴体に斬撃を浴びせる！　まさに一瞬であった。

ああ、当然、マルツアは死亡……。でも、なんだか呆気ない気が……。

「なんだ、呆気ない……」

狂子さんも僕と同じ気持ちのようだ。まあ、そりゃそうだろうな。
「うみゅ!? あの花け物さんがあ蘇ったですのお!」

今まで漠然と様子を見ていた明日香が、そう言って2機の〈飛天猫〉と2機の〈飛天球〉によって全身ズタズタになった惨たらしい惨殺死体となって床に無造作に転がっているマルツアを指差す! ……っと、その刹那、死んだはずのマルツアが気味の悪い青黒い血を滴らせながらユラリとまるで幽鬼のように立ち上がる!

「ひいひいっ!」

僕は思わず悲鳴を上げてしまう。

「うふふ、ゾンビさんみたいですのお♪」

その一方で明日香は胸のところで両手を組みながらニコニコと微笑んでいる。おいおい……。

「ふむ、すでに自らを〈不死者〉と化させていたのか……」

そうつぶやくとルージェは眉をひそめる。

「クヒヒ、俺様はすでに〈不死者〉と化しているのだ! 故に、俺様は不死身なのだ!」

マルツアの全身から気味の悪い青黒い血を噴出す。そんな状態でゲラゲラと笑うマルツアはグロいの一言である。

「まったく、“こいつ”のおかげで俺は無敵の肉体を手に入れられたわけだ! 感謝しねえとな」

懐からなにかを取り出すマルツア……っと、それは、あの【不死者教本】であった!

「やれやれ、弱い犬ほど良く吠えるってのは、まさに今のアンタみたいな奴のことねえ! そろそろ始末をつけてやるわ!」

さて、狂子さんはニヤツと微笑みながら、そろそろ始末を、と言いつつ。

「ぎやははははは、この無敵の俺様を斃すだど! は、笑わせてくれるぜえ」

〈不死者〉と化し、それが強みとなっているマルツアはジュリリと蛇のような長い舌をチラつかせながら大笑いをする。

「ふふふ、減らず口はそこまで！ 次の1発でアンタは滅ぶ！」

そんなマルツァに対し、狂子さんも強気な言葉を言い放つ！

（一体、なにをするんだ、狂子さんは……。なにかトンでもないことでも企んでいるんだろか？）

狂子さんの発言に対し、僕はなにかしらの胸中で不安、杞憂を抱くのだった。

第5話「不死者」その5（後書き）

さてさて、狂子さんが見につけている遮光器土偶を連想させるサングラスには、『飛天猫』と『飛天球』を制御するマイクロコンピュータが仕込まれています。

んで、そんなサングラスの内側には、狂子さんの音声に対応し、『飛天猫』、『飛天球』を複数の対象物を同時にロックオンし、攻撃を仕掛けさせることも可能と設定しています^^

第5話「不死者」その6（前書き）

魔道書【不死者教本】に誕生の秘話みたいなものを書きたいナアと思ってますが時代背景とか勉強しないといけませんねえ^^;

さて、次回で第1章完結って感じで最終話となります。

えっと、エピソードも考え中ですw

もちろん新章も考えてます^^

第5話「不死者」その6

第5話「不死者」その6

旧支配者、外なる神々、人類が誕生する以前の太古の昔、宇宙の暗闇から地球へとやって来た超古代の邪神。

大体の人間が彼らの存在を知らないが、僕——雉飼 狂一の父、狂蔵や叔母の狂子さんのように、彼らの存在を明らかにしようと目論む命知らずの“探求者”も存在する。

んー、そういえば“邪神討伐組織”なんて集団も存在するらしい、と父さんの書庫にあった『怪異邪神レポート1999』とかいうレポートに記されていたけど、僕はそんな連中に出逢ったことがない。まあ、普通に生活していれば、そんな連中に出逢う可能性なんて99%ないだろうけどね。

父さんや狂子さんのような邪神やその眷族の存在を明らかにしよう、なんて危険な行為——と、そんな感じの危険で無謀で、命の保障されない横道へと入り込むようなことを行えば出逢えるかも……ば、僕には出来ないっていうかやりたくもないけどね、そんなことは！

さて、それはともかく。

「その雑魚怪異！ アンタを滅するのに、コイツを使ってあげるわ！」

そう言い放ちビシッと血まみれのゾンビと言っても過言じゃない姿と化した怪異マルツアを勢いよく指差す狂子さんが、スツと右手に頭上に掲げると、その刹那、バチバチという物音を伴いながら、フツとどこからともなく、そんな狂子さんが頭上に掲げる右手の掌に一冊の本が出現する。

（あれは【んこみのろくね】かな！？　じゃ、じゃあ、まさか——）

あの本が【んこみのろくね】だった場合、僕を〈銀天使〉に変身させて、あのマルツァと戦わせようと狂子さんは企んでいるんだろうか？

「そんな怪訝な顔で私を見ないでよね。この本は【戦乙女の足跡】よ」

んー、僕に心中を察したのかな？ フツと狂子さんは僕の方を振り返り、誰が見てみ不愉快な気分になるような笑みを浮かべる。

それはいいとしてだ。

「ケケケ、なんだあその本は？ しかし、バカだぜ、テメエはよお！ この無敵の俺様をそんな本ごときで滅するなんて、アホな方法が通用すると思ってるのかな！」

そんなモノを通用するか、と自信という過信の一言をケケケと不気味な嘲笑とともにジュルリと紫色の気味の悪い舌をチラつかせながら、マルツァは言い放つ。

「やれやれ、頭の悪い奴はすぐにそうやって見た目だけで判断するのよねえ……」

ふう、と溜息をつきながら首を横に振る狂子さんが、そう言った直後、本は――【戦乙女の足跡】は、赤く光り輝く禍々しい文字が全体に刻まれた一本の漆黒槍へと、その形状を変化させる。

「この本は本来、死後、“戦乙女”に例えられるような第1次十字軍遠征時に活躍したとある女騎士の足跡を讃えるはずのもののだけど、作中にアンタらなにかしらの邪神の眷族に当たる怪異が十字軍遠征を邪魔立てした記録や、その活躍ぶりから例えられた“戦乙女”が異教の神ということもあって発禁、焚書となってしまった不名誉な書物！ 故に、原本は現存しておらず、この本を含めて写本が数冊残っているのみ……。だけど、アンタみたいな奴を滅する聖なる力は宿っているわ！」

そんなウンチクを言いつつ、狂子さんは聖なる力が宿っている、と豪語する。

「聖なる力！？ あたしには禍々しい邪悪な力の間違いじゃないのっ

て思えるんだけど……」

ルージェは苦笑を浮かべながらつぶやく。

「それ同意できるね」

「はいですの」

顔を見合わせる僕と明日香は、ルージェのその言葉に同意する。

「なにか言ったかなあ、狂一クン！」

「ひ、ひいいっ！」

遮光器土偶のようなサングラスのせいで、どんな目付きかはさっぱりだけど、殺気と怒気、そんなものが入り混じったオーラを発しながら、ギラリと僕の方に視線を向ける狂子さんに対し、僕は恐れおののく！

「ふん、まあいいわ。さっさと始末をつけておくかなあ……」

さて、狂子さんがそう言った直後、赤く光り輝く禍々しい文字が全体に刻まれた漆黒の槍へと変貌を遂げた【戦乙女の足跡】が、ゴオオオオッという轟音を奏で疾風のような勢いを伴いながら、一直線にマルツアに向かって螺旋を描きながら飛び交う！

「ギャハハハッ！ この無敵のマルツア様をそんなモノで斃そうという浅ましい考えを今すぐに撤回させてやるぜええ！」

笑い声を上げるたびに青黒い血がドビュツと頭などから噴出している痛々しい姿のマルツアだが、自信満々……っていうか、如何にも過小評価しているような言葉を口にし、ファイティングポーズすら取らないラフなポーズで迎え撃つ。

「クヒヒ、馬鹿なことをす……！？　ぐぎゃあああああああつ！」

その刹那、“俺様は無敵だ！”と豪語するマルツアと狂子さんが投げ放った……というか、まるでミサイルのように空中を轟音を奏でながら飛び交う赤く光り輝く禍々しい文字が全体に刻まれた漆黒の槍と化した【戦乙女の足跡】がぶつかり合う！　その瞬間、マルツアの首から下が粉々に吹っ飛ぶ。

あ、ちなみに【戦乙女の足跡】は、マルツアの頭から下の身体を粉々に吹っ飛ばすと同時に元の本の姿に戻り、同時に空中を飛び交

いながら、持ち主である狂子さんの手許へと戻ってくる。

「ほら、こいつは写本だけど、甘く見るから、そんな風になっちゃうのよねえ♪」

狂子さんはそう言いながら、首だけとなってゴロリと床に転がるマルツアを冷ややかに見下ろす。

「く、く、く、くそおおお！ こ、こ、この無敵の俺様がああ！」

苦悶の悲鳴、憎悪の嗚咽、首だけとなったマルツアはそんな状態でも生きている！ 流石は〈不死者〉ってところなんだろうか？

それはともかく。

「ぬ、ぬああああ！ こ、このままでは済まさん！」

首だけという状態ながらもギャーギャーと喚くマルツアは、自前の気味の悪い青黒い舌をビロ〜ンツとチラつかせ、それを器用にも足代わりと使い地面を蹴るようにバウンドさせながら逃げようとするが――

「逃げさないよ！」

ルージェが咄嗟に動く。シャツという空気を切り裂くような音を奏でながら――

その次の瞬間、首だけという状態のそんなマルツアが、縦一文字、横一文字――まるで十字架が刻まれるかのように4つの肉塊となって碎け落ちるのだった！

これでマルツアに真なる死が訪れたんだろうか……っと、いやいや、そんな状態でもマルツアはしぶとく生きている。

だけど、動くことすらままならないので死んだも同然だろう。

それはともかく。

「ふう、止めは私が刺してやる予定だったのに……。まあ、【不死者教本】が無事ならいいかな」

自分が止めを刺す予定だった、と狂子さんは如何にも残念そうにつぶやくと、真紅のルージュが艶かしい唇をきゅっと尖らせる。さて、そんな狂子さんの視線は遮光器土偶を連想させるサングラスのおかげでどこを見ているのか検討がつかないけど、僕の予想だとル

ージエがいつの間にか脇に抱える形で持っている一冊の本へと向けられているんだろうなあ。

ん〜、ところで件の本は【不死者教本】なんだろうか……。

「手癖が悪いわねえ……。さてと、そいつをアンタはどうする気なのかな？」

腕組をしながら、なんだか不機嫌そうに狂子さんは訊く。

「そうね、処分が妥当かな……。こいつを読む人間が必ずしも善きことに……。なくって考えるとは思えないし。それにあたしの使命は、この本を回収、廃棄することだしね」

ふ、とルージュは自嘲も兼ねているような笑みを浮かべながら、自身が脇に抱える形で持っている――【不死者教本】へと視線を移す。

「その【不死者教本】が、私が勤務する冥皇学園に保管されていたモノなら回収させてもらいたいけど、見た感じは表紙の色、材質等が違うわね」

狂子さんは眉をひそめる。さて、どうやら冥皇学園に保管されていた方の【不死者教本】の方ではない、と狂子さんは言う。表紙の色、材質等が違うらしい……。つと、それを見極めた狂子さんってなんか凄いナァ！

「写本も含めて、この【不死者教本】はすべて消去すべき、とあたしは考えているわ。この本はあたしの身内が書き記した曰くがあるしね」

ルージエはうつむきながら、【不死者教本】は自分の身内が書き記したものである、と告白する。

「ふむ、アンタが〈不死者〉となった過程はどうあれ身内の作品っていうのはキツイわねえ」

と、狂子さんが言った直後だった。

『やあ、面白いモノを持っているね。だけど、そいつはキミらが持つには荷が重すぎると思うなあ〜♪』

そんな声がどこからともなく響きわたる。

その刹那！

「あああっ！？」 【不死者教本】が！きやうっ！」

ルージュが脇に抱える形で持っている【不死者教本】が、禍々しい黒いオーラのようなものを放ち、それと同時にルージュを弾き飛ばし、天井へと舞い上がる。

再び、謎の声が響きわたる。

『へえ、写本とはいえ、邪悪な魂が宿っているようだねえ♪ 僕はこーゆー本が大好きだよ、うふふ』

さて、天井へと舞い上がった【不死者教本】を見上げる僕らの眼に、黒く禍々しい霧状のモノが天井で蠢く不気味な光景が映り込む。「ふーん、アンタもこいつに興味があるようね、ニヤラトテップ！」

左腕を大きく横へ振りながら、キッと狂子さんは鋭い声で言い放つ。ニヤラトテップと――

「実はねえ、前々から僕はこの本を僕は狙っていたんだ、クフフ……。〈不死者〉へと昇華し、“死”を免れよう！！　なうんて馬鹿げた人間の夢物語を実現させるこの本をね。ああ、そうそう、完全なる〈不死者〉となる方法は原本のみに記されている故、この写本版を読んだところで不完全なモノにしかねないのが現実だねえ」

黒く禍々しい霧状の姿をフツと次の瞬間、胸元の赤い蝶ネクタイが特徴的な白いワイシャツの上に黒い背広、黒い半ズボンという格好をした紅顔の美少年ニヤルの姿へと、その異質異様な姿を変異させる。

「さてと、不完全な〈不死者〉……。不完全なだけに、〈不死者〉となっていられる時間も仮初でしかない。ほら、キミらの足許を見てごらんよ、うふふ♪」

ニヤルは――ニヤルラトテップが、ニヤニヤと嘲笑を浮かべながら僕らを順に見回しながら、そう言った直後、ボロツと泥や砂で作った人形が音もなく崩れ去るように、僕、明日香、狂子さん、そしてルージェの足許に無造作に転がっている屍鬼の残骸や怪異マルツアの残骸がボロボロに土塊へと変わり果てるのだった！

「ふう、写本だと肝心な文章が欠けている場合があるのよねえ……。あの【ネクロノミコン】だって例外なく。足許の土塊は、〈不死者〉となる過程についての肝心な文章が欠いたせいでこうなったんだろうねえ」

狂子さんは皮肉げにそう言いながら、土塊と化し崩れ落ちる屍鬼、そしてマルツアを冷ややかに見下ろすのだった。

第5話「不死者」その7（前書き）

エピソードが完成した段階で第1章完結って感じにしますW
そんなこんなで第2章の期待してくださいませ^^;

第5話「不死者」その7

第5話「不死者」その7

「うふふ、僕ならもつと上手い屍鬼ゾンビを使うところだけどね♪」

如何にも僕らのことを嘲笑っているようにしか見えないケラケラと笑うニヤルは――ニヤルラトテップは、狂気の彩った声色と表情を作って僕らを順に見つめる。

「姿形は違えど、その声はナイアルド・ヴィア・シュヴァイツァー！　こんなところで貴様と鉢合わせになるとはね！」

なにかしらの因縁を匂わせるような言葉を殺気立った声色でルージェが言い放つ。

「へえ、その名前を知ってるってことは、キミ……あの男の血縁者かな、クククク」

ニヤルは天井から音もなく床に降り立つと、喉の奥で昏く笑う。

「ふーん、アンタもアイツとの間になにかあったようね」

「まあね……。アイツは、そりやもう辛い、辛い、辛い思い出を脳裏に刻み込んでくれた相手さ、アイツは……」

フツと溜息を交えるルージェは昏く俯きながら苦笑を浮かべる。

「クククク、写本とはいえ、こりやオリジナルに近いモノだねえ。」

さあて、今まで僕は何人もの〈不死者〉になろうと企みおぞましい猟奇殺人に手を染める“死”に対する恐怖心に駆られ暴走した愚かな人間に出逢ってきたけど、そいつらが保有していた写本版の【不死者教本】は、みくんな誤字脱字や写本した奴の書き忘れや思い違いによって生じた誤った文章のせいでそりや酷い状態だったよ」

ニヤルは喉の奥で笑いながら、パラパラと魔道書【不死者教本】の冒頭あたりのページを捲る。

「ジル・ド・レエ、エリザベート・バートーリー……歴史にも名を

残すおぞましい猟奇殺人を繰り返した鬼畜外道の共通点は、魔道書【不死者教本】を保有していたこと！ さて、そんな連中に【不死者教本】を読むように勧め、あまつさえ【不死者】となることも勧めた張本人つてもしかしてアンタでしょ？」

〈飛天猫〉と〈飛天球〉を自分の周囲に配備しながら、そう狂子さんがニヤルに訊く。

「んー、どうだろうねえ♪ 僕は死にたくない！ ずっと若いままでいたい！ という欲望に駆られる人間のそんな欲望に拍車をかけてやっただけさ、クアッハッハッハア！」

ニヤルは否定するどころか、むしろ楽しんでいるかのように答える。

「ふむ、アンタらしい回答だわ、ホント……」

狂子さんは溜息をつきながら、ニヤルを見つめる。

「さてさて、僕は色々と用事があるんで、これで失礼するよ」

ニヤルはニタニタと如何にも皮肉混じりの嫌味な笑みを浮かべ、自分には色々用事があるから失礼する、と言う。

「逃がすものかああ！」

ルージェが咄嗟に動く。で、僕らの目の前から立ち去ろうとするニヤルに対し、逆袈裟に手刀を放つ！

「あは、あははあ、無駄だよ、そんな攻撃なんかー♪」

ニヤルはフツと黒い霧状の禍々しい姿に変異し、逆袈裟に放ったルージェの手刀を回避する。

「くそ、逃がさない！ 逃がさないよ、ナイアルド！」

ルージェはなおもニヤルを追撃するが、まったく効果なしである。「ふむー、僕は忙しいだよなあ……。あいつらに利用されている化身の一体を奪い返さないといけないしね」

忙しい、と言いつつニヤルは、黒い禍々しい霧状の身体を鞭のようにしならせ、触手のようにうねらせながら、自分に対して追撃を仕掛けるルージェに襲い掛かる！

「お前のそんな攻撃なんかっ！」

ルージエはヒラリとニヤルの攻撃をかわす。

「へえ、身軽だねえ。だけど、僕はどんな姿にでも変化することできる。だからねえ、こーゆーこともできるんだよ、クククク」

ルージエに対し襲い掛かる黒い禍々しい霧状の身体と化したニヤルのそんな身体の一部が分離し、それがいきなりとばかりに網状に展開し、あっと言う間にルージエを捕縛する。

「うわ、くそ！　ここから出しない！　う、うわああああっ！」
網状に展開し、ルージエの身体を捕縛するニヤルの分離した身体の一部がギリギリと捕縛したルージエの身体を締め上げる。

「おっと、暴れない方がいいよ。暴れるとさらに締め上げちゃうから♪」

ニヤルはケタケタと笑いながらルージエの身体を締め上げる。

「ねえ、助けた方がいいんじゃない？」

これは助けた方がいいのかな？　とりあえず僕は恐る恐る狂子さんに訊く。

「ん、そうねえ……。じゃあ、アンタが助けてあげればいいじゃない」

「へッ！？　う、うわ！」

僕が助けてやればいい、と狂子さんが言う。その次の瞬間、僕は〈銀天使〉へと変身する。

な、なるほど、確かに〈銀天使〉になれば……。あ、その前に狂子さん、アンタはなにもしないのかよ！　――って感じだなあ、はあ……。

「と、とりあえず！」

ううむ、なにはともあれ僕は、ニヤルの禍々しい黒い霧状の身体から分離し、網状に展開、そしてルージエの身体を締め上げるそんな身体の一部に対し飛び掛る。

「引き千切って助ける他、助ける方法が思い浮かばないかも……」
シャツと僕は両手の五指に光の爪を展開させる。ビームクローというものかな？　あ、ちなみに狂子さんは〈銀天使〉と化した僕の

身体に大量の武器を内蔵したようだ。やれやれ、人の身体をなんだ
と知っているんだろうなあ、はあ……。

それはともかくだ。

「と、とりあえず、今助けるよ!」

シャツと僕は両手の五指から発現したビームクローでルージェの
身体を締め上げるニヤルの身体の本体から分離し、網状に展開する
そんなニヤルの身体の一部を引き千切る。

「ぎゃあああっ! あ、あたしまで斬らないでよね!」

「あ、ゴメン……」

さて、思わず力が入ってしまったせいか、ビームクローはルージ
エの身体も一緒にズタズタに切り刻んでしまう。でも、〈不死者〉
であるせいか、血まみれの痛々しい姿となるが、それも束の間とば
かりの驚異的な回復力を見せる。

「へえ、やるじゃないか、キミ……」

相変わらずニヤルはニヤニヤと嘲笑を浮かべているが、その眼は
笑ってはいない。

「生意気だねえ……。さて、キミを見ていると、“8年前のアイツ”
のことを思い出すよ!」

「えっ!? うわああああっ!」

フツと黒い禍々しい霧状の姿から人間の姿へと戻るニヤルは、そ
の刹那、右腕を触手の生えた不気味な黒い槍へと変貌させ、僕に対
し襲い掛かってくる。

「このまま立ち去ろうと考えたけど、今のキミのその姿を見ている
とイライラするよ!」

8年前になにがあったのやら? ニヤルは〈銀天使〉へと変身を
遂げた僕に対し、なにかしらの因縁を重ね合わせているようだ。

「うぐうううううっ!」

それはともかく。ニヤルの触手の生えた不気味な黒い槍と化した
右腕が容赦なく僕を襲い掛かる。

「あはは、イライラするからさっさと殺っておくかなあ〜♪」

ドバツと不気味な黒い槍と化した右手から生える触手が蠢き、攻撃をかわしつつ逃げ回る僕の身体を絡め取る。

「し、しまった！」

ぜ、絶体絶命ってやつなんだろうか？とにかく、僕は触手を振り払おうと暴れるが、暴れる度に触手が僕の身体に巻きつき締め上げる！

「うわああああっ！　は、離せ、離せ！」

「あはは、死ねよ。キミを見ているとホンツツツに苛立ちを覚えるんだ！」

ニヤルは顔に狂気が彩る。

8年前になにがあったかは知らないけど、なんだか八つ当たりで殺されるなんて毛頭ない！

「まだ根に持っているようね。まったく……」

僕のそんな様子を見て狂子さんが、ふうと溜息をつくとき、その刹那、ドリルフォームに変形した〈飛天猫〉が、不気味な黒い槍と化したニヤルの右腕から生える触手を次から次へと穿ち始める。

「助かったのかな……」

僕に身体に絡みつく触手も〈飛天猫〉が穿つ。そのおかげで僕の身は自由となる。ふう、気持ち悪かったあ……。

「はあ、またキミか、女クロウリー！　ホンツツツ今日はイライラする日だよ！」

ニヤルは初めて怒りのような負の感情を彩らせる。

「僕はこう見えても弱っているんだ。あいつらのせいだね」

なにやら意味深な言葉をつぶやくニヤルは、次の瞬間、再び禍々しい黒い霧状の姿に変異する。

「この本に記された“死”のエネルギー……。それを活用できれば、8年前に女クロウリー、キミらによって削がれた力の7割が戻る……。だから、邪魔はさせない！　させないよ！」

ニヤルは再び人型に変異する。だが、その姿はおぞましい黒い悪魔であった。

「この姿は今の僕の気分を表現している。キミたちにおぞましい最後をっていう気分が！ さて、小手調べだ。僕の動きについて来ることができれば勝機はあるだろうね、うふふ」

と言った刹那、フツとおぞましい黒い悪魔の姿となったニヤルの姿が僕の視界から消える。

だが、同時に右腕に激痛が走る。

「うわあああああつ！ ぼ、僕の右腕がああ！」

神速、まさに神速の動きで僕の背後にニヤルは回り込み。黒い禍々しい剣へと変貌させた左腕で、ぼ、僕の右腕をあつと言う間に切断する。だけど、血が噴出していない。その代わりとばかりに、切断面から赤や青のコード、精密な電子機器らしいものが見受けられる。

「わー、ロボットさんですのお♪ 狂一くんがロボットにになったですのお♪」

こんな感じでなにも知らないって感じの明日香がキャーキャーと喜ぶ。

おいおい……、人がどんな目に遭っているのか把握してくれよおお！

その前に、僕は人間じゃない。それを改めて知ることとなる。それがショックだったけど、今は嘆いている暇はないだろうなあ、はあ……。

「ふーん、あたしは〈不死者〉だけど、アンタは〈機人〉みたいね」

「〈機人〉！？」

「そうそう、あたしのような〈不死者〉や対邪神戦闘用に開発された人型決戦兵器の総称よ」

「へえ、そうなんだ……つどわああ、い、痛いいいい！」

——と、ルージュがなにやらそんな説明をするが、宙を舞う僕の切断された右腕……。それを見て悲鳴を上げる僕には、それ以上、なにも言えなくなってしまう。

「へえ、アンタも癩癩を起こすんだねえ。それはそうと切断された

右腕はあとで修理するから、そのまま戦ってね、狂一クン♪」

「う、ううう……、そんなぁ……」

ニヤルの神速の攻撃を受け、あっという間に切断、そして宙を舞い床に落下する僕の右腕を拾い上げる狂子さんが、そんな言葉でニヤルを挑発すると同時に、右腕が切断された状態のままで戦え、と身勝手なことを言うのだった。おいおい……。

「ふう、なんで僕はこう不幸なんだ、まったく……」

嘆いても仕方がない。それに文句を言ったところで狂子さんのことだから……。はあ、まったく、イヤになってくるよ。

「あっはっは、右腕が欠損した状態で僕と戦おうなんてなんて勇ましいだ、キミはく♪」

そんな僕の様子を見てニヤルは、侮蔑の嘲笑を張り上げる。まったく、誰のせいでこんな姿に……。

「うふふ、さっきも言ったと思うけど、僕は忙しいんだ。だから、さっさとケリをつけてあげるよ!」

なにを急いでいるんだか……。禍々しい黒い剣と化しているニヤルの左腕が触手のようにうねる。その次の瞬間、禍々しい黒い剣と化したニヤルの右手がドバツと砕け、その破片のすべてが矢となって僕を目掛けて襲い掛かる。

「左手の“煌くトラペゾヘドロ”を使いなさい!」

「えっ!？」

狂子さんが僕に対し、そう叫ぶ!

「い、一体、なんのことだ!？ うあっ!」

カッと僕の左手が光り輝きそんな左手の甲にところどころに赤い線の入った黒い宝石のような物体が出現し、それが赤い光を放ち六角形の光の盾となってニヤルの砕け散った左腕の破片が生み出した矢のすべてを防ぐのだった。

「煌くトラペゾヘドロン!？ ちっ……あれの模造品を造ったな、女クロウリー!」

ここでニヤルが初めて焦りの色を見せる。

「私の得意技のひとつはハッキング！ その気になればペンタゴンやN A S Aの機密情報だって簡単にG E Tする自信があるのよねえ……。そんなわけよ、あの“輝くトラペゾヘドロン”を保管している組織のメインコンピューターに不正アクセスすることくらいじゃないわ」

私の得意技はハッキング！ と豪語する狂子さんの赤いルージュが艶かしい口許に、如何にも傲岸不遜な笑みが浮かんでいる。

「へえ、凄いねえ……。だけど、所詮は偽物だろ？ 本物のように力はないはず！」

ニヤルはケタケタと不気味な笑い声は張り上げる。

「うふふ、それはどうかしら？ 偽物かもしれないけど侮ると酷い目に遭うかもね！」

狂子さんも対抗するようの笑い声を張り上げる。んで、そんな狂子さんがパチンツと指を鳴らすと、僕の左手の甲に出現したところどころに赤い線が入った黒い宝石のような物体が赤い閃光を放ちながら分離し、その奔流が次の瞬間、一本の剣と化し、僕の目の前に舞い降りる。

「煌くトラペゾヘドロン——いや、擬似、“輝くトラペゾヘドロン”より生み出されし赤き光の剣……とりあえず〈赤月魔刃〉と名付けておくかなあ」

うーん、別段、名前なんて要らないんじゃない？……。

それはともかくだ。

「ふ、愚かだね。そんなモノで僕を斃そうっていうのかい？ 考えが甘いねえ」

闇が砕け散ったニヤルの左腕に収束する。で、あつと言う間に元通りに——

さて、ニヤルの姿が再び僕の視界からフツと消失する。

「……ったく、どこを見てるの！」

「えっ！？ のわあああ！」

ルージュにはニヤルの神速の動きが見えているんだろうか？ そ

れはいいとして、咄嗟にルージュが僕を脇に抱きかかながら跳躍する。そのおかげでニヤルの背後からの攻撃を回避することに成功するのだが……。

「あはははあ、それでかわしたつもりなら愚かの極みだね」

ニヤルの哄笑が響きわたる。それと同時にニヤルの背中に無数の触手のようなモノが生える。んで、気味の悪い液体を撒き散らしながら、そんな触手は未だに僕を身体を脇に抱えるかたちでいるルージュに対し、襲い掛かるのだった。

「くうッ！」

触手の先端は鋭く研ぎ澄まされた刃物の切っ先のようなのである。それが僕を庇うルージュの身体にズブズブと突き刺さる。

「ははは、無様だねえ！ さて、お前は〈不死者〉だが、その身体が細切れになったら場合どうなることやら！」

ニヤルは嫌味つたらしく笑いながら、細切れになった場合、〈不死者〉であるルージュの身はどうなるのやら……っと、実証しようと企んだのか？ 彼女に身体に突き刺さる鋭く研ぎ澄まされた刃の切っ先のような状態の触手に力を入れ始める。

「う、うわあああああッ！ くうう、あああああああああああッ！」

触手の一本がルージュの左足を絞め千切る。ブシャアアアッと鮮血を飛び散り、それを浴びた僕は血まみれと化す。

「ふふふ、これで跳躍できないねえ。さあ、次はどの部位を……」

ある意味、ホラー映画の一場面を連想させる猟奇的な光景に僕は啞然とする。

「くううう……、仕方ない。あれを、あれを使うしかない……」

ルージュは苦悶を表情を浮かべながらも抗おうとする。で、なにやら気味の悪い目玉の装飾が施された硝子の球体のような物体を羽織っているロングコートの裏ポケットから取り出し、それをニヤルの方へと向けるのだった。

「おお、それは〈バロールの瞳〉！？ 面白いモノをもってるじゃ

ない♪」

さて、しばしばニヤルと闘う僕やルージェの様子を明日香と一緒に傍観していた狂子さんが、好奇の声を張り上げる。

「へバロールの瞳」だと！ は、そんなモノで僕を……！？ ぐお、なんだ、身体が重い！」

「えっ!？」

ニヤルの動きが急停止する。まるで全身麻痺するかのように――
「へバロールが瞳」は“見た者の心臓を止める”……。そんな効果がある宝具よ。ただし、生き物限定でね。だけど、アンタにそれなりに効果があるなんて凄いアイテムだわぁ♪」

生き物限定で“見た者の心臓を止める”――つまり、見た者を殺すことができる宝具、それがへバロールの瞳」であると解説する狂子さんは狂喜する。狂子さんは、この手の危険な宝物が大好きである。多分、いくつか保有し、自宅のどこかに保管してそうだなあ……。

それはともかく。

「へえ、そんな宝具が存在するんだね。凄い、凄いよ、思わず欲しくなってしまうほどだ！」

ニヤルは邪悪な存在とはいえ、神である。そんなわけでへバロールの瞳」の効果は全身麻痺といった程度であるが、それも束の間である。徐々に徐々にとばかりにニヤルはその身を動かし始めるのだった。

「ほら、なにをやってるの！ 今のうちにそいつで！」

「ナ、ナイアルドを斃せるのは今よ！」

ニヤルの身を全身麻痺状態に追い込んでいるへバロールの瞳」の効果が消える前にケリをつけろ、と狂子さんとルージェが僕の後押しする。

「う、う、うわあああああああああああああああああああああ
あああっ！」

僕は躊躇する。だけど、迷って暇なんてない！ ここはひとつ勇

気を！　僕は雀の涙ほどの勇気を振り絞って〈赤月魔刃〉の切っ先を突きつけるかたちでニヤルに対し、突撃する。

「ははは、そんなモノで僕を斃せると思っているのかい！？　ぐあ、おおおおあああ！」

そんなもので自分を斃せるものか！　とニヤルは豪語するが、その禍々しい顔面に〈赤月魔刃〉の光の刃が突き刺さると事態は急変する。

「へえ、その煌くトラペゾヘドロンはクトゥグアの炎と熱を召喚するものなのか……。こりゃ参ったなあ……」

〈赤月魔刃〉が、煌くトラペゾヘドロンの実体がなんであるか？　それを悟ったかのようにつぶやくニヤルの頭部が、〈赤月魔刃〉より噴出した灼熱の炎とともに砕け散る。

頭部を失ったニヤルの異形の巨体は、ズズーンツという物音をともないながら勢いよく床に倒れこむと、その動きの一切を停止させる。

ニヤルは死んだんだろうか？　そこらへんが気になるんだが……。

「た、斃したのか、僕が……」

僕は呆気にとられ、思わず尻餅をつく。それと同時に〈赤月魔刃〉が小爆破！　粉々に砕け散る。

「やっぱり模造品じゃ、この程度かなあ……」

狂子さんは首を横に振りながら溜息をつく。

それはともかく。

「ふう、なにはともあれ。ご苦労様だわ……つと、これ以上騒ぐと警察の厄介になりそうだから、とっとと裏口からでも逃げるわよ！」

「え、あ、ああ……」

さて、僕は今まで忘れた。今、僕らがいる場所というのが、オカルトグッズ専門店〈黒鴉〉の店内ってことに――

「店の中があメチャクチャになってますのお」

――と、明日香がきょとんとしながら言うように、ここオカルトグッズ専門店〈黒鴉〉の店内は口にできないほどメチャクチャな状

態にある。

「あ、あはは……。とにかく、今は逃げよう！」

僕と狂子さんは咄嗟の裏口へと駆け出す。

「あ、さっき、忘れ物ですよ……。つと、狂一くんがぁロボットさんだったなんて未だに信じられないですのお」

先ほどニヤルによってぶった切られた僕の右腕を明日香が拾い上げると、彼女もまた僕らのあとを追いかけるように裏口へと駆け出す。

「ねえ、あたしのこと忘れてない……。グスン、グスン。酷い、酷い、左足がもげちゃってるのにいいい！」

僕らに置いてけぼりにされたかたちでオカルトグッズ専門店へ黒鴉の店内に取り残されてたルージェが、目尻に涙を浮かべながら、そんな文句を言うのだった。

さて、僕はニヤルが、ニヤラトテップが本当に斃れたのか？

それが気になって仕方がなかった。

うーん、彼のことだ。死んだと見せかけるのもわけないだろう……。

ああ、心配だなあ……。本当に、本当に――

その前に、【不死者教本】はどうするんだよ、狂子さん！

エピローグ（前書き）

第1章完結ですw

引き続き2章って感じで続きますのでよろしくお願いしますm（

）m

エピローグ

エピローグ―新たな闇―

「――まったく、死んだフリなんて紛らわしい真似をするな」

思わずゾツとするような冷やかな声が、一見するとボロボロに朽ち果てた廃墟と化しているかのように思える無残な光景が見受けられるオカルトグッズ専門店〈黒鴉〉の店内に響きわたる。

「やあ、キミに嘘はつけないねえ……。こりゃ参った、参った」

そんな声に反応するかのように、ここオカルトグッズ専門店〈黒鴉〉――だった店の店内に無造作に横たわっている禍々しい悪魔を連想させる異形の首なし屍がムクリと立ち上げる。

「ふふふ、してやられたよ。まんまとあの女とその一味にね。やれやれ、僕は忙しいんだがねえ……。だけど、イイ物を手に入れて僕はハイテンションさ、うふふ」

と嘆く禍々しい悪魔を連想させる異形の首なし屍――ニャルラトテップは、次の瞬間、フツと14歳かそこの小柄な少年の姿に変異する。さて、そんなニャルラトテップの右手には、気味が悪くおぞましい表紙が特徴的な本――【不死者教本】が握られている。

「うふふ、キミがここに現れた経緯を語ってもらおうかな、ハスタ――」

ニャルラトテップはニヤニヤと笑いながら背後を振り返る。

そんなニャルラトテップの視線の先には、白と青で基調されたセーラー服に身を包む髪の高い少女の姿が見受けられる。旧支配者ハスターの化身である蓮田 魅夜美だ。

「ふ、偶然ここへやって来た、と言っても信用しないだろうな。まあ、あえて言えば、この私の“敵対者”をお前の化身の一体を使って復活させようと企んでいる連中の追っている最中。まあ、そんな

ところだ」

「忌々しい奴らだね、ホント……。さて、キミと一緒にいる彼女は誰なのかな？ ま、誰なのかは見ただけで分かったよ」

蓮田 魅夜美ことハスターは、自身の“敵対者”であるモノの復活を企む連中を追っている最中である、と無表情で答える。

さて、そんなハスターの背後に、赤いスパンコールのドレスという衣装に身を包む薔薇のブローチの付いた麦わら帽子を被る長身痩躯の美女の姿が見受けられる。

観る者を虜にするアメジストを連想させる妖しく、そして非常に美しい映えた容姿は、男の夢の中に毎夜毎夜とばかりに現れては誘惑し、虜にする蠱惑的な夢魔のようだ。

「やあ、シュブニグラス。キミも化身を作って、この町へやって来ていたんだね」

ニヤルはニヤニヤと笑いながら、美女にそう声をかける。

「この町は面白い。実に面白いわ。こーゆーモノを作り出す“魔術師”もいることだし」

美女は――シュブニグラスの右手には、心臓を模した大きなダイヤモンドの塊が見受けられる。それはまるで本物の心臓のようにドクン、ドクンと脈を打っているかのように見えるほどリアルである。

「ふふふ、この町はホント面白いね。まさか、“あの連中”の支部もこの町の中にあるみたいだしね。あはは、なんだかワクワクしてきたよ♪」

楽しみが増えた、とニヤラトテップはゲラゲラと腹を抱えて笑い出す。

「ふふ、面白いことを思いついたかも……」

ゲラゲラと腹を抱えて笑うニヤラトテップは、口の周りをペロリと舐めながら、面白いことを思いついた、と言ってハスターとシュブニグラスを順に見つめるのだった。

策謀する邪神たちのことはさておき。

「はあ、平和だなあ……」

フワッと吹き抜けていく暖かな春風……いやいや、もう夏に近いせいか暑苦しさすら感じてしまう風をその身に受けながら僕は――雉飼 狂一は、ついに先日、立ち入り禁止が解除され元の和やかな公園とへ回帰した安座主公園のほぼ中心にある噴水池のところの設置されているベンチのひとつに座ってボーッとしていた。

「はあ、穏やかだなあ……。でも……」

多分、それも束の間の平和なんだろうな、きっと……。それを思うと不安になってなってくるものである。

「結局、吸血鬼も見当たらなかったし、【不死者教本】も行方不明のままねえ……」

今はなにも考えないでボーッと雲ひとつない蒼穹を眺めていたいところだけど、僕と一緒に安座主公園の噴水池のところにあるベンチのひとつに座ってくつろいでいる諏訪部先輩がそうはさせてはくれないはずがなかった。

「吸血鬼とか、【不死者教本】とか、もう面倒くさいからどうでもいいよ……」

今はなにも考えたくない僕は適当に返事をする。

「ふーん、吸血鬼なんてどうでもいいか……。酷いこと言うのね」

「えっ!？」

そんな声が背後から聞こえてきたので僕はギクリッと身を震わせる。

「ま、まさか……」

恐る恐る僕は背後を振り返る。そこには、両手にアイスクリームを持ったルージュの姿が……。っと、その次の瞬間、右手に持っているアイスクリームを僕の口の中に思い切り突っ込んでくるのだった! 「フ、フガガァ!」

「この間、あたしを置いてけぼりにした罰よ！　まあ、とりあえず、これくらいで許してあげる」

この間の一件！？　多分、オカルトグッズ専門店〈黒鴉〉での一件だろうな、きつと……。

「ねえ、このお姉様は誰？」

両目をぱちくりさせきよとしながら、そう諏訪部先輩が訊いてくる。

「ん、あたし！？　そうねえ、俗に言う吸血鬼って存在かな……。あ、証拠を見せてあげないと信じちゃくれなそうだから――」

ニヤリと微笑みルージエは、自分が吸血鬼である証拠を見せる、と言うとガブリッと僕の首筋に背後から自前の鋭く尖った犬歯に突き立てる。

「ひゃ、ひゃあああっ！」

諏訪部先輩は、両手を口許に当てながら悲鳴を上げる。そ、そりや当然だよなあ……。

――っと、その前に、何故、僕に噛み付くんだよ！

それはともかくとして、痛みは不思議と感じなかった。僕が〈機人〉だからなんだろうか……。

そんなこんなで猫に甘噛みされているようなくすぐったい感じであった。

（はあ、束の間の平和の終わりってことかな、あはは……）

僕は弱々しく笑いながら、やっぱ束の間の平和だったのかあああ、と胸中でつぶやくのだった。

まあ、とりあえず。

今は、これ以上、なにも起きないことを願っておこうかな……。でも、杞憂にすぎないだろうけど……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5212a/>

雉飼 狂子と魔道書【んこみのろくね】

2010年10月8日14時45分発行